

クロス・ブラッドD×D

祐哉

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

愛と絆のストーリーである

登場作品

- ・ハイスクールD×D
- ・ストライク・ザ・ブラッド
- ・艦これ
- ・フェイトシリーズ
- ・魔法少女リリカルなのはシリーズ
- ・ダ・カーポシリーズ

- ・ファンタム・オブ・キル
- ・仮面ライダーシリーズ
- ・アズールレーン
- ・東方シリーズ
- ・クオリディア・コード
- ・戦姫絶唱シンフォギアシリーズ
- ・白猫プロジェクト

# 目次

アナザー・クロスストーリー	
アナザー・ストーリー 夏祭り編	
1	
アナザー・ストーリー ハロウィン編	14
アナザー・ストーリー バレンタイン	
デー編 祐哉編	22
アナザー・ストーリー バレンタイン	
デー編 達也編	31
アナザー・ストーリー ホワイトデー	
編 遊園地トリプルデート編(修正版)	
38	
アナザー・ストーリー 雪菜編	51
アナザー・ストーリー お正月編	67
アナザー・ストーリー 幻想入り編	77
アナザー・ストーリー 幻想入り編	77
その2	86
アナザー・ストーリー 切歌&調編	94
アナザー・ストーリー アイマス編	105
アナザー・ストーリー 里帰り編	105

## ハイスクールD×D編 墮天使の涙

始まり

123

告白されます！

128

デートします。

134

第4話

140

第5話

145

第6話

152

第7話

156

第8話

161

第9話

165

第10話

171

ストライク・ザ・ブラッド編 聖女の右腕

第1話

177

第2話

182

第3話

186

第4話

191

第5話

196

第6話

201

第7話

205

特別編 く修学旅行編く

番外編・修学旅行編その1

223

番外編・修学旅行編その2

228

番外編・修学旅行編その3

233

番外編・修学旅行編その4

240

艦これ編 深海の姫

第6話	第5話	第4話	第3話	第2話	第1話	編 放課後の聖杯戦争	ハイスクールD×D・フェイトシリーズ	第5話	第4話	第3話	第2話	第1話
295	289	284	279	274	269			264	259	255	251	246

第19話	第18話	第17話	第16話	第15話	第14話	第13話	第12話	第11話	第10話	第9話	第8話	第7話
358	354	350	346	341	335	331	325	319	314	310	305	300

第6話	462
第5話	456
第4話	442
第3話	438
第2話	431
第1話	423
止の白露型	
ハイスクールD×D・艦これ編	
教室停	
過去偏 後編	402
過去偏 中編	395
過去偏 前編	389
FGO偏 カルデアの切り札と疾風	
第20話	365

奪われた力	509
第2話	504
第1話	497
ヘルキャット	
ハイスクールD×D・東方編	
幻想郷の	
第7話	468





アナザー・クロスストーリー  
アナザー・ストーリー 夏祭り偏

【祐哉視点】

祐哉「そう言えば明日夏祭りだな」

俺たちは今アニキの部屋で宿題をやっていた。

イツセー「どうしたいきなり」

祐哉「いや明日夏祭りだからアニキはどうするっと思つて」

イツセー「どうするっ言つても俺受験生だからな」

リアス「あらかしくらい良いじゃない」

朱乃「そうですね抜きも必要ですわ」

イツセー「まあそうだな」

〈夏祭り当日〉

祐哉「これからどうする？」

イツセー「適当に回れば良いだろ」

俺とアニキは夏祭りに来て、

達也「あれ、祐哉とイツセーさん」

祐哉「達也も夏祭りに」

達也「ああ」

イツセー「一人か？」

達也「いやそろそろ来ると思う」

???「達也く〜」

達也「来たみたいだな」

祐哉「シャルルさんだったんだ」

シャルル「あれ祐哉君、イツセー君」

達也「ああついさつき会ったんだ」

祐哉「二人はデートか？」

シャルル「／／／え」

達也「まあそう言うことだから」

そう言うのと二人は夏祭りの方に向かった。

イツセー「俺らも行くか」

祐哉「だな」

俺たちも夏祭りに向かった。

???「もしかしてイツセー君？」

イツセー「音姫か？」

音姫「うん！久しぶり」

祐哉「アニキ知り合い？」

イツセー「ああ祐哉と出会う前の知り合いの朝倉音姫」

音姫「朝倉音姫です。ところでイツセー君彼は？」

イツセー「こいつは・・・」

祐哉「アニキの義理の弟の祐哉です」

音姫「弟!!どう言う事イツセー君！」

イツセー「うーん」

祐哉「別に話してもかまわないよアニキ」

イツセー「良いのか？祐哉」

祐哉「ああアニキの知り合いなら」

イツセー「音姫実はな・・・」

カクカクジカジカ四角いムーブ・・・

音姫「そんな事が有ったなんてごめんなさい私・・・」

イツセー「仕方ないって」

姫「でも」

祐哉「俺は気にしませんよ」

イツセー「ほら祐哉もこう言ってるんだから気にするなよ」

音姫「本当に？」

イツセー「ああだから元気出せよ音姫」

音姫「うん！ありがとうイツセー君、祐哉君」

イツセー「ところで音姫は今日は一人なのか？」

音姫「うん。由夢ちゃんやんは友だちと一緒にまゆきは急に用事が入って」

イツセー「・・・って事は音姫は一人で祭りに来たのかよ！」

音姫「そうだけど」

イツセー「祐哉「・・・」」

祐哉「(なあアニキ音姫さんって)」

イツセー「(ああ天然だ)」 チラ

音姫「ん、どうしたの」

イツセー・祐哉「……」

祐哉「アニキ音姫さんと祭り回ったら」

イツセー「良いのか？祐哉」

祐哉「女性を夜道一人にするわけには行かないだろ」

イツセー「だな。音姫これから俺と一緒に祭り回っても良いか？」

音姫「え、良いの？」

イツセー「ああ音姫を一人だと心配だからこれからは俺と一緒に回るよ」

音姫「／／／ありがとうイツセー君」

イツセー「祐哉悪いんだけど……」

祐哉「大丈夫だアニキ適当に回って帰るよ」

イツセー「ああ悪いな」

アニキと音姫さんは一緒に祭りに回りに行った。

祐哉「俺も適当に回るか」

適当に祭りを回つてると……

???「京谷く早く来ないと置いてくわよ」

京谷「今行くって咲」



京谷「／＼咲!!」

咲「／＼付き合ってるんだから別に良いでしょう」

京谷「／＼お、おう」

京谷と崎守さんは手を繋ぎながら祭りを回りに行った。

俺もまた適当に祭りを回りに行った。

祐哉「ヤベー知り合いと話し込んだらこんな時間に」

俺は急いで駅に向かった。

女の子「おかあさん〜おねえちゃん〜どこににいるの」グスツ

一人の女の子が迷子になって泣いてた。

祐哉「あ〜〜もう」

そして・・・

女の子A「おねえちゃん〜〜おかあさん〜」

母親「良かったよ〜二人が迷子になった時はどうしようかと思ったよ〜」

女の子A 「あのねさつきねおにいさんがいつしよににさがしてくれたの」  
・・・・・シーン

女の子が見るとそこには誰も居なかった

女の子A 「??」

女の子B 「きぐうだねわたしさつきね・・・」

祐哉 「ハアハア・・・間に合わなかった」

?? 「兵藤君」

一人の女性が出て来た。

祐哉 「姫乃さん」

姫乃 「兵藤君どうしたのこんな時間に」

祐哉 「まあ色々あつて。そう言う姫乃さんどうして此所に？」

姫乃 「私も色々あつて」

祐哉 ・姫乃 「・・・」

祐哉 「まあ此所に居ても仕方ないから移動するか？」

姫乃 「う、うんそうだね」

俺と姫乃さん駅を出て歩くと・・・



祐哉「何処かに寝泊まりできるところがあればな〜」

姫乃「でもそれらしいの見つかんないね・・・」ガクツ

姫乃さんが突然止まり・・・

祐哉「どうした姫乃さん」

姫乃「ごめん慣れない下駄を履いてきたから足のちよつと痛くて」

祐哉「(まずいなこれ以上・・・) あ、」

姫乃「どうしたの？」

祐哉「姫乃さんあれ」

俺は何処かに指を向けると・・・

姫乃「あれ？あ、」

俺はなんとか一軒の旅館を発見した。

女将「申し訳ありません今混んでまして一部屋しか空いてないんです」

祐哉「それじゃ俺は・・・」

俺が旅館を出ようとした時・・・

姫乃「兵藤君何処に行くつもりなの！」

祐哉「流石に一部屋しか空いてないんだから俺が一緒だとまずいだろ」

姫乃「兵藤君は何処で寝泊まりするつもりなのよ！」

女将「あのもしかして学生のかたですか？」

あれ・・なんだろ嫌な予感が

姫乃「わ、私達兄妹ですから大丈夫です」

祐哉「(おい！そんなんで誤魔化せる訳・・)」

女将「あらそうでしたか兄妹のかたなら安心ですね」

祐哉「(え〜〜〜)」

女将「それではこちらにお名前をお願いします」

姫乃「は、はい分かりました」

姫乃さんが名前を書き終えて俺と姫乃さん部屋に案内された。

女将「それではこちらになります」

女将さんがそう言うのと俺たちは部屋にはいるがあつたの布団が一セットしかなかつ

た

祐哉「(流石にこれはまずい)」

姫乃「兵、兄さん」

祐哉「姫乃さん！それは？」

姫乃「そ、その今は／＼／＼私達兄妹ですから」

祐哉「あ、ああそうだな／＼／＼そのひ、姫乃」

姫乃「／＼／＼は、はいなんですか兄さん」

祐哉「も、もう遅いから着替えて寝るか」

姫乃「は、はいそうですね」

俺と姫乃さんは着替えて布団入ると・・

祐哉「(ね、眠れねそうだ姫乃さんは?)」

姫乃「・・・スウズズ」

祐哉「(寝てるしすげえな)」

姫乃「・・・ーしなー・・」

祐哉「(寝言かな)」

姫乃「・・・一人に・・しないで・・ください・・一人は・・いや・・です・・」グ

スツ

祐哉「(!!)」

姫乃さんは怖い夢を見てるのか姫乃さんは泣いてた

ギュー

俺はそんな姫乃さんいや姫乃を優しく抱き締めた

祐哉「大丈夫姫乃。姫乃は一人じゃない俺がそばにいるからな」

・  
・  
・  
・  
・

姫乃「あれ、私さつきまで・・・兵藤君!!」

祐哉「・・・スウ・・・姫乃は・・・一人じゃない・・・俺がいる・・・」

姫乃「／／／／／ありがとうございます兄さん」

朝になり俺たちは旅館を出って駅に向かった

姫乃「昨日はありがとうございます」

祐哉「ん？（あれ俺なんかしたっけ）」

姫乃「おかげで良い夢が見れました」

祐哉「あくく別にかまわないよ俺は姫乃さんに笑顔にいてほしいから」

姫乃「／／／／／じゃこれは私からの感謝の気持ちです」

チュ

突然姫乃さんはほっぺにキスをしてきた

祐哉「／／／／／姫乃さん!!」

姫乃「／／／／／えへへありがとうございます兄さん」

祐哉「まったたくじゃ帰るか姫乃」

姫乃「はい!! 兄さん」  
こうして俺たちの夏祭りは終わった。

## アナザー・ストーリー　ハロウィン編

「祐哉視点」

イツセー「そう言うば来週だったな」

祐哉「何が？」

達也「来週はハロウィンだからだろ」

祐哉「なるほどな」

三人で話しながら登校してると・・・

祐哉「あれ」

達也「どうした祐哉」

祐哉「いやメールあつて」

イツセー「誰からなんだ」

祐哉「ちよつとまで、えーと」

俺はメールを開き・・・

小猫『祐哉さん来週祐哉さんたちの鎮守府でハロウィンパーティーをするのですがも

し良かったら祐哉さんたちもどうですか?』

祐哉「小猫さんからハロウィンパーティーのお誘いだけどうする?」

達也「俺はヒマだから参加するよ」

イツセー「祐哉はどうするだ?」

祐哉「俺もその日は予定がないから参加するつもりだよ。アニキは?」

イツセー「当然俺も参加するぞ」

祐哉「それじゃ小猫さんに全員参加するって送とくな」

イツセー「ああお願い」

俺は小猫にメールを送りハロウィンパーティーに参加するのだった

くハロウィンパーティー当日く

イツセー「早く着きすぎたかな」

祐哉「別に良いじゃないかな」

達也「そうそう」

朝潮「あれ、祐哉さん」

祐哉「あ、朝潮さん！」

朝潮「約束の時間までまだありますけどどうしたんですか？」

祐哉「いや遅刻したらまずいと思いきや早めに家を出たんだ。不味かったかな？」

朝潮「い、いえ大丈夫です。思ったより早かったのでビックリしただけですから気にしないで下さい」

イツセー「それよりも朝潮ちゃんのそのカッコはハロウィン衣装？」

朝潮「はい！その通りです！」

朝潮さんはハロウィン衣装は魔女っ子帽子と黒いマントを着けた衣装だった。

朝潮「ど、どうですか／＼祐哉さん」

祐哉「うん！すごく似合ってるのよ朝潮さん」

朝潮「あ、ありがとうございます祐哉さん」

荒潮「朝潮姉！」

朝潮「どうしたの荒潮」

荒潮「どうしたんじゃないわ。朝潮姉の帰りが遅いから探したのよ」

朝潮「あ、ごめんなさい」

荒潮「まったく」

イツセー「あれ荒潮ちゃんはハロウィン衣装じゃなんだ」



荒潮 「私のハロウィン衣装は公式にはないからありません」

祐哉 「メメタ」

達也 「それより時間は大丈夫なのか？」

朝潮 「そうでした」

荒潮 「あら」

朝潮 「それでは祐哉さんたちをパーティー会場に案内しますね」

祐哉 「ありがと朝潮さん」

俺たちは朝潮さんの案内でパーティー会場到着した

一同 「ニトリック・オア・トリート!!!」

祐哉 「おぉー」

達也 「すげー」

イツセー 「まじかー」

そして俺たちもハロウィンパーティー楽しんでた。

くイツセーの場合

リアス 「イツセーどうかしら？」

朱乃「イツセー君リアスの衣装より私の衣装の方が似合ってるでしょう」

イツセー「リアスも朱乃すごくキレイで似合ってるよ。」

リアス・朱乃「ありがとイツセー大好き！」

イツセー「俺も二人のこと大好きだよ」

ちなみにリアスと朱乃の衣装は○○○の衣装だった。(どうな衣装だったかは想像におまかせします。)

く達也の場合く

雷「どうかな達也兄さん」

電「似合ってますか？」

達也「二人とも似合ってるよ」

電「へへへ／＼」

ジャベリン「私の衣装はどうですか？達也さん」

調「わ、私も着てみたんだけどどうかな？達也」

夕立「夕立も着ていたぽい。褒めてぽい」

達也「三人とも凄く可愛いよ」

ジャベリン「やったねみんな」

調「う、うん」

夕立「嬉しいぼい」

雷「それじゃ次に達也兄さんのお菓子を貰わないと」

達也「・・・え？」

電「電も欲しいのです」

ジャベリン「ジャベリンが一番に達也さんのお菓子を貰うの〜」

達也「ジャ、ジャベリン」

ジャベリンが突然達也に抱きつき

達也「(ジャ、ジャベリンの胸があ、あたって)」

調「達也は私の」

達也「(後ろからは、し、調の胸が)」

夕立「む〜みんなずるいぼい夕立も達也さんの欲しいぼい」

達也「みんなちよつま・・・アー~~~~」

く祐哉の場合く

雪菜「ゆ、祐哉さん」

ミーシャ「ど、どうかな」

小猫「こ、この衣装」

雪菜・ミーシャ・小猫「二似合ってるかなにや！二」

祐哉「さ、三人ともその衣装は」

雪菜「小猫さんが猫耳と尻尾がありますから私とミーシャさん猫耳と尻尾を着けることにしたんです」

ミーシャ「に、似合ってるかな祐哉」

小猫「にや！」

祐哉「最高だよ三人とも」

雪菜「それじゃ改めまして」

雪菜・ミーシャ・小猫「二トリック・オア・トリート！二」

祐哉「あ、ごめん今お菓子がないから」

雪菜「それじゃイタズラですね」

ミーシャ「うん」

小猫「覚悟して下さい」

祐哉「な、なが始まるだ」

小猫「だからイタズラをするんです」

ペロッ

祐哉「／＼／＼／＼小猫さん」

雪菜「まだ終わりじゃありません」

パクッ

ミーシャ「逆の方も」

パクッ

祐哉「さ、三人ともさ、それ以上は」

ミーシャ「そ、それじゃ今度は祐哉が私たちにイタズラして」

祐哉「え？」

雪菜「わ、私は祐哉さんにイタズラされたいです」

小猫「し、躰が悪い猫たちをイタズラして下さい」

祐哉「ooooooooooooプツン」

その後の事は想像におまかせします。しかし次に日には何人かの女性の肌がスベスベになってた

アナザー・ストーリー バレンタインデー編 祐哉編

【雪菜視点】

明日はバレンタインデーなので祐哉さんのお父様の鎮守府で祐哉さんの為にみんなと一緒にチョコレート作っています。

雪菜「こんな感じでしょうか？」

???「うん良い感じ良い感じ」

私たちは村雨さんの指導のもとチョコレートを作っています。

雪菜「ありがとうございます。村雨さん」

村雨「良いのよ別に、さて他の人は？」

???「うん難しいデス」

???「大丈夫ですか？切歌さん」

切歌「ダメデス綺凜ちゃん」

村雨「大丈夫よ個々をこうしてやれば」

切歌「あ、本当デス」

あつちで頑張って作ってるのは暁切歌さんと刀藤綺凜ちゃんそしてその反対側に居るのは・・・

「うくんやっぱ私は作るより食べる方良いかな」

「コラッ！舞姫！ちゃんと作れ！」

舞姫「分かっているよクリスマスちゃん。祐君の為だもん」

クリスマス「まったく」

暁「でもクリスマスさんが祐哉兄さんの為にチョコを作るなんてやっぱクリスマスさんも祐哉兄さんの事好きなんですわね」

クリスマス「／／バ、バカ／／ち、ちが／／こ、これはな」

舞姫「まったくクリスマスちゃんは本当に素直じゃないな」

暁「本当ですよ。好きなら好きって認めちゃたら良いのに」

フーカ「うんうん」

クリスマス「お前らくなまとめて風穴開けてやろうか」

反対側で騒いでるのは雪音クリスマス先輩と天河舞姫さんみんな祐哉さんの為に頑張ってチョコレートを作っています。

くバレンタインデー当日く

祐哉「あれなんか騒がしいいな」

信二「祐哉知らないのか今日は2月14日バレンタインデーだろ」

祐哉「あくそう言えばそうだった。通りで昨日リアス姉さんたちがキッチンで張り切ってたな」

???「じゃ放課後に」

達也「分かったじゃ放課後にな・・・調」

調「／／うん／／またね」

祐哉「今のって月読さんだよね」

信二「もしかして達也今日月読さんとデートか？」

達也「うくんどうだろう調が今日買ひ物に付き合つて欲しいって言つてたからな」

信二「(それを世間ではデートと言うのでは?)」

祐哉「達也つて以外と動感なんだな」

達也・信二「お前が言うなや〜」

切歌「祐哉いますか？」

祐哉「俺なら個々だよ」

切歌「祐、祐哉こ、これをどうぞなのデス」

祐哉「これって」



切歌「はい！チョコレートデス祐哉にあげます」

祐哉「ありがとう切歌さん」

切歌「切歌デス呼び捨てで呼んで欲しいデス」

祐哉「分かったよ切歌チョコありがとう」

切歌「／／／うん／／」

キーンコーンカーンコーン

く廊下く

舞姫「あ、居た居たおくい祐君」

祐哉「ん、舞姫に綺凜どうした」

綺凜「お兄ちゃん為にバレンタインデーチョコレート作ったからお兄ちゃんに渡したくて、はいお兄ちゃんバレンタインデーチョコレート」

舞姫「私からもバレンタインデーチョコレートあげるね祐君」

祐哉「ありがとう二人とも」

なでなで・・・

綺凜「／／／えへへ」

舞姫「／／／ありがとう祐君」

く放課後く

クリス「祐哉居るか？」

祐哉「居るけど、どうしましたクリス先輩」

クリス「ちよつと良いか？」

祐哉「良いけど」

クリス「来てくれるか」

祐哉「分かった」

クリス「ちよつとお前に渡したい物があつてな」

祐哉「??？」

クリス「／／そのこれお前にな／／か、勘違いするなよ／／お前にはけっこうお世話になつてるからそこお返しなんだからな」

祐哉「それでもありがとうクラス先輩」

クリス「／／／／そうか」

く兵藤家く

祐哉「ただいま」

フーカ「おかえり祐哉」

祐哉「どうしたフーカ入り口前で」

フーカ「実は祐哉にこれを渡したくて・・・」

祐哉「これってチョコ？」

フーカ「／／／うん受け取ってくれる」

祐哉「ああありがたく貰うよ」

ガチャ

暁「祐哉兄さ〜ん」

ドカッ

祐哉「ゴフウ」

村雨「大丈夫祐哉」

祐哉「なんとかな。まったく暁突然出てくると危ないだろ」

暁「ごめんなさい祐哉兄さん」

祐哉「別に良いよ」

村雨「実は私たちも祐哉に渡したい物があるのよ」

暁「祐哉兄さんはいこれチョコだよ」

村雨「村雨からはちよつと良いチョコをあげるわ」

江風「私たちも村雨の姉御に教えて作ったんだだから」

初霜「受け取って下さい祐哉さん」

祐哉「ありがとうみんな」

く祐哉の部屋く

祐哉「まさか今年はこんなにもチョコを貰えるなんてな」

コンコン

祐哉「はい開いてるよ」

雪菜「お邪魔します祐哉さん」

祐哉「どうした雪菜」

雪菜「実は／＼バレンタインデーなので祐哉さんの為にチョコレート作ってしまった」

祐哉「ありがとう雪菜」

雪菜「／＼実は、も、もう一つチョコレートが／＼あ、あるんです」

そう言うとは口紅見たいの入れ物を出して・・

祐哉「もしかしてそれも」

雪菜「はい口紅型のチョコレートです」

祐哉「でもこれってどう食べるんだ？」

祐哉さんが言うとは祐哉さんからチョコレートをとって自分の唇にチョコレート

塗って

雪菜「／／こ、こうやて／／使います」

祐哉「な、な／／」

雪菜「／／私じゃダメですか？」

祐哉「う、／／ダメじゃないけど」

雪菜「／／じゃお願いします祐哉さん」

祐哉「／／お、おう」

チュ・・チュ・・チュ・・

雪菜「・・ハア・・ハア・・ハア・・祐哉さんガッツキです」

祐哉「／／ごめん雪菜が凄く甘かったからがまんできなかつた」

雪菜「／／／／／／祐、祐哉さんお、おかわり入りますか？／／」

祐哉「／／も、貰おうかな」

私はまた唇にチョコレートを塗って・・

雪菜「ど、どうぞ」

チュ・・クチュ・・・・チュ・・

雪菜「・・ハア・・ハア・・ハア・・祐哉さん・・ハア・・私祐哉さんのことが好きです。愛  
しています。」

祐哉「俺も愛してるよ。雪菜」

雪菜「／＼じゃその証拠を見せて下さい」

祐哉「／＼わ、わかった雪菜」

チユ．．

私はその夜祐哉さんと愛し合った

アナザー・ストーリー バレンタインデー編 達也編

【達也編成】

～学校校門前～

放課後になると俺は校門の前で調を待っていると・

調「ごめんなさい・待った」

達也「いや俺も今来た所だから大丈夫」

調「そっかよたった」

彼女は月読調色々あつて今に至る

達也「じゃ行こうか」

調「うん・」

俺と調が学校を出て街に向かった

達也「調はまず何処に行きたいだけ？」

調「まずはCDショップに行きたいんだけど良い？」

達也「ああ構わないよ」

俺たちはCDショップに向かった

くCDショップく

達也「欲しいCDでもあった？」

調「・・・うん今日マリアたちのCDが出るから」

達也「なるほどじゃマリアさんたちのCD探すか」

調「うん!・・・」

CDショップでCDを探していると・・・

???「あれ達也」

達也「うん?一夏先輩」

一夏「ああちよつとアルバイト・・・な」

達也「ドンマイ」

一夏「ハハハ・・・ありがとう」

彼は織斑一夏先輩俺の1つ上の先輩だ

調「達也お待たせ。買って来た」

達也「大丈夫だよ調」

調「あれ?織斑どうしたの?」

達也「個々でアルバイトだつてさ」

調「・・・ドンマイ」



一夏「・・・ありがとう」

そして俺と調はCDショップを出て・・・

達也「次は何処に行く？」

調「う〜んゲームセンターで良いかな？」

達也「ああ良いよ」

そしてゲームセンターに向かった。

達也「調はよくゲームセンターに来るのか？」

調「うん・・・切ちゃんや先輩たちと一緒に・・・」

達也「なるほどね。ゲームセンターに着いたけどまず何からやる？」

調「まずあらから」

そして調が向かったのは・・・

達也「ダンス○ンス○ボリユーション・・・」

調「ちよつとやって来るから見ててね」

達也「／＼わ、わかった」

俺は少し離れている所で調が踊っているところ見ていた。

調「達也どうだ・・・」

チャラ男「ハイ！彼女今のダンス良かったよもし良かったら男さお茶しない？」

調 「ごめんなさい人を待たせてますから」

チャラ男 「別に良いじゃんさ男とお茶しようぜ」

調 「痛た！離して」

達也 「おい！俺の女を離せよ」

チャラ男 「なんだテメエ」

チャラ男が男に襲いかけてきた。

ドカツボコツ

チャラ男 「ごめんなさ〜い」

チャラ男は何処かに消えた

達也 「まつすぐ。調大丈夫か？ケガはないか？」

調 「／／う、うん／／大丈夫」

達也 「よたった」

調 「／／達也さ、さつき／／私の事俺の女って」

達也 「あ／／その／／ごめんつい」

調 「／／ううんその／／ありがとう／／凄く嬉しかった」

達也 「／／あぁ」

一般客 「二(リア充爆発しろ)二」

俺たちはどこかの丘に着いて・

調「今日は付き合ってくれてありがとう」

達也「別にかまわないよ俺も楽しいかったから」

調「達也・私／＼・達也のこと／＼好き／＼です」

達也「ありがとう俺も好きだよ調」

調「くくねえ／＼達也ちよつと／＼目を閉じて」

達也「うん分かった」

俺が目を閉じると・

チユ

達也「・・・え？」

調「えへへ今日は本当にありがとう達也」

達也「・・・俺の方こそありがとう調」

く次の日く

達也「あれなんか重い」

俺が起きると

夕立「……すう……お腹いっぱいぽい」

達也「……あれいつの間に」

コンコン

調「お邪魔します」

雷「おはよう調さん」

電「おはようございます調さん」

調「おはよう二人とも、あれ達也は？」

雷「そう言えばまだ起きてないわね」

調「それじゃ起こしてくる」

電「私たちも行くのです」

コンコン

調「達也起きてる？」

達也「(まずい) 夕立起きてくれ」

調「開けるよ」

ガチャ

調「達也どうし・・・」

達也「いやこれは」

調「・・・」

達也「あの・・・調さん」

調「・・・ちよつと頭冷やそう」

達也「調さんなんでシンフオギアを着けてるのかな」

調「それは・・・」

達也「・・・ハハハ」

調「達也にお仕置きする為に」

達也「え、ちよつ、あーーー」

俺は調にお仕置きを受けた。

・・・なんかデシヤブ

アナザー・ストーリー　ホワイトデー編　遊園地トリプ  
ルデート編（修正版）

【祐哉視点】

バレンタインデーから一ヶ月がすぎ今日はホワイトデーってことなのでみんなで遊園地に来てます。

雪菜「此処が遊園地ですか」

霊夢「雪菜は始めて？」

雪菜「はい。始めて来ました」

調「それじゃ今日は楽しも」

雪菜「はい！・・祐哉さんたち早く行きましょう」

祐哉「ああ今行くよ」

イツセー「雪菜ちゃん楽しそうだな」

祐哉「まあ昨日からワクワクしてたからな」

達也「イツセー先輩は大丈夫ですか？」

イツセー「なんで？」

達也「いやリアス先輩たちも誘わなくて大丈夫だったんですか？」

イツセー「あくリアスたちか」

祐哉「それなら大丈夫だ」

達也「え？」

祐哉「実は・・・」

「一週間前」

イツセー「父さんが仕事上の上司から遊園地のチケットを貰ったけどどうする？」

アニキがチケットを出しながら聞いてきた。

祐哉「うーんそうだな。あ！そうだと来週にはホワイトデーだからペアで行けば良

いじゃない」

イツセー「なるほどだけど誰を誘うかな」

祐哉「まあ俺はバレンタインデーのお返しに雪菜誘うつもりだけどアニキはどうする

？」

イツセー「一回みんなに聞いてみるか」

みんながいるリビングにやって来た

イツセー「そう言うことだけど誰が行く？」

リアス「私と朱乃は無理ね」

祐哉「そうなんですか？」

朱乃「ええその日私とリアスは大学の方で用事がありますの」

アーシア「私もその日学校の方で用事があるので」

ゼノヴィア「私とイリナもその日は用事だ」

リアス「霊夢はどうかしら？」

霊夢「私は大丈夫よ」

祐哉「それじゃアニキのペアは霊夢さんに決定だな」

リアス「今回は霊夢に譲るけど次回は私たちもお願いね。イツセー」

イツセー「ああ今度はみんなで行こうか」

リアス「フフフ楽しみにしてるわねイツセー」

く現在く

祐哉「そんな感じでリアス姉さんたち今日用事だから霊夢さんだけなんだ」

達也「なるほどな」

イツセー「さて俺たちも行くか」

祐哉「だな」

俺たちは遊園地の中に入り・・・



イツセー「最所は何から乗る？」

調「最所はあれ」

月読さんが指差したのは・

祐哉「ジェットコースター」

達也「妥当だろ」

祐哉「マジであれ乗るの？」

雪菜「どうしました祐哉さん」

祐哉「ハハハ大丈夫だよ……多分」

ジェットコースターが終わり

チーーーーーン

雪菜「祐哉さーーーーんしっかりしてくださいーい」

祐哉「ハハハなんか青い物が見える」

雪菜「祐哉さんが壊れた戻って来てくださーい」

数分後

イツセー「落ち着いたか」

祐哉「なんとか」

アニキの力でなんとか正気に戻った

達也「次はどうする」

霊夢「次はあれが良いかな？」

祐哉「お化け屋敷かどうかするアニキ」

イツセー「ペアで入れれば良いじゃないかな」

そしてペアでお化け屋敷に入り

くイツセー・霊夢ペアく

イツセー「霊夢は平気？」

霊夢「イツセー私は巫女で妖怪にはなれてるわ。お化け屋敷ぐらい平気よ。」

イツセー「ですよね」

霊夢「でも一つだけ怖いのがあるわ」

イツセー「え？」

霊夢「イツセーが遠くに行ってしまったり居なくなったりするのが怖い私はもう一人はイ

ヤ」

イツセー「大丈夫だ。霊夢俺は絶対に居なくならから」

霊夢「本当？」

イツセー「ああ本当だよ」

ナデナデ

霊夢「／＼／＼ありがとうイツセー」

お化けたち「（で、出ずれ〜）」

〜祐哉・雪菜ペア〜

祐哉「雪菜はお化けとか平気？」

雪菜「私は仕事上悪霊退場とかやってたんで平気です祐哉さんは？」

祐哉「俺も能力上お化けとか平気だな」

雪菜「なんか私たちって似た者同士ですね」

祐哉「だな」

お化けたち「（「なんだこれは！）」

〜達也・調ペア〜

調「〜〜〜ビクビク」

達也「調大丈夫か」

調「ダ、ダメです」

達也「まさか調がお化けがダメだったんなんて知らなかった」

調「お化けは苦手です」

達也「だけど敵で似たのがいたような」

調「あれは別だから絶対に離れないで達也離れたら許さないから」

達也「大丈夫だよ離れないから」

調「本当に離れない」

達也「ああ離れないよ」

調「／／／うん」

お化けたち「「リア充爆発しろ」」

俺たちは遊園地を楽しんで・・・

イツセー「それそう最後かな」

祐哉「じゃ何にする」

雪菜「私はあれに乗ってみたいです」

祐哉「あれは・・・」

雪菜が言ったのは観覧車だった

イツセー「みんなはそれで良いかな？」

調 「私は大丈夫です」

祐哉 「俺や達也は大丈夫だ」

霊夢 「私も大丈夫よ」

俺たちは二人ペアになり観覧車に乗り込んだ

く 達也・調ペアく

調 「凄くキレイ」

達也 「調ちよつと良いかな？」

調 「なに？ 達也」

達也 「バレンタインデーの事でお礼しようかなって」

調 「お礼ならもう貰ってるよ」

達也 「え？」

調 「だって達也と付き合えたから」

達也 「そっかじゃこれからもよろしく調」

調 「うんよろしく」

く イツセー・霊夢ペアく

霊夢「イツセーさっき言った事は本当？」

イツセー「さっき？」

霊夢「居なくならないって」

イツセー「ああ〜本当だよ」

霊夢「でもイツセーは無理するから」

イツセー「霊夢。大丈夫だよ俺は絶対に霊夢たちの前から居なくならないよ」

霊夢「じゃ約束して」

イツセー「約束するよ霊夢俺は何があっても俺は霊夢の前に絶対に戻ってくるよ」

霊夢「絶対に戻って来てイツセー」

く祐哉・雪菜ペア

祐哉「(よし!) 雪菜少し良いか？」

雪菜「はい？」

祐哉「実は話があるんだけど良いかな？」

雪菜「分かりました。話してなんでしょうか？」

祐哉「雪菜に渡したい物があるんだ」

雪菜「渡したい物？」

俺は雪菜に小さい黒い箱を渡して

雪菜「これは？」

祐哉「開けてみて」

雪菜は箱を開けると・・

雪菜「祐哉さんこれは」

箱に入ってた物は・・・銀のリングだった

祐哉「まあいつかの為の予約かな」

雪菜「／／祐哉さん／／その／／お願いがあります」

雪菜がそう言うのと俺に左手を出し・・

祐哉「／／うん分かった」

俺は雪菜の左手にリングを着けた

雪菜「祐哉さんありがとうございます。ずっと愛してます」

祐哉「俺も愛してるよ雪菜」

チュ

祐哉「雪菜俺のお嫁さんになってくれ」

雪菜「／／はい末永くお願いします祐哉さん」

チュ

俺と雪菜はもう一回キスをした。そして俺たちのホワイトデーは終わった。

〈次の日兵藤家〉

祐哉「あれなんか重いぞ」

俺が隣を見ると・・・

祐哉「・・・え」

俺の隣に居たのは

祐哉「雪菜なんで」

雪菜「うーんおはようございます祐哉さん」

祐哉「雪菜なんで俺のベットに」

雪菜「／／いやその昨日ことでおばさまに言ったら」

イツセー母「それなら一緒に寝ないとダメよ雪菜ちゃん」

雪菜「つって言ってきましたもしかして迷惑でしたか」

雪菜が上目遣いで聞いてきた

祐哉「いやいや迷惑じゃないよ」

雪菜「本当ですか」



祐哉「ああ少しビックリしてただけだよ（その上目遣いは反則だつて）」

雪菜「／＼／＼へへそれなら良かったです」

あれ？ちよつと待つてこれつて

暁「祐哉兄さん朝ごはんできてるわよ」

・・・なーんかやな予感がするな

切歌「どうしましたかツツキー」

暁「切ちゃん実は祐哉兄さん呼びに来て」

村雨「暁ちよつと良い？」

暁「どうたの？村雨に初霜」

村雨「雪菜さん見なかった」

初霜「私たち雪菜さんに用がありました」

暁「私は見てないわね切ちゃんは？」

切歌「私も見てないデス。」

一同「二・・・まさか」

・・・俺もしかして終わった。

みんなが一斉にドアを開けると

雪菜「あれ皆さんどうしました」

暁「フフフまさか雪菜さんを巻き込むなんて」

初霜「悪い人は」

村雨「オシヨキがいるようね」

切歌「キルデース」

暁たちは装備着け、切歌はシンフォギアを纏い

ハハハ止まるんじゃねーぞ・・・

# アナザー・ストーリー 雪菜編

【祐哉視点】

祐哉「じゃ行ってくる。雪菜」

雪菜「はい。いつてらしゃい祐哉さん」

俺は仕事場に向かう為に家を出ようして・・・

祐哉「そうだ雪菜」

雪菜「何ですか？祐哉さん」

祐哉「あんまり無理するなよ。雪菜」

雪菜「大丈夫ですよ祐哉さん。まったく心配性なんだから」

祐哉「仕方ないだろう。もし雪菜になんかあつたら」

雪菜「／／祐哉さん。そ、それじゃ祐哉さん。」

雪菜がそう言うのと顔を近付けてきた。

祐哉「／／ああ」

俺も顔を近付けてキスしようとした。

??? 「コホン！いつまでイチャついてるのかしら？アナタたち。」

祐哉・雪菜 「／／あ！」

後ろから声がして振り向くと・・・

祐哉 「リアス姉さん!!」

リアス 「まったく。雪菜は私たちが居るから祐哉は早く仕事に行きなさい。」

祐哉 「分かりました」

雪菜 「祐哉さん。仕事頑張ってくださいね。この子の為にも」

雪菜はお腹を撫でて言った。そう雪菜のお腹の中には赤ちゃんがいる。

祐哉 「ああ任せてくれ。でもなんかあったら直ぐ連絡してくれ」

雪菜 「はい！分かりました祐哉さん」

そして俺は仕事場に向かった。

く何でも屋『○○○○』く

祐哉 「おはよう」

??? 「おう！どうした？今日はゆっくりだな」

祐哉 「あれ達也だけか？」

達也「他の奴は依頼があつたからもう行つてる。それで今日はどうしたんだ？」

祐哉「雪菜の事が心配だな」

達也「あーそろそろだっけ」

祐哉「ああでもまあリアス姉さんたちがついてるから大丈夫だと思う」

達也「それなら大丈夫か」

祐哉「それで今日の残りの依頼は？」

達也「今の所は無いな」

祐哉「仕方ない書類仕事でもやるか」

く兵藤家く

【リアス視点】

祐哉を仕事に送り数時間がたった。

??? 「リアス姉様大変です」

リアス「どうしたのアーシア」

突然アーシアが部屋に入って来た

アーシア「雪菜さんが！」

リアス「え？」

私はアーシアと一緒に雪菜の部屋に行くと・・・

リアス「雪菜！」

雪菜が部屋で倒れてた

リアス「雪菜！しっかりして！」

雪菜「・・・ハア・・・リ・・・リアス・・・さん・・・ハアハア・・・」

雪菜はお腹を抑え苦しんでいた。

リアス「まさか！」

雪菜「・・・ハア・・・ハア・・・はい・・・ハア・・・」

アーシア「そんな予定では来月のはずじゃ」

リアス「アーシア急いで病院に連絡して」

アーシア「分かりました！」

リアス「雪菜今病院に連絡してるからもう少し辛抱して」

雪菜「・・・ハアハア・・・はい・・・」

アーシア「リアス姉様すぐに来てくれるみたいです」

リアス「分かったわ」

そして病院の先生が来てくれて・・・

【祐哉視点】

達也「祐哉お前のスマホ鳴ってるぞ」

祐哉「サンキューー今行く」

俺はスマホを取り・・・

祐哉「はいもしもし・・・」

リアス『祐哉大変よ！雪菜が！』

祐哉「・・・え！」

俺はリアス姉さんの電話を聞いて、俺たちはすぐに家に向かった。

祐哉「リアス姉さん！」

リアス「祐哉！」

祐哉「それで雪菜の容体は？」

リアス「それが・・・」

祐哉「そんな・・・」

リアス姉さんが言うには雪菜の容体が急に悪化したと言う事だった。このままで行くと雪菜の命が……

『大丈夫だよ』

祐哉「え？」

達也「どうした祐哉？」

祐哉「今声が聴こえたんだ。達也たちは聴こえなかったか？」

達也「いや俺は聴こえなかったぞ」

リアス「私も聴こえなかったわ。」

『あなたの大事な人は絶対に死なせないから』

祐哉「また声が」

リアス「なぜ祐哉だけが急に声が聴こえたのは気になるけど祐哉は雪菜の所に行きな

さか」

祐哉「分かりました」

謎の声は気になるけど俺は雪菜の所に向かった。

雪菜「……ハアハア……祐哉……さん……」

祐哉「俺は此所に居るぞ雪菜」

そう言うと俺は雪菜の手を握った。



雪菜「・・・ハアハア・・・ご・・・んな・・・ハアハアハア・・・さい・・・祐哉・・・ハア・・・さん・・・に・・・迷惑・・・ハアハア・・・かけ・・・て・・・しま・・・て」

祐哉「迷惑じゃない！俺は雪菜と出会えて嬉しかった。雪菜と一緒に居れて俺は幸せだった。だから此れからも俺の側に居てくれ雪菜」

雪菜「・・・ハアハア・・・私・・・ハアハア・・・も・・・ハアハア・・・祐哉・・・さんに・・・出会・・・えて・・・ハアハア・・・幸・・・せ・・・でし・・・た」

俺の手を握ってる雪菜の手が弱くなり・・・

雪菜「・・・ゆう・・・や・・・さん・・・の・・・こと・・・が・・・あ  
い・・・して・・・います・・・」

雪菜の手から力が無くなり・・・

祐哉「雪菜ー！！」

『絶対に大丈夫だよ』

「オギャー！オギャー！」

祐哉「え？」

雪菜が力尽きる前に赤ちゃんが産まれてその直後に俺の手を握ってる雪菜の手が突然に力が戻った。

医者「き、奇跡だ」

「次の日」

医者「もう大丈夫ですよ。赤ん坊、母親共に健康体ですので安心して下さい。」

祐哉「ありがとうございます。」

達也「ところで赤ちゃんは？」

祐哉「今おばさんが見てくれる」

達也「なるほど」

祐哉「俺は今から雪菜の所に行ってくるからあとは頼む」

達也「分かった」

雪菜の部屋に向かって・・・雪菜の部屋の前に着いた。

コン！コン！

雪菜「はい？」

祐哉「雪菜。祐哉だけど今大丈夫？」

雪菜「祐哉さん。大丈夫ですよ。」

祐哉「じゃ部屋に入るよ」

そして俺は雪菜の部屋に入った。

祐哉「身体の調子はどう？」

雪菜「はい！もう大丈夫よ祐哉さん」

祐哉「でも産んだばかりだから無理するなよ」

雪菜「うん・・・あの祐哉さん」

祐哉「ん？」

雪菜「実は祐哉さんの声が聞こえなくなった時に誰かの声が聴こえたんです」

祐哉「雪菜も声を聴いたの？」

雪菜「え？祐哉さんも」

祐哉「ああ。『あなたも大事な人は死なせないから』って言ってた」

雪菜「私は『あの人を悲しませないで』って聴きました」

祐哉「雪菜もしかしたら声の正体って・・・」

く数時間後く

達也「所で祐哉赤ちゃんの名前は決まったのか？」

祐哉「ああ雪菜と考えてある。」

雪菜「はい赤ちゃんの名前は・・・」

祐哉・雪菜「「零菜」」

達也「零菜？」

祐哉「ああ」

リアス「どうしてその名前にしたのかしら？」

祐哉「この子はこれからいろんな事が起きると思うだ。だからこの子には零からいろんな事をチャレンジしてほしんだ。」

雪菜「ダメでしたか？」

アーシア「いえ！凄く良い名前です」

リアス「私も良いと思うわ」

雪菜「ありがとうございます。」

無事に赤ちゃんの名前も決まった。

達也「そうだ祐哉そろそろ良いんじゃないか？」

祐哉「そうだな」

雪菜「？なんか有るんですか？」

祐哉「ああ。雪菜この後俺の部屋と一緒に来てくれないか？」

雪菜「？はい分かりました」

雪菜と一緒に部屋に向かった。

「祐哉の部屋」

雪菜「お、お邪魔します」

祐哉「雪菜。実は前から渡したい物があるんだ。」

机の引き出しから小さい黒い箱取りだし、その黒い箱を開けて雪菜に見せた。

雪菜「え？ゆ、祐哉さんこれって」

祐哉「結婚指輪だよ。本当は雪菜が高校を卒業した後に渡そうと思ったんだけどまあ

赤ちゃんが出来ちゃって順番が逆になっただけ。」

雪菜「・・・祐・・・哉・・・さん・・・」

祐哉「え？」

雪菜は突然泣き出した

祐哉「ゆ、雪菜。どうした」

雪菜「・・・い、いえ・・・す・・・ごく・・・うれ・・・しくて・・・わ、私・・・ど、どう・・・して涙が・・・止まら・・・ないの・・・す・・・く・・・うれ・・・しいのに・・・」

祐哉「(雪菜)・・・雪菜俺と結婚して下さい」

雪菜「／／はい！私を祐哉さんのお嫁さんにしてください」

俺のプロポーズは成功して・・・

一同「「やった!!!」」

祐哉・雪菜「え？」

雪菜「／／／み、みなさん！み、見てたんですかー」

一同「「あ!」」

雪菜「くく／／／キュー／／／」

雪菜は恥ずかしさのあまり気絶した

祐哉「ゆ、雪菜。しっかりしろ」

一同「「・・・よし!それじゃ」」

達也たちは部屋から逃げていった。

祐哉「コラ!お前ら逃げるなーーーー!!」

【エピソード】

雪菜が産まれて、一年半が過ぎ・・・

コン!コン!

「どうぞ」

「入るなぞ祐哉」

祐哉「達也どうした？」

達也「いや、やっと式ができるなっと思っただけ」

祐哉「まあ仕方ないさ零菜の事があつたからな」

???「それも有るけど祐哉の仕事場が変わつたのも一つの理由だろ」

祐哉「アニキ！」

達也「イツセーさんいつの間にも部屋に」

イツセー「ドアが空いてつたから勝手に入らせてもらつたぞ。ところで新たな仕事場

はなれたか？」

祐哉「ああ大分慣れた」

達也「あれ、零菜ちゃんは？」

イツセー「雪菜ちゃんの所か？」

祐哉「いや零菜なら」

零菜「ねえちゃん。ねえちゃん。」

???「どうしたの零菜」

零菜「だっこ」

??? 「おいで零菜」

零菜「うん！」

??? 「ぶー」

??? 「どうしたの？白露」

白露「だって時雨ばかりだっこしてるんだもん」

時雨「ハハハ・・・」

イツセー「なるほど時雨たちに任せてる訳か」

祐哉「零菜も時雨たちになつてから時雨たちに任せてるんだ」

達也「そろそろ時間じゃないのか祐哉」

祐哉「本当だ。じゃ行くか」

コン！コン！

??? 「雪菜入るわよ」

雪菜「はい！どうぞ」

??? 「わぁー凄くキレイです雪菜さん」



??? 「ええ。とつてもキレイよ雪菜」

雪菜 「ありがとうございます。アーシアさん。リアスさん」

??? 「雪菜さんそろそろ時間ですよ」

雪菜 「分かりました。春雨さん」

神父 「……それでは誓いキスを」

祐哉 「雪菜愛してる」

雪菜 「私も愛しています」

春雨 「はぁー雪菜さんと同じウエディングドレスを着てみたいです」

達也 「じゃ俺が着させてやろうか？」

春雨 「え？／／／それって／／／」

達也 「／／／ああその通りだ」

春雨 「／／／よ、よろしくお願いします。」

達也 「／／／お、おう」

雪菜 「祐哉さん絶対に私と零菜を幸せにしないと許しませんからね」

祐哉「大丈夫だ。絶対に雪菜と零菜は俺が幸せにするよ」

雪菜「約束ですよ。祐哉さん」

祐哉「約束するよ。雪菜」

こうして無事に俺たちは結ばれた。

# アナザー・ストーリー お正月編

『雪菜視点』

??? 「うくんもう朝ですか」

朝になり私は目を覚まして

「Zzzzz」

??? 「フフフ祐哉さんまだ寝てます。」

私の隣で寝てる人は兵藤祐哉さん私の大切な人です。そして私はこの人の妻の兵藤雪菜です。

雪菜「でもそろそろ祐哉さんを起こさないと、祐哉さん起きて下さいもう朝ですよ。」

祐哉「うくん朝か」

雪菜「はい！おはようございます祐哉さん」

祐哉「おはよう雪菜」

??? 「おはよう!!」

突然一人の女の子が部屋に入って来た

祐哉「れ、零菜！」

雪菜「もうビックリするじゃないですか！ちゃんとノックして入らないとダメじゃないですか零菜！」

元気良く部屋に入つて来た子は私たちの娘で兵藤零菜

零菜「ご、ごめんなさい母さん」

祐哉「まあまあ零菜も反省してる事だし」

雪菜「はく次からは気を付けるのよ」

零菜「はい分かりました」

祐哉「所で朝早くどうした零菜昨日はあの子たちの部屋に行つてたよな」

零菜「あ！忘れる所だった。時雨さんたちが朝ごはん作つたから呼びに来たの」

祐哉「そうだったかありがとうな」

零菜「うん！だから一緒に行こうよ父さん、母さん」

祐哉「じゃ行こうか雪菜、零菜」

雪菜「はい！祐哉さん」 零菜「うん！父さん」

そして私たちは部屋を出つて食堂に向かつた

「そろそろかな」

「あと一時間で着きますよ達也さん」

俺は年明けにダチの鎮守府に向かっている

達也「ありがとう。春雨」

春雨「いえ」

ちなみに俺の名前は藤丸達也そして俺の目の前に居る女性は俺の妻の藤丸春雨だ  
「でも私たちが行く為に戦艦大和を使うとわね」

達也「仕方ないだろ・・・と・・・を全員連れてくにはこれしかなかったんだから」

### 『信二視点』

「で、なんで俺たちが鎮守府に行く為にバスで移動なんだ」

俺は遠坂信二。今友達の所に向かう為に移動をしてるんだけどなぜかバスで移動していた

「私たちが全員行く為にはこれしか無いんがからさ」

信二「はく分かったよ」

### 『祐哉視点』

「俺たちが食堂で朝ご飯を食べ終わって

??? 「祐哉さん！そろそろ信二さんたちがこの鎮守府に到着するって連絡がありました」

祐哉 「ありがとう暁」

そう俺は雪菜と結婚した後直ぐに鎮守府の司令官になった。それで今来た女の子は兵藤暁。俺の二人目の妻だ。ちなみにこの世界は一夫多妻制なので奥さんは何人か居る

??? 「お父さくん」

祐哉 「ん、どうしたユキ」

俺を呼んだ子は兵藤ユキ。俺と暁の子供だ

ユキ 「ついさつき信二さんが到着したよ」

祐哉 「そうかありがとうユキ」

俺は信二を迎えに行く為に食堂を出た

信二 「やつと着いたな」

?????? 「ええ」

?????? 「お待ちしていました信二さん」

信二「久しぶりマシユ」

マシユ「はいお久しぶりです。」

祐哉「おーい信二」

信二「よっ！」

祐哉「悪いな待たせたな信二」

信二「大丈夫だ問題ない」

???「何言ってるよ信二」

祐哉「マリアさんもお久しぶりです。」

信二を迎えてくれた女性は俺の三人目の妻の兵藤マシユと信二の隣に居る女性は遠

坂マリア信二の奥さんだ

祐哉「マシユ悪いんだけど信二たちを案内してくれるかな」

マシユ「任せて下さい祐哉さん。それではこちらです」

信二「サンキューマシユ」

???「祐哉さん」

祐哉「ん、どうした村雨」

村雨「達也さんたち到着したそうよ」

この女性は俺の四人目の妻で兵藤村雨だ

「祐哉「ありがとう村雨」

達也「たちが待つてゐる方に向かった

達也「到着つと」

??? 「あれ誰もいません」

??? 「予定より早く着いたせいね」

祐哉「おいこつちだ」

春雨「あ、あそこに祐哉さんが居ます」

達也「じゃ行くか」

達也の近くに居るに女性二人は藤丸雷と藤丸電で二人とも達也の

奥さんだ

達也「久しぶりだな」

祐哉「ああ」

達也「信二たちは」

祐哉「もう来てるよ」

くその夜く



祐哉「なんでこうなった」

そう夜に年明けに飲み食いをしていたらみんな（女性だけ）酒がはいり

村雨「ハハハ祐哉どうです？村雨の胸は」

祐哉「わー人前で服を脱ぐなー」

雪菜「祐哉さん私なんか凄く暑いです」

祐哉「そう言つて雪菜も服を脱ぐなー」

暁「あれれ祐哉さんが二人いるなんで」

マシユ「ボーーー」

祐哉「暁！マシユ！二人とも戻つてこいー」

こんな感じで酔っぱらいカオスな状況になつてた

祐哉「それより達也！信二！お前らもなんとしろよ」

信二・達也「チーーーーーン」

祐哉「わああー達也！信二！」

二人とも奥さんたち捕まり酷い状態になつてた

???「祐哉さんこつちです」

祐哉「あ、ああ分かつた」

???「此処まで来ればもう大丈夫です」

祐哉「ふうーありがとう白音」

俺を助けてくれたのは搭城白音まだ結婚はしてないけど俺の大切な人の一人だ

白音「いえ私は別に」

祐哉「・・・そろそろ良いかな」

白音「え？」

祐哉「白音俺と結婚してくれ」

俺は白音の目の前に行き指輪をだした

白音「ダメ、ダメです私は」

祐哉「どうして白音は俺の事キライか？」

白音「そんな事ないです！」

祐哉「それじゃどうしてダメなんだ？」

白音「それは・・・私と居ると祐哉さんたちの邪魔になりますから」

イラ

祐哉「白音！」

白音「はいなんで！」

俺は白音の唇を奪い突然キスをした

白音「んー祐ーダメーです」

祐哉「……ぷは」

白音「なんで」

祐哉「それは白音が間違った事を言ったからだ」

白音「え？」

祐哉「当たり前だろ誰が白音の事邪魔だと言った。俺は白音とも一緒居たいんだよ。だから俺の側にいろ白音」

白音「あ……本当に……祐哉さんの……居て良いですか？」

白音が泣きながら俺に聞いて来た

祐哉「当たり前だろ白音俺の白音の事が愛してるだから俺と結婚してくれ白音」

白音「はい！私で良ければ祐哉さんのお嫁さんにしてください」

そして俺は白音に指輪を着けた。

白音「祐哉さんいえ……祐哉これからもよろしくお願いします。」

祐哉「ああこちらこそよろしくな白音」

白音「祐哉さつそくお願いが有るんだけど良いかな」

祐哉「ああ良いよ」

白音「今日は祐哉と一緒に居たいですけど良いですか？」

祐哉「構わないよ。お姫様」

そう言々と白音をお姫様抱っこした

白音「きやゆ、祐哉これは少し恥ずかしい」

祐哉「イヤかい？」

白音「ムーそう言うのズルい」

祐哉「ハハハそれじゃ行こうか？」

白音「はい！祐哉」

こうして俺は白音と一晩過すごした。

# アナザー・ストーリー 幻想入り編

『祐哉視点』

祐哉です。実は凄くピンチです。

祐哉「うわ~~~~なんだこれは」

「祐哉。私を祐哉のお嫁さんにして」

「お兄さーん私と結婚して」

「待って下さい私の旦那様」

「私と一緒に暮らしましょう」

「「祐哉さーん」」

何故かたんさんの女性に追いかけてられています

祐哉「なんでこうなっただー」

〜数時間前〜

『達也視点』

??? 「達也さんちよつと良いですか？」

達也「なんだ文さん？」

俺は仕事が終わって家に向かう途中に文さんに捕まった

文「いや実は良いお茶葉を貰いました」

達也「そのお茶葉大丈夫なのか？」

文「大丈夫ですよ。私も飲みましたし」

達也「それなら大丈夫か」

文「それではどうぞ達也さん」

達也「それじゃ有りがたく貰うよ」

文さんからお茶葉貰い再び家に向かった

文「フフフこれで達也さんと鈴仙さんの仲がより発展するでしょう。」

達也「ただいま」

祐哉「達也居るか？」

俺が帰って直ぐに祐哉が来た

達也「どうした？祐哉」

祐哉「いやさつきアニキたちに会ってな来週博麗神社で宴会するから達也たちに知らせる用について頼まれたんだ」

達也「教えてくれてありがとうな。上がるか？祐哉」

祐哉「良いのか？このあと鈴仙さんと約束があるんじゃないのか？」

達也「鈴仙なら仕事で遅れるてさつき連絡があつた」

祐哉「なるほどなそれじゃお邪魔するぞ」

達也「ああ適当に座つててくれ今お茶をだすから」

祐哉「悪いな達也」

ーお茶準備中ー

達也「ほい祐哉」

祐哉「サンキュー。あれお茶葉変えた？」

達也「実はさつき文さんから貰つた物を使ったんだ」

祐哉「へー」

お茶を飲もうとした時突然スマホが鳴り出した。

達也「鈴仙からだ。出てくるから先にお茶飲んでくれ」

祐哉「分かつた」

ーお茶頂き中ー

祐哉「鈴仙さんなんだって？」

達也「仕事が終わつて今こっちに向かつてるてさところでお茶はどうだ？」

祐哉「うん？普通のお茶だけど」

ガシャーーン

誰かだ突然トビラを開けて来た

??? 「祐哉ー」

祐哉 「え？」

一人の女性が祐哉に飛び付いて来た

祐哉 「く、くるみ」

くるみ 「祐哉私もう我慢出来ない」

祐哉 「な、なにが？」

くるみ 「だって祐哉が早く私を貰ってくれないから私は早く祐哉のお嫁さんになりた

いのに」

達也 「祐哉またなんかしたのか？」

祐哉 「何にもしてねーよ」

??? 「お兄さん居る？」

??? 「祐哉さん居ますか？」

祐哉 「こいしに権」

達也 「(あれなんかいやな予感する)」

祐哉 「二人ともどうした？」



こいし「お兄さんに伝えたい事があるの」

椀「私も祐哉さんに伝えたい事がありました」

祐哉「伝えたい事？」

こいし「こいしねお兄さん事がずっと好きだったのこいしをお兄さんの彼女して」

椀「私も祐哉さんの好きです。だから彼女にして下さい」

くるみ「むっ、祐哉のお嫁さんは私なの」

祐哉「く、くるみ」

??「祐哉さん！私の旦那様になって」

祐哉「えー」

女性たちは祐哉のもとに一斉に向かって来た

祐哉「こ、このままじゃ」

だが突然女性が一斉に倒れた

祐哉「え？」

鈴仙「二人とも無事？」

達也「鈴仙！」

祐哉「なんとか」

鈴仙「なにがどうしたの？」

達也「それが祐哉がお茶飲んだら突然くるみさんたちが来たんだ」

くるみ「フッフ」

祐哉「なっ！」

鈴仙「そんなもう動けるなんて、祐哉は早く逃げさい原因は私たちが探すから」

祐哉「わ、分かったあとはお願ひします。」

くるみたち「「「まっつてー」」」

こうして祐哉は女性たちから逃げ出した

### 『祐哉視点』

く 現在く

ルナサ「祐哉私と一緒に奏でましょう」

小傘「祐哉さんわたしの思いに驚け」

小鈴「私一緒に来てください」

麟「祐哉さん私と一曲どうですか？」

みとり「私から逃げるのを禁止だ」

祐哉「わーっ助けて」

俺はひたすら女性たちから逃げてった

??? 「祐哉こつちだ」

俺は呼ばれた方に向かった

こいし 「あれお兄さんは？」

権 「どこに行つたのでしようか」

ナズーリン 「私の能力で祐哉見つけて見せるさ」

ーどっかの場所ー

祐哉 「ありがとうございます妹紅さん」

妹紅 「事件の出来事はさつき鈴仙たちから聞いた」

祐哉 「そうですか」

妹紅 「今入った情報で犯人はどうやら文とてゐの仕業らしい」

祐哉 「なるほど。それで今はどうな感じですか？」

妹紅 「今頃鈴仙たちオシヨキしてるころだろう」

文・てゐ 「「ぎゃー」」

こうして事件は解決した。もちろん俺も後からオシヨキした

ーその後ー

こいし 「お姉ちゃんお兄さん所行ってくるね」

さとり「ええ」

こいし「／＼／＼今日は何でお兄さんと遊ぼうかな」

権「祐哉さん今頃何をしてるんだろう／＼／＼もう少ししたら会いに行きましょう」

エリー「その調子よくるみ」

くるみ「・・・よしこれで完成よ」

エリー「でもまさかくるみが男の為に手作り弁当を作るなんてね」

くるみ「／＼／＼だつて祐哉に、美味しい、ついでに貰いたいから」

ーその頃祐哉の家ー

イツセー「ハハハそれは大変だったな」

祐哉「笑い事じゃないよアニキ」

イツセー「悪い悪い」

こいし「お兄さん居る？もし良かったら一緒に遊んでくれるかな」

権「祐哉さんこのあと暇ですか？」

くるみ「祐哉さん昼御飯を作ったから食べてくれるかな」

祐哉「みんなどうしてもう薬の効果は消えてるのに」

イツセー「大丈夫だおそろくみんな正常だ」

祐哉「え？」

「イツセー「それじゃ頑張れよ」  
祐哉「えー」」

## アナザー・ストーリー 幻想入り編 その2

【祐哉視点】

文さんとてゐさんが起こした事件から数ヶ月がたった。

祐哉「うくんもう朝か」

朝になつて起きると

???「あ、祐哉起きた？」

祐哉「ああ起き・・・な、何で此処にいるくるみ！」

くるみ「え？入り口が開いてたから」

祐哉「マジ？」

くるみ「マジ」

・・・あれ確か俺ちゃんと閉めたよな

???「お兄ちゃん！おはよう！」

後ろから声がして

祐哉「わ！な、なんだ」

突然後ろから抱き着けられた

??? 「私だよ。お兄ちゃん」

祐哉 「こいし！」

うん？こいし・・・まさか

こいし 「うん！こいしだよ」

祐哉 「こいしもしかして家のカギを開けたか？」

こいし 「・・・てへ♥？」

・・・

こいし 「無意識だから仕方ないね」

祐哉 「仕方ないよこいし」

くるみ 「なんかごめん祐哉」

祐哉 「いやもう来ちゃたら仕方ないから朝食しよう」

こいし 「うん！」

くるみ 「いやこいしは少し反省しなさいよ」

こうして俺たちは朝食食べ終わって

祐哉 「さて朝食を食べたことだし二人ともどうする？」

こいし 「私はお姉ちゃんが心配するから帰るよ」

くるみ 「実はこれから夢幻館の模様替えがあるの」

祐哉「だったら俺も手伝いに行こうか？」

くるみ「でも祐哉これから用事はないの？」

祐哉「今日は暇だったから別にかまわないよ」

くるみ「じゃ良いかな？」

祐哉「ああ」

こいしは家に帰って俺はくるみと夢幻館に向かう途中に人里に入って・・・

祐哉「人里まで来たけどなんか買ってきた方が良いのかな？」

くるみ「うーんどうだろう」

???「あれ祐哉とくるみさん」

声がしてその方に向くと・・・

祐哉「達也と早苗さん」

くるみ「二人ともどうしたの？」

達也「実はつい最近人里に喫茶店ができたからそこ向かう途中」

早苗「はい！」

くるみ「まだ時間あるから私たち行かない？」

祐哉「別にかまわないよ。俺とくるみも行って良いか？」

達也「俺はかまわないよ」



早苗「私も良いですよ」

こうして俺たち四人は新しい喫茶店に向かった。

祐哉「此処が新しい喫茶店か」

達也「えーと名前は・・・」

早苗「喫茶店艦これレーン」

くるみ「とりあえず入って見よう」

俺たちは艦これレーンに入って・・・

???「いらつしやいませお客様。何名様ですか？」

祐哉「四人で」

???「四名様ですね。こちらにどうぞ」

黒髪の女の子に案内してくれたテーブル席に座って

???「こちらがメニューになります。決まったらこちらのボタンを押ししてお呼び下さい」

くるみ「分かりました」

黒髪の女の子は持ち場に戻っていった。

達也「どれを注文する？」

早苗「私はこれで」

くるみ「私も一緒に」

祐哉「だったらみんな一緒に物を注文するか？」

達也「だな」

俺がボタンを押してお店の人呼ぼうとした時・・・

ガジャーン!!!

祐哉「な、なんだ」

達也「あつちからだ」

不良A「おい姉ちゃんたちどうしてくれるだ〜あ〜」

不良B「まったくだぜ姉ちゃんたちのせいでアニキの高い服が汚れちまたじゃね〜

か」

???「申し訳ありません服は弁償しますので」

不良A「それじゃ今此処で払って貰おうか」

???「今からはさすがに難しいのでのちほど支払いをしますので」

不良A「おいおい今すぐ払えないじゃ姉ちゃんたちの身体で払って貰おうか」

???「そんな」

???「あんまりぽい」

不良B「良いのか？店の評判落としても良いか？」

??? 「そ、それは」

不良A 「それがいやなら俺たちの相手してくれよ」

??? 「わ、分かりました。」

??? 「時雨！」

時雨 「でも妹の夕立には手を出さないで下さい」

不良B 「姉ちゃんが俺たち二人を相手してくることか」

時雨 「はい」

不良A 「まずは俺様の靴を舐めて貰おうか」

時雨 「分かりました」

祐哉 「そんでお前は、やっぱり妹の方も舐めて貰おうか、と言う」

不良A 「やっぱり妹の方も舐めて貰おうか。は！」

不良B 「だ、誰だ」

達也 「たっくお前たちは何わざと服を汚してるだ」

不良A 「な、何を言ってるだ」

祐哉 「簡単のことさその女の子が来た時に足を出してこけさせたところだな」

不良B 「な、何で分かっただ」

不良A 「お、おい！」

不良B「あ！」

達也「さてお前たち準備は良い」

祐哉「かわいい従業員にセクハラをしようとしたからなそれなりの覚悟はあるかい？」

不良A「ひく」

祐哉「俺も鬼じゃないから右か左を選びさせてやるよ」

不良B「じゃ右で」

早苗「ノーノーノー」

不良A「そ、それじゃ左」

くるみ「ノーノーノー」

不良A・B「ま、まさか両手ですか」

達也「YES！YES！YES！」

祐哉「それじゃ準備は良いな」

不良A・B「すいませんでしたく」

不良たちはポロポロになって出っぺいた。

祐哉「大丈夫ですか？」

時雨「は、はい大丈夫です」

達也 「君も大丈夫？」

夕立 「大丈夫ぼい」

祐哉 「君に何もなく良かった」

達也 「君たちみたいにかわいい女の子がケガがなくて良かった」

時雨・夕立 「／／／ドキッ」

くるみ・早苗 「む！ ほれ終わったから席つくよ」

祐哉・達也 「え？ちよつま・・・」

俺と達也はくるみたち引つ張らながら戻った。

## アナザー・ストーリー 切歌&amp;調編

## 【祐哉視点】

俺たちは学校の夏休みに入って俺たちは今……

切歌「あ〜全然分らないデス」

調「あ、切ちゃんそこ間違えてる」

切歌「う〜んしばらく答え教えてデス」

調「ダメ！切ちゃんの為にならないから」

ガチャ

祐哉「どう？二人とも宿題は進んでる」

切歌「全然ダメデス」

調「私はそこそこ」

達也「少し休憩しようか」

俺たち四人は俺の家で夏休みの宿題をしていた。そして今は俺と達也が持ってきたお茶とお菓子をテーブルに置いて休憩をしていた。

調 「二人は宿題どこまで進んだの」

達也 「俺と祐哉は八割終わったところ」

切歌 「ゆうやく宿題教えてデス」

調 「祐哉切ちゃんの彼氏だからって甘やかさないでね」

切歌 「祐哉が宿題を覚えてくれたらワタシ祐哉がしたい事何でもしてあげるデス」

祐哉 「な、なんでも・・・」

く妄想中く

祐哉 「切歌俺もう我慢できない」

切歌 「そ、そんないきなりなんてズルイデス」

祐哉 「切歌が可愛いからいけないだ」

切歌 「本当に祐哉はズルイデス。良いデスよ祐哉来て下さいデス」

達也 「おい！祐哉今いやらし事考えただろ」

妄想終了のお知らせ

祐哉 「カンガエテナイヨ」

調 「なぜカタコト」

切歌 「／／ワ、ワタシ祐哉さえよければ良いデスよ／／」

祐哉「え！本当に良いの？」

切歌「／＼／＼・・・コクリ」

達也「コホン！二人とも二人の時間入るのは良いけどそろそろ宿題しようか」

祐哉・切歌「あー！」

達也に言われて我にかれる俺と切歌。そして宿題は夕方まで掛かった。

祐哉「うーんもうこんな時間か」

切歌「なんとかなったデス」

調「うんお陰でだいぶ進んだ」

達也「此所まで進めは大丈夫だろう」

切調「・・・」

切歌「(ど、どうなのデスカ調)」

調「(こ、こうなったら二人で一斉に言おう)」

切歌「(わ、分かったデス)」

切調「(せーの)二人とも来週暇？」

祐哉「あ、ああ俺は暇だけど達也は？」

達也「俺も暇だけどどうした？」

二人が一斉に聞いてきた。



切調 「もしよかったら私（ワタシ）たちと海水浴に行きませんか（デス）」

祐哉 「それなら大丈夫だ。なあ達也」

達也 「ああ問題ない」

切歌 「本当デスか？」

祐哉 「ああ」

達也 「彼女たちの頼みだからな当然だ」

調 「良かった」

こうして俺たち四人で海水浴デートが決定した。ちなみに俺は切歌と達也は調と付き合っている。お互いクリスマススイブに告白して付き合ってる。

く回想く

クリスマススイブ学校が終わり俺と達也は切歌と調の待ち合わせの場所に向かった。

く達也の場合く

達也 「お待たせ調さん」

調 「ううん私も今来た所だから大丈夫」

達也は近くの公園で待ち合わせをしていた。

達也 「じゃ行こうか調さん」

調 「うん」

達也と調はクリスマススイブの町を歩いて高台まで来た

調「わー町がキレイ」

達也「調さんちよつと良いかな」

調「うん良いよ」

達也「調さん！俺はあなたの事が好きです！俺と付き合つて下さい！」

調「!!そつか達也さんも私と一緒にだったんだ」

達也「え？」

調「私もあなたの事が好きです。もしよかったら私の彼氏になって下さい。」

達也「はい！俺でよければ俺の彼女になって下さい」

調「／／うん。これからもよろしく達也」

達也「よろしく調」

こうして達也と調は付き合い始めた。

く祐哉場合く

切歌「祐哉さん来たデスよ」

祐哉「ごめんね切歌ちゃんこんな所に呼んで」

切歌「大丈夫デスよ祐哉さん。ところで話つてなんデスカ？」

俺は切歌を学校の屋上に呼んだ

祐哉「切歌ちゃん！」

切歌「はいデス」

祐哉「俺キミの事が好きです！俺の彼女になって下さい。」

切歌「／／／祐哉さんはズルイデス」

祐哉「え？」

切歌「ワタシも今日祐哉さんに好きって言ったあとにワタシを彼女してつと言うと  
思ったのに祐哉さんに先に言はれましただからこれはワタシからします」

チユ

当然切歌は俺にキスをしてきた。

切歌「／／／これがワタシの答えデス。祐哉」

祐哉「ありがと。切歌」

こうして俺も切歌を彼女にした。

く回想終了く

く一週間後く

こうして俺たち四人は海水浴にきている

祐哉「良い場所があつて良かった」

達也「だな」

早く着替えが終わった俺と達也が待っていると・・・

切歌「おーい祐哉」

調「お待たせ達也」

祐哉「お！来たな・・・」

達也「全然待てないから・・・」

祐哉・達也「(ヤバイ思ったりヤバイ)」

調「どうしたの二人とも」

調の水着はピンク色のワンピースの水着で切歌は緑と白のビキニの水着だった

切歌「もしかして水着が似合っていないデスカ」

祐哉「そ、そんな事ないよとっても似合っている切歌」

達也「ああとっても可愛いよ調」

切歌「／／／ありがと祐哉」

調「／／／うん良かった」

達也「そ、そろそろ海に来たんだから泳ごうぜ」

俺たち四人は海水浴を楽しんだ

祐哉「そろそろ休憩しようか」

達也「そうだなもう昼だから昼飯にしようか」

切調「はい」

祐哉「俺は海の家で昼飯でも買ってくるよ」

達也「じゃ俺は飲み物でも買ってくるかな」

俺と達也は食べ物と飲み物を買いつつ

切歌「うーん調ちよつとお手洗いに行つて良いよデスカ」

調「大丈夫だよ切ちゃん」

切歌「ありがとデス。それじゃちよつと行つてくるデス」

調「切ちゃんはお手洗い行つちやたな」

チャラ男「彼女良かったら俺と遊ばない」

調「友達たちを待つてすから結構です！」

チャラ男「そんな事言わずにさ」

調「それには彼氏がいますので」

チャラ男「そんな彼氏ほつといて俺と良い事しようぜ」

そう言うのとチャラ男が調の腕を引つ張り

調「いたつ放して」

達也「おい！テメエ男の女に何しやがる！」

ボカツ、ドカツ

チャラ男「どうもすいませんでした！」

そう言うのとボロボロになったチャラ男どっかにいった。

達也「調！大丈夫か？」

調「うん。すぐに達也が助けてくれたから大丈夫でも」

ギユ

達也「調！」

調は突然達也に抱きしめた

調「ちよつと怖かったから少しだけこさせて」

達也「ああ調が無事で良かった」

調「達也」

達也「調」

切歌「あ、あの二人ともちよつと良いデスカ？」

調「き、切ちゃん！お手洗いから帰ってきたの」

切歌「はいついさつきデス所で祐哉はまだデスカ？」

達也「祐哉なら思ったより海の家が混んでいてなもう少しかかるかな」

切歌「それじゃワタシ祐哉の所に行くってくるデス」

達也「ああ頼む」

切歌も海の家に向かった。

祐哉「思ったより時間かかってしまった。」

海の家が混んでいて昼飯を買うのに時間がかかってしまい待ち合わせ場所急ぐと水着のお姉さん「あの少し良いですか？」

祐哉「はいなんですか？」

水着のお姉さん突然にお話かけてきた

水着のお姉さん「／／／じ、実は知り合いが海の家に行ったきり帰ってこなくてこのサンオイルぬる人が今居なくてよければ塗ってくださいますか？」

切歌「ダメー！」

祐哉「き、切歌」

切歌が突然来て俺の腕に抱きついたそして・・・

切歌「祐哉はダメデス！祐哉はワタシの彼氏デス絶対にダメデス」

チュ

祐哉「ん！」

チュ、クチャ、チュ

切歌「／／／祐哉は絶対にわたさないデス」

切歌が突然ディープキスをしてきた

水着のお姉さん「なんか悪いかったわね二人ともまさか此所まで見せつけたら頼めな  
いわね」

水着のお姉さんが俺と切歌の事見て諦めてくれた。そして俺と切歌は達也と調が  
待っている場所に向かった。それから昼飯食べたてまた四人で海を楽しんだ。しかし  
この海にきてたのが俺たち四人だけじゃなく学校の知り合いも来ていて俺と切歌のキ  
スシーンを撮られて二学期から学校で俺と切歌は学校内のバカップルとなったのは別  
の話し。



# アナザー・ストーリー アイマス編

「祐哉視点」

祐哉「よつとこれで全部か」

???「ああ」

達也「よしやるか」

イツセー「ところで家で何やるんだ？」

祐哉「バレンタインでチョコもらったからそのお返しにな」

イツセー「なるほどな」

そう俺たちバレンタインのお返しにイツセーさんの家で手作りのお菓子を作るため

にお邪魔している

達也「イツセーさんはお返しは作らないのか？」

イツセー「うーん正直なにを作れば良いのかわからなくてな」

祐哉「じゃ一緒に作らないかイツセーさん？」

イツセー「良いのか？」

???「イツセーが良ければな」

イツセー「サンキュー冬馬」

達也「でも俺たちの知り合いにアイドルが居るのも慣れたな」

祐哉「まあ半分以上の知り合いがアイドルだからな」

俺たちはバレンタインでアイドルたちからチョコもらったのでそのお返し作りはじめた。

イツセー「いま考えるとすげえよなアイドルからチョコをもらってるんだからな」

達也「確かにな」

〈回想〉

2月14日

俺たちアイドルたちに呼ばれてシンデレラプロに向かった。

祐哉「おじやします」

???「いらつしやい」

イツセー「ちひろさんだけです?」

彼女は千川ちひろさんシンデレラプロの従業員だ

ちひろ「いえちゃんと皆さんいますよ。」

イツセー「じゃ何処に?」

ちひろ「今から皆さんには部屋の番号を書かれた紙をお渡ししますので皆さんには番

号に書かれた部屋に向かって下さい。」

ちひろさんがそう言うのと番号が書かれた紙を渡された。

達也「とりあえず番号が書かれてる部屋に行くか」

祐哉「だな」

俺たちは番号を書かれた部屋に向かった。

「イツセーの場合」

イツセー「俺は此所か」

イツセーがドアを開けると

???「ハッピーバレンタイン！」

イツセー「わあ！ち、ちとせ？」

ちとせ「バレンタインだからなワタシからチョコレートだ」

イツセー「あ、ありがとうちとせ」

ちとせ「あ、味は多分だ、大丈夫だと思う」

イツセー「ちとせからの手作りチョコレートなら俺は大丈夫だよ」

イツセーがそう言ううちとせからのチョコレートを食べた。

ちとせ「ドキドキ」

イツセー「うん凄く美味しいよちとせ」

ちとせ「本当！」

イツセー「ああ俺の為にありがとうなちとせ」

ちとせ「／／／うん」

く達也の場合く

コンコン

???「ど、どうぞ」

達也「お、おじゃまします」

???「ど、どうぞ達也さん。バレンティンチョコです」

達也「あ、ありがとう文香さん」

文香「本を見てが、頑張って作りました。」

達也「文香さんの手作りなら全部美味しいよ」

文香「達也さん！／／／は、恥ずかしい事言わないで下さい」

達也「でも／／／本当に文香さんの手作りは美味しいよ」

文香「／／／そんな事言う口はこうです！」

チュ

達也「／／／ふ、文香さん」

文香「えへへ」

く祐哉の場合く

俺は番号が書かれた部屋の前に到着した。

コンコン

??? 「はーい」

声がしたのでドアを開けると

??? 「ハッピーバレンタイン!!!」

祐哉「わ！」

??? 「えへドッキリ大成功」

祐哉「まったく。それで俺になんか用？」

??? 「今日はバレンタインだから私たちから祐哉さんに手作りチョココレートを渡したくて」

??? 「私たちのチョココレートもらってくれますか？」

祐哉「ありがとう。当然キミたちのチョココレートを貰うよ」

??? 「最初はワタシから、はいバレンタインチョココレート」

祐哉「ありがとう。志希」

??? 「次は私はい祐哉さん」

祐哉「ああサンキュー凜」

??? 「最後は私からのチョコレートだよ」

祐哉 「凄く嬉しいよ李依菜」

俺は3人からチョコレートを買った。

祐哉 「今食べも良いかな？」

凜 「うんどうぞ」

祐哉 「それじゃいただきます」

チョコレートを食べる

祐哉 「凄く美味しいよ」

李依菜 「じ、実はもう一個祐哉君にバレンタインチョコレートがあるの」

祐哉 「え？」

そして3人が当然体にリボンを巻いて

志希 「／／／次は」

凜 「／／／私たちを」

李依菜 「／／／た、食べて」

祐哉 「い、いただきますーす!!」

く 回想終了く

祐哉「なんか今年のバレンタインは色々あったな」  
達也「だな」

イツセー「ハハハ」

冬馬「と、とりあえず作りか」

男たち「「ああそうだな」」

お菓子作りは順調に進み

男たち「「「完成だ!!」」」

く3月14日く

くイツセーの場合く

ちとせ「イツセー突然家に呼んでどうしたの？」

イツセー「とりあえず俺の部屋に行こうぜ」

ちとせ「う、うん」

イツセーはちとせと一緒に部屋に向かった。

イツセー「／／／はい。これバレンタインのお返し」

ちとせ「え！これもしかしてイツセーの手作り」

イツセー「あ、ああ」

ちとせ「／＼／＼あ、ありがとうイツセー」

イツセー・ちとせ「／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼」

↳達也の場所

達也「文香さん居る？」

文香「はい。今向かいます」

達也は文香は家の本屋に来ていた。

文香「達也さんどうしたのですか？」

達也「バレンタインでチョコを貰ったからこれお返しのお菓子」

文香「あ、ありがとうございます」

達也「実は袋の中にもう一個小さい箱があるんだけど開けて見て」

文香「分かりました。あ！これですね？」

達也「ああ開けて見て」

文香「はい。開けますね。・・・え！これは」

文香が開けた箱には指輪が入ってた

達也「俺も4月から社会人だからそろそろ覚悟決め用かなって」

文香「達也さん」



達也「文香さんいや文香！」

文香「は、はい」

達也「俺と結婚してください!!」

文香「あ、あれ・・・お、おかしな・・・う、嬉しいはずなのに・・・な、なみだが・・・と、とまらない」

達也「良いだよ文香。それよりも答えを聞かせほしいな」

文香「・・・はい！私の方こそよろしくお願いいたします」

こうして達也と文香は結ばれた

く祐哉の場合く

志希「祐哉君凜ちゃん和李依菜ちゃんと一緒にきたよ」

祐哉「ごめんねわざわざシンデレラプロまで来てもらって」

凜「祐哉さんが私たちに用があるってちひろさんから聞きました」

俺はちひろさんに協力してもらって3人をシンデレラプロに集めて貰った

祐哉「実は3人にはバレンタインのお返しにお菓子を作って来たから受け取ってほしいな」

李依菜「あ、ありがとう」

3人にバレンタインのお返しをあげて



# アナザー・ストーリー 里帰り編

## 【祐哉視点】

祐哉 「フウー、これで最後か。」

達也 「ああそれで最後だ」

祐哉 「あれ？信二たちは？」

達也 「それなら。」

信二 「今終わったよ」

健太郎 「あとは迎えを待つだけだ」

祐哉 「でも今日からあつちで暮らしか」

信二 「どうした祐哉？」

祐哉 「いやなんだかんだこつちに三年いたから。」

達也 「祐哉」

祐哉 「でもやっぱり久しぶりにみんなに会いたいから楽しみかな」

健太郎 「そんだな」

俺たちは三日前に高校を卒業した。そして俺たちは今日幻想郷に帰る日だ

紫「みんなおまかせ」

達也「紫さん！」

俺たちが帰る準備しながら雑談してたら突然目の前にスキマが出てきてスキマの中から八雲紫さんが出てきた。

紫「みんな帰る準備は良い？」

祐哉「今終わったところだからいつでもいいよ」

紫「それじゃスキマを開くわね」

そして紫さんがスキマを開いて俺たちはスキマに入ってしまった。

### 【くるみ視点】

く博麗神社く

くるみ「霊夢く」

霊夢「どうしたのくるみ」

くるみ「あの人が今日帰ってくるって本当？」

霊夢「ええ本当よ今紫が迎えに行ってるわ」

くるみ「そんなんだ、久しぶりにあの人に会えるだ  
 ■■■ えへへ???

魔理紗「おーい霊夢！食材買って来たぞ」

霊夢「ありがとう魔理紗」

魔理紗「ところでくるみはどうしたんだ？」

くるみ「えへへ??」

霊夢「今日あの人に会えるからよ」

魔理紗「なるほど」

霊夢「でもそろそろ戻した方が良いわね」

魔理紗「だな」

霊夢・魔理紗「せくの、くるみ!!!」

くるみ「!!はい！」

魔理紗「やつと戻ってきたか」

くるみ「あれ？魔理紗いつから此処に？」

魔理紗「おいおいワタシにも気が付かなかったのかよ」

くるみ「ハハハ・ごめん」

魔理紗「まったく仕方ないな」

私たちが話していると

紫「幻想郷に到着」

紫たちが帰ってきた。

【祐哉視点】

俺たちは紫さんのスキマから出て幻想郷に帰ってきた。

祐哉「あれ此処は博麗神社か？」

健太郎「そうみたいだな」

幻想郷に書いて話してると

くるみ「祐哉!!!」

祐哉「え？」

突然にくるみが抱き着いてきた

くるみ「本当の祐哉だ」

祐哉「く、くるみ??？」

くるみ「ずっと会いたかった」

祐哉「(くるみ) ただいまくるみ」ギユ

くるみ「うんお帰りなさい祐哉」

霊夢「あなたたちそろそろ離れた方が良いわよでないと私の隣の白黒魔法使いが嫉妬

で何をするのか分からないわよ」

祐哉・くるみ「あ」

俺とくるみは霊夢さんの隣にいる魔理紗の方を向くと

魔理紗「お前私がいるところですよ〜できるな〜」

祐哉「魔、魔理紗！」

魔理紗「ワタシだってな祐哉に抱き着きたいだからな！」

祐哉「魔理紗こっちにおいて」

俺は魔理紗を呼んだ

魔理紗「???良いのか？」

祐哉「当然」

魔理紗「???それじゃ、おじやまするぜ」

ギュー

魔理紗「(あー久しぶりの祐哉の匂いだ)」

霊夢「まったくあなたたちは、ほらこれから宴会の準備があるからあなたたちも手伝

いなさい」

一同「はい」

〜宴会中〜

く達也の場合く

ヤマメ「達也！会いたかったよ〜」

達也「ちよっ！ヤマメ」

早苗「ヤマメさんは達也さんにずっと会いたがっていましたよ。もちろん私も達也さんのこと待っていましたよ。」

達也「そっか。ヤマメ、早苗」

ヤマメ・早苗「は、はい！」

達也「これからはよろしくな。ヤマメ、早苗」

ヤマメ・早苗「こちらこそよろしくお願いします。」

鈴仙「う〜〜〜」

達也「そうだ鈴仙もこっちにおいで」

鈴仙「え？良いの？」

達也「当たり前だろ」

鈴仙「ありがとう達也」

く信二の場合く



信二「霊夢今日はありがとうな」

霊夢「どうしたのよ当然」

信二「俺がそう思ったから霊夢に伝えたかったんだ。ダメだった？」

霊夢「???ダメじゃないわよ。ばか???」

文「あやや霊夢さんだけ一人占めはズルいですよ」

霊夢「???そ、そんなじゃな??くわないわ」

信二「お、おい」

文「ムムムだったらワタシは反対の方から」

信二「マジか」

く 健太郎の場合く

咲夜「健太郎この料理どうかしら？」

健太郎「うん。すごく美味しいよ咲夜」

咲夜「フフフそれは良かったわ」

く 祐哉の場合く

くるみ「はい祐哉。あーん」

祐哉「お、おう???」パク

くるみ「どう美味しい？」

祐哉「うん美味しいよ」

魔理紗「祐哉ワ、ワタシが作ったキノコグラタンも食べてみてくれ」

祐哉「ああ分かった」パク

魔理紗「どうだ？」

祐哉「美味しいよ魔理紗」

魔理紗「???よ、良かったぜ」

こうして俺たちは幻想郷に帰ってきてきて宴会を楽しんでいるんだ

# ハイスクールD×D編 堕天使の涙 始まり

【???視点】

や、やめ、うわわー

きやー

??? 「な、なんで」

た、助け・・・

「ほ、僕はなんてことを」

「きみのどうしたいの？」

「え！」

「俺たちで良ければ聞くよ？」

「きみたちは誰？」

「大丈夫だよ俺たちはきみの味方だよ」

「ほ、本当？」

????????????????????

「ああ本当だよ」

「ぼ、ぼくは・・・」

「よく一人でがんばったな」

「う、うん！」

「よしそれじゃまずは自己紹介からだな」

「俺たちは・・・と・・・だ」

「次はきみの名前を教えて」

「ぼくは名前は・・・」

????????????????????

く数年後く

ジリリリーー！ガシヤーン！

??? 「うゝんもう朝か」

俺は目覚ましをきり目を覚ました。

??????? 「だけど懐かしい夢を見たな。・・・あれからもう6年か」

??????? 「祐哉！朝だぞ起きてるか？」

祐哉 「起きてるよ！アニキ」

俺の名前、兵藤祐哉。15才。6年前俺はある理由から兵藤家に引き取られた。

祐哉「おはようアニキ」

???「おはよう祐哉」

俺がアニキと呼ぶこの人は、兵藤一誠。俺の一つ上の義理の兄で尊敬してる兄だ。アニキのダチはイツセーと呼んでる。

イツセー「今日はどうしたんだ？祐哉けっこうゆつくりだったけど。」

祐哉「6年前の時の夢を見てな」

イツセー「あくあれからもう6年立つのか」

祐哉「あの時はありがとうなアニキ」

イツセー「な、なんだよいきなり」

祐哉「アニキたちのお陰で今の俺が在るからちゃんとお礼が言いたくて」

イツセー「まったくお前は、此れからもなんかあつたら言えよ。俺はお前の兄なんだからな。」

祐哉「ありがとうアニキ」

イツセー母「それより貴方たち時間は大丈夫なの？」

祐哉・イツセー「「え？」」

おばさんそう言つて、俺とアニキは時計を見て・・・

祐哉・イツセー「あああー」

祐哉「ヤバイ遅刻だー」

イツセー「急ぐぞ祐哉」

祐哉「ああ」

祐哉・イツセー「いってきます」

俺とアニキは急いで家を出た。

祐哉「今日から進学なのに遅刻はシャレにならん」

イツセー「そう言う事だ急いぞ祐哉」

祐哉「了解！」

そしてなんとか時間なでに学校に着くことが出来た。

祐哉「なんとか間に合った」

???「進学早々ギリギリって大丈夫か？祐哉」

祐哉「なあ色々あつてな達也」

???「間に合ったから良いだろう。祐哉」

祐哉「だな！所でクラスはどうだった？信二」

俺に話しかけてきたのは、中等部からのダチで藤丸達也と遠坂信二だ。

信二「三人とも同じクラスだったぜ」

祐哉「おおマジか！」

達也「ああ。だから早くクラスに行こうぜ」

信二「そうだあの子も同じクラスだったよ」

祐哉「・・・マジ？」

信二「マジ」

達也「それより早く行こうぜ」

信二「ほらあの子の事はあとで考えれば良いから行くぞ」

祐哉「・・・だな（まあなんとかするしかないか）」

???「・・・同じクラス」

# 告白されます！

【祐哉視点】

く祐哉のクラスく

???「はくいみんな適当に座って、今日からこのクラスの担任になった高町なのはです。よろしくお願いね。」

一同「「ハイ」」

なのは「はい。これから校長先生の話があるので体育館に行きます」

一同「「分かりました」」

校長先生の話が終わって俺たちはクラスに戻った。

なのは「まずは、みなさんに自己紹介をしてもらいます。良いですか？」

一同「「大丈夫です」」

なのは「それじゃ窓際の前の人から順番にお願いします。」



「分かりました。私は・・・マシユ・キリエライトです。」

「時雨です。よろしくお願ひします。」

「夕立ぼい!よろしくぼい。」

達也「(ぼい?)」

信二「(なあ祐哉あの二人つて)」

祐哉「(ああ人間じゃないな)」

「・・・塔城小猫です」

「天河舞姫だよ。よろしくね。」

「綾波です。よろしくです。」

達也「そろそろ俺たちの番だな」

祐哉「そのようだな」

信二「俺の番の用だな」

達也「がんばれ」

信二「遠坂信二です。」

達也「次は俺か。藤丸達也だ。」

祐哉「そして次は俺だな。(ん?)」

俺が視線を感じ視線の方を向けると

小猫「じー」

祐哉「(し、視線が痛い)」

なのは「どうしたんですか？」

祐哉「いや何でもありません。コホン、改めて兵藤祐哉です。」

小猫「・・・じー」

祐哉「(まだ視線が)」

???「テナです。よろしくお願いします。」

???「最後は私ですの。ノアです。よろしくですの」

小猫「・・・じー」

祐哉「(なんだかな)」

く自己紹介が終わって放課後く

祐哉「はくやっぱりまだ塔城さん怒ってるよ」

達也「仕方ないだろ。あんな事が起きたんだから」

く今から1ヶ月前く

その日は俺たちは廊下を歩いてた。

達也「そう言えばもうすぐ春休みだな」

信二「どうした突然」

達也「いやお前らは予定有るのかなって思ってた」

祐哉「なるほどなく」

信二「今の所は予定は無いぞ。祐哉は？」

祐哉「俺も今の・・・」

達也「祐哉!前、前」

祐哉「え?前に何が・・・」

小猫「・・・え?」

ドカーン!!!

俺は突然横から出て来た塔城さんと激突して俺の前が突然暗くなった。

祐哉「あれ俺は・・・」

小猫「あ、あんまり／＼／＼う、動かないでください／＼／＼」

祐哉「え?どう言う事」

小猫「／＼／＼だ、だから／＼／＼あんまり／＼／＼ひゃん／＼」

祐哉「(あれ今変な声が)」

小猫「／＼／＼や、やめて／＼／＼」

祐哉「(そう言えば顔の周りに柔らかい物が)」

小猫「／＼／＼も、もう／＼／＼だめ／＼／＼そ、そんなに動いたら／＼／＼」

祐哉「・・・まさか」

数分後

祐哉「・・・」

小猫「・・・」

祐哉「あ、あの塔城さん」

小猫「・・・嫌い」

祐哉「え？」

小猫「エツチな事は嫌いです!」

祐哉「ぎゃーごめんなさいー」

俺は突然塔城に制裁をうけた。

く現代く

祐哉「でもあれはわざとじゃ」

信二「まあだから俺たちも出来るだけ仲直りに協力するから」

祐哉「ありがとう」

【イツセー視点】

夕方

イツセー「んん」

???「どうした? 相棒」

イツセー「祐哉方はどうだったかな〜と思って」

???「多分大丈夫だろう」

イツセー「だな」

???「あのすいません」

イツセー「きみは?」

???「すいません私は天野夕麻と言います。」

イツセー「天野さんが俺に何の用?」

夕麻「あ、あの! わ、私と付き合ってください!」

イツセー「・・・えー!」

俺は突然今日会った女の子に告白されました。

## デートします。

## 『イツセー視点』

イツセー「あ、あのいきなりそんな事言われても」

夕麻「ご、ごめんなさい。突然変な事言つて」

イツセー「いや別にかまわないよ。キミの用なキレイの人に告白してくれて俺としては得した気分だしな」

夕麻「え／＼／＼」

ドライグ「(あゝこの相棒は)」

天野さんの顔が突然に赤くなりドライグがあきれた用にため息をしてた。  
俺なんか言つたか？

夕麻「あ、あのでしたら来週デ、デートしてくれませんか？」

イツセー「そのぐらいならかまわないよ」

夕麻「ほ、本当ですか！」

イツセー「ああ」

夕麻「ありがとうございます。それでは来週よろしくお願いします。」

天野さんはそう言うか帰って行った

ドライグ「(相棒本当に良いのか?)」

イツセー「(あの墮天使悲しい目をしてた)」

ドライグ「(相棒がそこまで言うなら俺からは何も言わない)」

イツセー「(いつも悪いなドライグ)」

ドライグ「(なあにいつもの事さ)」

そして俺は夕方におきた出来事を祐哉に報告した。

祐哉「来週墮天使の女性とデートだ!!」

イツセー「ああ」

祐哉「はくそれでドライグさん何って」

ドライグ「いつもの相棒のカンだ」

祐哉「いつものかるところでアニキその墮天使はどうなんだ」

イツセー「天野さんはなんだか悲しい目をしてた。」

祐哉「それって」

イツセー「恐らく天野さんは悲しい何かを背負ってと思う」

祐哉「それじゃアニキは何かおきると考えてるって事?」

イツセー「ああ恐らくな。だから祐哉に頼みたい事があるんだけど良いか?」

祐哉「頼みたい事？まあ別にかまわないけど」  
イツセー「サンキュー祐哉。それじゃ・・・」

くデート当日く

天野さんとデートするために待ち合わせ場所の公園にやって来た

達也「・・・で、なんで俺たちがイツセーさんのデートを監視しなきゃいけないんだ  
！」

祐哉「仕方ないだろ！」

信二「まあまあ二人イツセーさんにも理由が有るんだよ」

達也「それでイツセーさん俺たちを集めた理由は何？」

イツセー「俺のカンが正しかったら天野さんが別の墮天使に狙われる可能性が高い。  
だから祐哉たちには天野さんを護衛についてもらいたいんだ」

信二「でもそれならイツセーさんでも大丈夫なんじゃ」

祐哉「恐らく天野さんを守りながら戦うの辛いじゃないかな」

イツセー「祐哉の言う通りだ。相手が戦い中に天野さんを狙われない保証がないんだ。だから祐哉たちには天野さんを戦い中守って欲しいんだ」



達也「まあイツセーさん頼みなら仕方ないか」

信二「俺も構わないよイツセーさん」

祐哉「俺も力になるよアニキ」

イツセー「ありがとうみんな」

〈数分後〉

祐哉たちは近くに隠れて天野さんとのデートの時間になった

夕麻「イツセーくん！ごめん待った」

イツセー「天野さん大丈夫だよ俺も今来たところだから」

夕麻「良かった。あ、あのイツセーくん」

イツセー「なに？」

夕麻「あのねもし良かったら私の事『夕麻』って呼んでくれないかな？」

イツセー「分かったよ夕麻ちゃん」

夕麻「ありがとうイツセーくん」

イツセー「それじゃ行こうか夕麻ちゃん」

夕麻「うん！」

「数時間後」

俺たちはデートも終わり公園に戻って来た

祐哉「今の所は普通のデートだな」

達也「ああそれにもうそろそろデートを終わりそうだな」

信二「このまま何もなければ良いんだけど」

夕麻「イツセーくん今日は本当にありがとう」

イツセー「それは良かった」

夕麻「あのイツセーくんお願いがあるの」

夕麻ちゃんがそう言うと夕麻ちゃんの身体は少し震えてた

イツセー「夕麻ちゃん！」

夕麻「え？」

俺は夕麻ちゃんを抱きしめた

イツセー「夕麻ちゃん大丈夫だ俺は夕麻ちゃん味方だ」

夕麻「イツセーくん」

???「やはりキサマでは無理だったか」

直後黄色い閃光が飛んで来た

夕麻「!!避けてイツセーくん!」

夕麻ちゃんのお陰で突然飛んで来た攻撃を避ける事ができた

イツセー「誰だ!」

???「フフフまさか今のを避けるとわな」

上空から別の墮天使が出て来た。

## 第4話

「イツセー視点」

イツセー「あの・・それで俺にご用ですか？」

リアス「兵藤一誠君あなた悪魔に興味ない？」

イツセー「うん（どうすっかなドライグ）」

ドライグ「(相棒にまかせる)」イツセー「おい！」

ドライグ「(まあ相棒なら大丈夫だろう。)」

イツセー「(マジか！ドライグ)」ドライグ「(ああ)」

リアス「それでどうかしら、兵藤一誠君悪魔になる気はあるかしら？」

イツセー「悪魔になることになにか変わりますか？」

リアス「そうね、悪魔になることには、メリットとデメリットがあるわ。」

イツセー「メリットとデメリット？」

リアス「ええまずは、メリットだけど寿命がすぐく伸びるわ、デメリットは、弱点が増えるわ。」

イツセー「弱点が増える？」

リアス「ええそうよ。まずは十字架ね、あとは聖水ね」

ドライグ「(あとは、ドラゴンスレイヤーだな。)」

イツセー「(マジか！弱点多いな。)」

リアス「まだメリットはあるわ、身体能力が上がるわ。」 イツセー「なるほど。」

リアス「どうかしら？」

イツセー「すいません、すこし考える時間をください、リアス先輩」

リアス「そうよね。いきなりすぎたわよね。ごめんなさい兵藤一誠君」 イツセー「い

いえ大丈夫です。」

リアス「じゃオカルト研究部に入ってくれるかしら？」

イツセー「それなら、大丈夫です。」

リアス「これからはよろしくね。イツセー」

イツセー「はい！」

リアス「それじゃ、部員を紹介すわね。まずは、」

朱乃「私から、オカルト研究部副部長の姫路朱乃と言います。どうかよろしくお願  
いいたします。イツセー君」

木馬「次は僕だね、部員の木馬祐斗よろしく。イツセー君」

???'「最後私ですね。部員の搭城小猫です、よろしくです。イツセー先輩」

イツセー「よろしく。」

そして俺は、家に着いて有りのまま祐哉に報告した。

祐哉「で、どうするだアニキ」

イツセー「どうするって言われても」

祐哉「ドライブさんは？」

イツセー「ドライブは俺にまかせるってよ。」

祐哉「じゃ俺もアニキにまかせるよ。」

イツセー「俺は……」

???「(あなたはどうしたいの?)」

イツセー「俺は……大切な人たちを守りたい」

???「(じゃ答えは決まってるよな!)」

イツセー「ああ同然だ」

祐哉「決まりだな。」　イツセー「ああ!」

次の日の放課後

俺はオカルト研究部に向かって、途中で祐哉と出会い、

祐哉「俺も一緒に行って良いかな?アニキ」

イツセー「別に構わないよ。」

祐哉「サンキューアニキ」

俺と祐哉は、部屋に着いて、

イツセー「部長居ますか？」

リアス「いるわよイツセー」

イツセー「あ、部長」

木馬「イツセー君隣の人は？」 イツセー「あゝ」

祐哉「始めまして、兵藤一誠の弟の兵藤祐哉です。」

リアス「大丈夫なのイツセー」

イツセー「大丈夫です。祐哉ちよつと良いかな？」

祐哉「なに、アニキ」

イツセー「祐哉いつもの。」 祐哉「いいの？」

イツセー「ああ」

祐哉が指を鳴らすと、

小猫「あの人の手が」 木馬「火が出てきた。」

イツセー「祐哉は能力者だ。だから大丈夫ですよ。」

リアス「わかったわ、それでイツセー何の用意かしら？」

イツセー「俺・・・俺に悪魔にしてください。」

こうして俺は悪魔になることを決意するのだった。



## 第5話

【イツセー視点】

リアス「本当に良いのね、イツセー」

イツセー「はい!!部長!」

リアス「わかったわイツセー。」

木馬「祐哉君は良いのかい?」

祐哉「アニキが決めることだから。」

リアス「じゃいくわよ。イツセー」

そう言うのと部長はポケットからチエスの駒をだした。

祐哉「(チエスの駒?)」

チエスの駒が光だし、すぐに光は消えた。

リアス「やっぱり1個じゃ足りないわね。」

部長は1個ずつチエス駒だしては、光だし消えてった。

気付けはチエスの駒8個になってた。

リアス「うくんこれで大丈夫よね?」

そして8個の駒が俺の中に入った。

リアス「8個も使うとなんて、イツセーあなた何者よ。」

イツセー「いや・ハハハ（多分ドライグのせいかな）」　ドライグ「(だろうな。)」

リアス「まあこれかもよろしくね。イツセー」

イツセー「はい！部長！」

リアス「まず悪魔について色々教えるわね。」

イツセー「はい、わかりました。」

兵藤家

【祐哉視点】

家に着くとアニキは真っ白になってた。

祐哉「アニキ大丈夫か？」

イツセー「これが、大丈夫にみえるか？」

祐哉「いや、全然」

♪着信音《ドリームトリガー》

アニキのスマホが鳴り。

祐哉「アニキスマホが鳴ってるよ。」

イツセー「ああ今出るよ。」

アニキがスマホを取り、

イツセー「はい？もしもし」

《リアス》「もしもし、イツセー」

イツセー「はい、なんでしょうか？」

どうやら、電話の相手はグレモリー先輩のようだ。

《リアス》「今晚良いかしら？」

イツセー「大丈夫です。」

《リアス》「○○○工場の前まで来てくれるかしら？」

イツセー「わかりました。」

祐哉「アニキなんで？」

イツセー「部長が○○○工場まできてくれって。」

祐哉「俺も行つて良いかな？」

イツセー「ああ大丈夫だよ。」

俺とアニキは○○○工場に向かった。

【イツセー視点】

イツセー「部長！お待たせしました。」

俺と祐哉は○○○工場に着いた！

リアス「イツセー！大丈夫よ。」

イツセー「部長、今から何が起きるですか？」

リアス「イツセーには、悪魔の仕事に付いておしえるわ。」

祐哉「悪魔の仕事ですか？」

リアス「ええ、そうよ！あと駒の特性に付いて説明するわね。」

部長や俺たちは工場の奥に向かい、人影が出つてきて。

祐哉「グレモリー先輩、あれは？」

リアス「あれは、はぐれ悪魔よ。」

イツセー「はぐれ悪魔？」

リアス「ええ、そうよ。人々を襲い、悪魔の中を外れた。悪魔のことよ。」

祐哉「人々を襲う・・・」

イツセー「(祐哉)」

リアス「私たちの仕事は、はぐれ悪魔の撃退よ。」

朱乃「部長！はぐれ悪魔が！」

朱乃さんがそう言うとはぐれ悪魔がこっち向かってた！

リアス「丁度良いわ、イツセー此処で駒に付いておしえるわね。」  
イツセー「はい！部長！」

リアス「まずは、祐斗の駒、ナイトに付いてよ。」

木馬がはぐれ悪魔に向かい、はぐれ悪魔の腕を剣で切り落とした。

祐哉「今のは！」 イッセー「早えー」

リアス「あれがナイトの駒の力よ。速度が上がる、とくに祐斗はナイトの駒と相性良いのよ。」

イツセー「なるほど」

そのあと小猫ちゃんがはぐれ悪魔を捕まえて、思いきりぶん投げた。

イツセー「うそだろ！」

祐哉「マジかよ！」

リアス「あれが小猫のカルークの力よ。ルークは腕力が上がるのよ。」

イツセー「へえー（あの小さい体でね〜）」

突然小猫ちゃんが俺の方にはぐれ悪魔を飛ばしてきた。

イツセー「あぶな！なんでこつちに飛ばすの小猫ちゃん」

小猫「今わたしのこと、体が小さいと思ってたようなので、飛ばしました。」

イツセー「ちよっ！俺の心読まないでよ！」

祐哉「アニキは分かりやすいからな」

イツセー「おい！（#。D。）」

リアス「朱乃お願いね。」 朱乃「はい！部長」

朱乃「雷鳴よ！」

朱乃さんが言うのと、はぐれ悪魔の頭上に雷が落ちてきた。

リアス「朱乃は、クイーンよ。魔力が上がるわ。そして朱乃は極度のSよ。」

イツセー・祐哉「うわー」

リアス「今は、居ないけどあとビショップがあるわ、ビショップも魔力が上がるわ。まあクイーンほどは上がらないけど、そして、キングは総合的に上がるわ。わかったかしら？イツセー」

イツセー「はい！わかりました。部長！」

最後に部長が魔力ではぐれ悪魔を消しとばした。しかし建物からもう一体はぐれ悪魔が出てきて祐哉に襲いかけてきた。

はぐれ悪魔「\*\*\*\*」 朱乃「祐哉君あぶない」

みんなが祐哉のところ向かう途中、はぐれ悪魔の動きが止まった。

祐哉「雑種が！」

一同「!!!」

イツセー「ふう、まったく。  
祐哉の力が今発動する！」

## 第6話

〔木馬視点〕

僕たちは夢でも見てるのか？ 祐哉君に襲いけたはぐれ悪魔が祐哉君の前で動きが

止まった。

祐哉「雑種が！」

僕たちは一定何がおきてるのか良く分からなかった。てたもイツセー君だけが分かってた。

イツセー「まったく、あとは俺が殺る。」

祐哉「アニキ・・・」

???「(おいおい！俺にも戦わせろよ。)」

祐哉「アニキ、どうする？」

イツセー「うゝん(ドライブグどうする?)」

ドライブグ「俺は良いと思うぞ。俺の力はまだあとで使った方が良い。」

イツセー「(分かったドライブグ)準備は良いか？」

???「ああいつでも良いぜ！マスター」



突然イツセーの足元に謎の魔方阵が出つてきて。イツセー君の前に甲冑を着た一人の女性が出つてきた。

木馬「あの女性は？」

【祐哉視点】

アニキが呪文を言うと、アニキの足元に魔方阵が出つてきてさらに、アニキが呪文を言うと一人の女性が出てくる。

イツセー「兵藤一誠の名の下に命じる。向かつて来る敵を風ぎ払え、反逆の騎士……  
セイバーモードレッド！」

モードレッド「よっしゃー行くぜ」

イツセー「モードレッド、あんまりやり過ぎるなよ。」

モードレッド「分かってるよ。マスター」

モードレッドが、おもいつきはぐれ悪魔をぶん殴り、

モードレッド「もう、終わりか？じゃこれで終いだ」

おもいつきはぐれ悪魔を剣でぶつた切り、はぐれ悪魔は、真つ二つなり、消滅した。

モードレッド「ちいこれで終わりか。」

イツセー「良くやったな、モードレッド」

そう言えと、アニキは、モードレッドの頭を撫でる

モードレッド「な、ななな何すんるだ！（＊／＼＊）」

祐哉「（そんな、顔しても説得力がないな）」

モードレッド「何か用か 祐哉」

祐哉「いや／＼何でも。」

木馬先輩たちが来て、

木馬「イツセー君、祐哉君彼女は、」

イツセー「ああ／＼彼女は、」

モードレッド「ん、俺になんか用か？」

祐哉「彼女はモードレッド、アニキのサーヴァントです。」

小猫「・・・サーヴァント？」

朱乃「それに祐哉君の力はいったい何の能力が？」

イツセー「ああ／＼まあ詳しくわまた明日で良いですか？」

リアス「そうね、もう遅いしね。また明日の放課後で良いかしら？みんなもそれで良

いかしら？」

木馬「僕は大丈夫です。」

朱乃「私も大丈夫ですわ。」

小猫「・・・わたしも大丈夫です。」

イツセー「俺も大丈夫です。」

祐哉「俺も平気です。」

こうして俺たちは解散して。家に向かった。

【イツセー視点】

家に着いた俺たちは、

イツセー「祐哉本当に大丈夫なのか？」

祐哉「大丈夫だよ。アニキ」

モードレッド「まあ大丈夫だろう。」

うくん、本当に大丈夫だろうか？

## 第7話

「イツセー視点」

次の日の放課後俺たちは、部室に向かった。

リアス「さあ！イツセー昨日こと教えてくれるわよね。」

イツセー「ウーンどうしたものか？」

祐哉「じやまずは、俺の方から教えた方が良いじゃない？」

イツセー「ああ、そうだな。でも本当に良いのか？」

祐哉「ああ！アニキの仲間だから。俺は構わないよ。」

イツセー「分かった。」

朱乃「祐哉君の力？」

イツセー「はい。祐哉は魔眼を使えることが出来る。」

木馬「魔眼？」

イツセー「ああ、でも魔眼っていつでも色々ある」

小猫「・・・色々ですか？」

イツセー「例えば、相手の体の自由を奪ったり、相手を洗脳したり、とか出来る。」

朱乃「強力な能力ですね。」

木馬「祐哉君の魔眼の能力は？」

祐哉「俺の魔眼の能力は？相手の動き封じる 能力です。」

リアス「相手の動きを封じる。そう言えば昨日のはぐれ悪魔動きをが止まってたわ。」

朱乃「それが、祐哉君の力ですね。」

祐哉「はい。そうです。」

イツセー「俺の力よりは、サーヴァントの力だな。」

リアス「イツセーサーヴァントとは、何のことかしら？」

イツセー「ウーンそうだな、一言に言えば英霊かな。」

一同「英霊？」

イツセー「簡単に言えば聖霊の類いと思えば大丈夫です。」

リアス「どんな聖霊かしら？」

イツセー「英雄の聖霊です。」

木馬「英雄ですか？イツセー君その英雄の名前って？」

イツセー「ああ昨日も言ったけど、円卓の騎士で反逆の騎士モードレッドだ。」

小猫「・・・イツセー先輩その英雄は、大丈夫なんですか？」

イツセー「心配はいらないよ小猫ちゃん。」

リアス「どうしてかしら？ イッセー」

祐哉「それが、サーヴァントとマスターの絆だから大丈夫ですよ。」

イッセー「詳しく言うとは……」

俺と祐哉のことを話終わり、家に向かう途中、

イッセー「疲れて。」

祐哉「大丈夫か？ アニキ」

イッセー「大丈夫だ！ 問題ない！」

祐哉「何だかなくん、アニキ前！」

イッセー「え？」

ドカーーーーーーン！

### 【祐哉視点】

アニキがよそ見していると、飛び出した女性とぶつかった。

???「あう！ ぶつかったちゃやたです。」

イッセー「すいませ（白）」

祐哉「アニキ。」

イツセー「あ、すみません。大丈夫?」

??? 「はい!大丈夫です。わたしの方こそよそ見してつてすみませんでした。」

イツセー「ケガはない?」

??? 「はい!大丈夫。」

??? 「あの、もし良かったらお名前聞いても良いですか?」

イツセー「別にかまわないよ」

祐哉「俺も良いですよ。」

??? 「わたしはアーシア・アルジエントと言います。」

イツセー「俺は兵藤一誠、こいつは、弟の祐哉」

祐哉「はじめまして。アルジエントさん」

アーシア「わたしのことはアーシアとお呼び下さい。アルジエントは読みにくいので。」

イツセー「わかったアーシアよろしく。」

祐哉「よろしくお願ひいたしますアーシアさん。ところでアーシアさんあんなに急いでどうしたんですか?」

アーシア「そうでした!すみませんこの近くに協会つてありますか?」

イツセー「あるよ。もし良かったら案内するよ。」

アーシア「良いですか？ イッセーさん」

イツセー「ああ構わないよ。祐哉は？」

祐哉「俺別に構わないよ。」

アーシア「ありがとうございます。イツセーさん、祐哉さん」

イツセー「じゃ行こか。」

アーシア「はい！ よろしくお願いいたします。」

こうして俺たちは協会に向かったのであった。



## 第8話

【イツセー視点】

俺と祐哉はアーシアを協会に案内して、

アーシア「ありがとうございます。イツセーさん、祐哉さん」  
イツセー「別に構わないよ。」

祐哉「困ったらお互いですよ。」

そう言う俺と祐哉はアーシアと別れた。

突然部長から悪魔の仕事を頼まれ、向かう途中、

イツセー「此処かな？」

ドライグ「(ああ此処で合ってる)」

イツセー「ん、この感じ？ドライグ！」

ドライグ「(ああ悪魔以外の気配感じる)」

俺は急いで中に入ると、

イツセー「これは？」

そこに有ったのは悪魔の死体だった。

イツセー「くう、なんでこんなことに。」

??? 「ウヒヨヒヨヒヨ・・・」

イツセー「誰だ！」

??? 「これはくそ悪魔君じゃないですか。」

イツセー「これ、お前が殺ったのか？」

??? 「その通りでございます。」

イツセー「てめえは、何者だ！」

??? 「くそ悪魔に教える名前はありません」

いきなり銃口を俺に向けて、撃ってきた。

イツセー「ちい、いきなりかよ、」

俺は銃弾を避け、

??? 「くそ悪魔が避けてるじゃね！」

イツセー「てめえこそ、関係ない悪魔を殺しやがって！」

??? 「くそ悪魔は全部虐殺でくす」

ドライグ「(こいつ、狂ってやがる!)」

イツセー「(ああ!行くぞ、ドライグ!)」

??? 「イツセーさん？」

イツセー「な!・・アーシア」

アーシア「フリード神父これは?」

フリード「何って悪くい悪魔を退治してたのよ、アーシアちゃん」

イツセー「ふざけるな!てめえ何が悪い悪魔を退治をしたっだてめえがやつてること  
はただの虐殺じゃないか!」

フリード「君だつて悪魔じゃないか〜い」

アーシア「イツセーさんが悪魔?」

イツセー「黙ったことはごめんアーシアけど俺は、悪いことする為に悪魔になった訳  
じゃない!」

アーシア「イツセーさん・・」

フリード「それでも、くそ悪魔は虐殺で〜す。」

アーシア「やめて下さい。フリード神父」

アーシアは突然俺の前に出て、庇ってくれた。

フリード「あらあらアーシアちゃんはそこにくそ悪魔を庇っていいのかな?」

アーシア「わたしはイツセーは信じます。」

イツセー「アーシア・・」

フリード「まあ、どっちでも俺たちは良いけどね〜」

イツセー「よし！これなら」

フリード「（ちい、この感じは？）アーシアちゃん引きますよ。」

イツセー「待って!!」

フリード「邪魔者がきたから、チャイバラ。」

イツセー「くう、居ない」

ドライグ「（逃げられたな、相棒）」

イツセー「くそ！アーシアが！」

こうしてフリードとアーシア突然消えた。

## 第9話

【祐哉視点】

グレモリー先輩から電話きて、数分がたつてきたころ。

モードレッド「マスターは何処行ったんだ。」

祐哉「さあ、悪魔の仕事だからなく何処かは俺にもわからない。」

アニキが悪魔の仕事に行つて、しばらく経つたころ

モードレッド「むう！この感じは！」

祐哉「どうした？モーさん。」

モードレッド「マスターの近くにどす黒い気配を感じる！」

祐哉「なあ、それは本当か？モーさん！」

モードレッド「ああ！これは、殺気だ。」

祐哉「アニキは、無事なのか！」

モードレッド「ああ多分大丈夫だと思ふ。でもリアス・グレモリーに連絡した方が良

いだろう。」

祐哉「わかった。」

俺はグレモリー先輩に連絡をした……

【イツセー視点】

俺はアーシアを連れてかれ、すぐに部長がやって来た。

リアス「イツセー！無事？」

イツセー「俺は無事です。」

リアス「ごめんなさいなさいイツセー。まさかこんなことがおきるなんて。部長は悪魔の死体を見て俺にそう言った。」

イツセー「俺の方こそ犯人に逃げられてしまいませんでした。」

リアス「ううん、イツセーが無事で本当に良かったわ。」

イツセー「ところでなんで部長が此処に？」

リアス「祐哉君が連絡してくれたのよ。」

イツセー「そうでしたか。」

こうして今日の悪魔の仕事は終わった。

次の日

イツセー「うーん、どうしたもんかな〜」

祐哉「どうした？アニキ突然」

モードレッド「マスターはまだ昨日こと気にしてるのか？」

イツセー「それもあるけど」

祐哉「じゃ、なんで？」

イツセー「どうして3人で出掛けてるだ!!」

祐哉「まあ今日は学校が休みだから、ためには3人出掛けのも良いんじゃない。」

そう、俺たちは今出掛けている。

イツセー「(でもまあ、わるくわないかな。)」

祐哉「アニキ前、前」

イツセー「え？」

ドカーーーーーン

???「あう、痛いです」

イツセー「すいません大丈夫ですか？」

???「はい、大丈夫です。」

イツセー「つてアーシア！」

アーシア「え？イツセーさん」

イツセー「どうしてアーシアが此処に？」

アーシア「それは、」

???「アーシアどうしたの？」

アーシアの後ろから黒髪の女性が出ってきた。

アーシア「あ、レイナーレ様」

イツセー「夕麻ちゃん・・・」

レイナーレ「イツセー君・・・」

俺は墮天使のレイナーレこと夕麻ちゃんと再会した。

イツセー「どうして夕麻ちゃんが此処に？」

レイナーレ「アーシアを協会から逃がすところなの。」

イツセー「アーシアを？」

レイナーレ「ええそうよアーシアは特殊の神器（セイクリッド・ギア）を持つてるの

よ。」

イツセー「特殊な神器（セイクリッド・ギア）？」

レイナーレ「傷を瞬間で治すことが出来るのよ。」

イツセー「なあ！それは本当なのか？」

レイナーレ「ええ、本当よ。私はアーシアの神器（セイクリッド・ギア）を欲しかった



めアーシアを協会に呼んだのわよ。そして神器（セイクリッド・ギア）抜き取られたら抜き取られ者は命を落とすわ。」

イツセー「じゃ、アーシアは！」

レイナーレ「（こくり）」

イツセー「くう、まさかこんなことが。」

レイナーレ「あのイツセー君」

イツセー「どうした？夕麻ちゃん」

レイナーレ「私こと恨んでない？」

イツセー「なんで？」

レイナーレ「私はイツセー君を殺そうとしたの、だから私は、」

イツセー「別に夕麻ちゃんは俺を殺そうとしてないよ。」

レイナーレ「でも、私はイツセー君を」

夕麻ちゃんがんばるんか言う途中で俺は夕麻ちゃんにデコピンをした。

レイナーレ「痛！」

イツセー「夕麻ちゃん、俺は夕麻ちゃんに言ったよ。君を救いたいて。だから、俺が君の俺が最後の希望だ！」

レイナーレ「イツセー君……ごめんなさいそしてありがとう。」

??? 「やはりそうきましたか。」

イツセー 「その声は！」

ドーナシーク 「またお会いしましたね。」

イツセー 「てめえ、何しに来た。」

ドーナシーク 「当然二人を返しもらいに。」

イツセー 「素直に返すと思ってるのか？」

ドーナシーク 「いいえ、ですから」

アーシアとレイナレの足元に魔方阵が出っけてきて。

ドーナシーク 「強制的に返していただく。」

イツセー 「夕麻ちゃん、アーシア」

レイナレ 「イツセー君」

アーシア 「イツセーさん」

二人は魔方阵と一緒に消えた。

祐哉 「アニキ！」

イツセー 「分かっている絶対に二人を救う！」

## 第10話

【イツセー視点】

俺と祐哉はアーシアたち救う為、二人が捕まってる所にやって来た。

イツセー「此処に二人が」

祐哉「ああ、間違いない。」

イツセー「でも、此処って」

祐哉「ああ、アーシアさんを案内した協会だ」

俺たちは協会に入ると、二つの人影が出て来た。

木場「僕たちも行くよ。」

小猫「・・・部長からイツセー先輩を協力するように言われました。」

イツセー「木場に小猫ちゃん、ありがとう。」

俺たちは木場と小猫ちゃん二人を加えて、協会に入った。そして協会に入ると、

木場「どうやら手荒い歓迎のようだね。」

小猫「・・・そのようですね。」

木場「イツセー君たちは先に行きなよ、此処は僕と小猫ちゃんが引き受ける。」

小猫「・・・ですから二人は行って下さい。」

イツセー「木場、小猫ちゃん・・・わかった此処は二人に任せた。祐哉行くぞ」

祐哉「ああ、わかった。」

此処は木場と小猫ちゃんに任せて、俺と祐哉は先に向かった。

イツセー「此処にアジアたちが？」

祐哉「おそらく」

???「良く来ましたね。」

イツセー「貴様は？」

祐哉「確かドーナシックって言ったか」

ドーナシック「良く覚えてましたね。」

イツセー「ドーナシック、アジア、夕麻ちゃんは何処にいる。」

ドーナシック「居ますよ。あそこにね」

イツセー「夕麻ちゃん、アジア！」

アジア「・・・イツセーさん」

祐哉「ドーナシックアジアたちをどうするつもりだ」

ドーナシック「決まってるでしょう。アジア・アルジエントから神器（セイクリッ

ド・ギア）を抜き取るに決まってるじゃないですか。まあ、裏切り者のレイナーレには

此処で消えてもらいますけどね。」

イツセー「そんな事絶対させない！」

ドーナシーク「フフフフ・・・もう遅い儀式は、始まつてる。」

イツセー「なあ！」

ドーナシーク「ハハハハハハ・・・これで墮天使はこの世界を、」

祐哉「本当にそう思つてるのか。三流墮天使」

ドーナシーク「なに？」

祐哉「よく二人を見てみる。」

祐哉がそう言うと二人の体が光だし突然消えた、そしてすぐに俺の元に出つてきた。

ドーナシーク「なあ、何故だ！」

夕麻「これはどうなつてるの？」

アーシア「わたしよくわかりません。」

イツセー「上手くいったな祐哉。」

祐哉「当然！」

ドーナシーク「なにをした貴様なら！」

イツセー「祐哉は魔眼持ちだね。」

ドーナシーク「魔眼だと！」

祐哉「ああ俺の魔眼は停止の魔眼だ、これであの兵器を停止させた。」

イツセー「あとは俺の力で二人を転送した。」

ドーナシーク「そんなバカな！」

イツセー「これでお前の計画のおしまいだ」

ドーナシーク「認めない、こんなの認めない」

ドーナシークは俺たちに襲いかけ。

イツセー「ドライグ！」

ドライグ「(ああ任せろ)」

俺の左腕に赤い籠手が出てきて、

《b o o t h》

俺は思い切りドーナシークを殴り飛ばした。

ドーナシーク「がっは！」

夕麻「イツセー君それは？」

イツセー「これが、俺の力だ！」

???「それがイツセーの能力なのね。」

イツセー「部長」

ドーナシーク「リアス・グレモリー！」

リアス「イツセーのその力赤龍帝の籠手《ブースデッド・ギア》ね。」  
イツセー「その通りです。」

ドーナシーク「赤龍帝の籠手《ブースデッド・ギア》だと！」  
リアス「ええ、そうよ。」

イツセー「(まあこいつ程度だとあんまり力いらなげどね。)」

リアス「さて、イツセーどうするのかしら？」

イツセー「部長、お願いいたします。」

リアス「わかったわ、イツセー」

ドーナシーク「おのれー！」

部長の一撃でドーナシークは消滅した。

リアス「これから二人はどうするのかしら。」

アーシア「わたしたちは！」

次の日、学校では

アーシア「今日からお世話になるアーシア・アルジェントです。よろしくお願いいた

します。」

男子生徒一同 「うおおお」

アーシア 「今、イツセーさん家にお世話なつています。皆さんこれからよろしくお願ひいたします。」

イツセー 「(なんだすごくやな予感する。)

男子生徒一同 「イツセー貴様は！」

イツセー 「な！マジか！」

アーシア 「皆さんどうたんですか？」

女子生徒一同 「この子天然か」

イツセー 「なんで！こうなるだ!!!」

こうしてアーシアが俺たち仲間なり、俺たち家族が増えた。



# ストライク・ザ・ブラッド編 聖女の右腕 第1話

【祐哉視点】

アーシア姉さんが来て3日が過ぎ、俺たちとはと言うと

古城「あく全然わからね〜」

???「おいおい大丈夫か、古城先輩」

祐哉「多分大丈夫だと思う。」

古城「お前らなく先輩が悩んでるのに助けはないのかよ！祐哉、達也」

祐哉、達也「ハハハハハハ」

???「まったく古城来てくれただけ有りがたくおもいなさいよ。」

古城「あのなく浅菊俺に昼飯を奢られてるのによく言うな〜」

浅菊「私がただで勉強教える訳じゃないでしょ。」

古城「勘弁してくれ。」

そう俺たちは古城先輩の勉強を見るため喫茶店に来ている。俺の隣には、俺の悪友の藤丸達也だで、古城先輩の隣は藍羽浅菊先輩、古城先輩の彼女でもある。

浅菊「もうこんな時間悪いけど私バイトだからいくわね。」

達也「じゃ俺もそろそろ行くわ！」

祐哉「まあ俺は帰ってもヒマだから最後までつきあうよ古城先輩」

古城「サンキュー祐哉、助かるぜ。」

数分後、俺たち喫茶店出って、

古城「あゝ疲れてた〜」

祐哉「大丈夫？古城先輩」

古城「ああ大丈夫だ」

その時俺たちの後ろから人の気配を感じた。その気配たどると女性が俺たちを尾行をしていた。

古城「おい、祐哉あれは？」

祐哉「間違いないな俺たちを尾行してる。」

古城「どうする？」

祐哉「古城先輩あれ」

俺たちはゲームセンターを見つけ、

古城「よし。」

俺たちはゲームセンターに入ると女性は、

女性「こ、これは？」

古城「まああれ大丈夫か？」

祐哉「多分ダメかな。はあく仕方ない俺が行ってくるよ。」

古城「わかった」

俺は女性のところに行つて、

女性「霸王！」

祐哉「(おいおいマジかく俺かよ。仕方ない此処は)ワタシ日本語ワカリマセン」

俺はそう言うと言性と女性から離れた。

女性「あの」

古城「大丈夫か？祐哉」

祐哉「ああ大丈夫、どうやらあの女の子は俺の方が方だった。」

古城「マジか！祐哉」

祐哉「ああ、マジだ古城先輩」

チャライ男A「彼女、さっきフラれなかった俺たち今金があるからお茶でもどう？」

チャライ男B「そうそうあの男なんて忘れてね」

女性「すいません今急いでるので。」

あの時の女性がチャライ男たちにウザイナンパをされてた。

古城「おい！祐哉あれ」

祐哉「ちい！」

チャライ男A「おい俺たちを無視するな！」

チャライ男が女の子のスカートを思い切りめくり、

祐哉「な！」

女性「なにを！」

女性がチャライ男を一人思い切りぶっ飛ばした。

チャライ男A「テメエよくも！」

チャライ男から突然炎を纏った馬出って来た

祐哉「あれは、眷獣！」

古城「あいつ真祖だったのか」

女性「こんな所で眷獣を雪霞狼」

女性は雪霞狼と言う武器を持って眷獣に向かって。

祐哉「な！マジか！」

眷獣がいつも簡単に倒され消えた。

祐哉「あれは？一体なんだ？いやそんな事よりも古城先輩あとはお願いいたします。」

古城「わかった」

祐哉「おらー！」

俺は思い切り女性の武器を殴った、女性すぐに俺と距離をとった

女性「なんで！邪魔するのですか、あなたは。」

祐哉「やり過ぎだ」

女性「あの男性はこんな所で眷獣を使ったのですよ。」

祐哉「それでも、パンツ見られからやり過ぎだ」

女性「な！みた、みみ見たんですか？」

祐哉「あ、やべ！いや、その、ってそこはあぶない」

しかし時すでに遅し風で女性のスカートめくれた

祐哉「あ、」

女性「うゝゝゝ」

女性すぐにスカートを押せえて俺の近くきて

女性「ヘンタイ」

女性そう言つてと去つて行つて

祐哉「ハハハ・ん、これは姫柇雪菜か。」

これが俺と姫柇雪菜の出逢いだつた。

## 第2話

【祐哉視点】

突然姫終雪菜と言う女性と出逢い、次の日の放課後

祐哉「すみません学年主任の八神はやて先生は居ますか？」

???「はやてちゃんなら居ないよ」

祐哉「そうですか、ありがとうございます高町なのは先生」

なのは「別に構わないよ兵藤くんで、はやてちゃんになんか用でも合った？」

祐哉「いえ居ないなら良いです。」

なのは「そう、またなんか有ったらいつでも言つてね」

祐哉「ありがとうございます高町先生」

そして俺は職員室後にした。

祐哉「失礼しました。」

イツセー「あれ、祐哉どうした？」

祐哉「アニキと搭城さん？なんか珍しい組み合わせだな」

イツセー「いや俺もさつき小猫ちゃんと会って」

小猫「……ちょっと先生に用が有りまして」

イツセー「小猫ちゃんの担任てたしか、」

小猫「……はい、八神先生です。」

祐哉「あく八神先生なら今居ないよ。」

小猫「……そうですか。」

イツセー「祐哉なんでその事知ってるだ」

祐哉「俺も八神先生に用が有ってな」

イツセー「居ないならどうする小猫ちゃん？」

小猫「……仕方ないです。また出直します。」

イツセー「わかった。じゃ俺たち部活だから。」

祐哉「ああわかった。俺は先に帰ってすよ。」

イツセー「ああ、また後でな。」

俺はアニキと別れ、

祐哉「これ、どうするかな？」

俺は昨日女性が落としたサイフ見ながらため息が出た。

祐哉「はくとりあえずはお金と学生証有ると、」

雪菜「私のサイフで何を考えてるんですか？兵藤祐哉さん」

祐哉「いや、何も考えて・・・」

俺は昨日の出来事を思い出してた。

雪菜「なにを思い出してるですか！」

そう言つて姫終雪菜さんはすぐにスカートを抑え、

祐哉「いやいや何も思い出しては、」

雪菜「それより早くサイフを返して下さい。」

祐哉「返しても良いけど俺になんの用か教え、」

グ~~~~~

腹の物凄い音がして、

雪菜「~~~~~」

祐哉「もしかして昨日サイフを落としたことに気付かなくて昨日から何も食べて無い

とか。」

雪菜「~~~~~コクリ」

祐哉「~~~~~はいこれ」

雪菜「え？」

祐哉「その代わりになんか奢ってくれないか？」

俺たちはファーストフード店寄つて、



雪菜「いただきます。」

パクパク

祐哉「う、」

俺は口元に手やり姫終さんにナプキンをあげ、

雪菜「／＼／＼／＼／うゝ」

姫終さんはすぐにナプキンで口元を拭いて、

雪菜「兵藤さんは何も頼まないですか？」

祐哉「ん、俺は別に。」

雪菜「え？じゃなんですか？」

祐哉「まあ姫終さんと話をしたかったらな」

雪菜「そうですか？」

祐哉「ああ、昨日のことな。」

雪菜「分かりました。私は獅子王機関来ました姫終雪菜です。」

祐哉「獅子王機関」

俺はまだ分からなかった。この女性ことや獅子王機関とを。

## 第3話

【祐哉視点】

祐哉「獅子王機関」

雪菜「ええ、そうです。」

祐哉「て、なんだ？」

雪菜「え？知らないですか？」

祐哉「初めて聞いた。」

雪菜「分かりました。説明します。」

祐哉「ああ頼む。」

雪菜「まず、獅子王機関は真祖や特殊な力を持った人を監視する組織です。それで監視する人が私たち剣巫です。」

祐哉「なるほど。でもそれじゃ他の人にも監視役来るのか？」

雪菜「はい、あと監視する人は第四真祖です。」

祐哉「姫終さんは二人を監視するの？」

雪菜「いえ、第四真祖には別の人が監視します。」

祐哉「じゃ俺の監視役が姫終さんて事か〜」

雪菜「はい、そうです。」

祐哉「ん、待てよそれってずっと俺を監視することか?」

雪菜「安心してください。プライベートは守りますから」

祐哉「・・・マジか」

俺と姫終さんはファーストフード店を出て、帰ろうとすると。

祐哉「そう言えば、姫終さんの家はどこ?」

雪菜「大丈夫です。私もこっちですから。」

家に着くと、

祐哉「まさか」

雪菜「はい。兵藤さんの家の近くのマンションです。」

祐哉「近いつてすぐそこじゃないか!」

???「お〜い祐くん」

祐哉「あれ凧沙さんと信二どうした?」

凧沙「私たちは部活の帰りだよ。」

信二「祐哉隣の人は?」

祐哉「あー彼女は・・・」

凧沙「あれ雪菜ちゃんどうしたの？」

信二「知り合い？」

凧沙「一昨日に私のクラスに転校してきたんだよ。ね、雪菜ちゃん」

雪菜「ええそうです。」

凧沙「雪菜ちゃんは此処で何してるの？」

祐哉「此処のマンションに住んでるだつて。」

凧沙「本当？雪菜ちゃん」

雪菜「はい」

凧沙「じゃまた今度遊びに行つて良い？」

雪菜「はい。大丈夫ですよ。凧沙ちゃん」

凧沙「本当にやつた！また今度遊びに行くね。」

雪菜「ええまた今度」

信二「じゃまた明日な祐哉」

祐哉「ああまた明日」

その夜

イツセー母「ごめんね祐哉こんな時間買い物頼んじやて」

祐哉「大丈夫だよ。」

買い物物の為に外に出るとそこには、

祐哉「な、姫終さん！」

そこに居たのは風呂上がり姫終さんだった。

雪菜「どこに行くですか、兵藤さん」

祐哉「待つてるから乾かしてきてくれ」

俺と姫終さんは一緒に買い物に出って、

祐哉「ふーこんなもんかな。」

雪菜「あれは」

祐哉「どうした？ 姫終さん」

雪菜「あ、いえ」

祐哉「クレイジーゲーム？ あれが欲しいのか？」

雪菜「いえ、そんな事は」

祐哉「ちよつと待てろよとつて来るから。」

ガチャン

祐哉「はい、姫終さん」

雪菜「あ、ありがとうございました。」

??? 「お前ら何をしてる？」

祐哉 「南宮先生」

那月 「で、お前たちは何をしてるんだ」

祐哉 「俺たちは買い物ですよ」

那月 「転校生と一緒にか？」

祐哉 「まあ、はい」

那月 「まあ、良いだろ最近は何物騒だから早く帰るんだぞ」  
祐哉 「分かりました。」

俺たちは南宮先生と別れ、帰ろうとすると

ドカーン

近くでデカイ音した。

## 第4話

【祐哉視点】

俺と姫終さんは、音の方に向かった。

祐哉「あれは、眷獣」

雪菜「なんでこんなところに」

祐哉「このままじゃまずい」

突然姫終さんは槍を取りだし

雪菜「じゃ私はこれで兵藤さん」

祐哉「な、姫終さん」

姫終さんは眷獣の方に向かった。

祐哉「くそ！仕方ない！」

俺も姫終さんのあとを追って向かった。

【雪菜視点】

私は眷獣の方に向かって、

雪菜「眷獣が！」

劍獣「キシヤヤヤヤ」

眷獣が謎の腕に捕まれ吸水させていき、

雪菜「眷獣が消えた」

突然一人の女の子が出て来た。

雪菜「あの子は、」

???「おやおやこんなところに何の用ですか？」

男性が一人出っ来て、

???「これは、劍巫の巫女じゃないですか。」

雪菜「なぜあなたそれを？」

???「ふう、そうなの簡単じゃないですか、あなたが持つてるその槍は雪霞狼じゃない

ですか」

雪菜「そのとうりです、あなた一体何をしたいですか？」

???「あなたに教える筋合いありません。」

雪菜「そんなの知りませんあなたたちは一体誰で何を企んでるですか？」

???「これはこれは失礼しました私としたことが私はジル・ド・シエです。こちらがア

スタルテです。」



雪菜「それであなたたちの目的は何ですか？」

ジル「さつきも言ったじゃないですかあなたに教える筋合いはないと、アスタルテ」

アスタルテ「……命令受信《アクセプト》」

雪菜「な、」

ジル「横ががら空きですよ」

雪菜「しまった」

私は殺られたと思いい目を閉じると、

突然銃声がし、

ジル「く、誰ですか？」

??? 「ふう、なんとか間に合ったか」

雪菜「兵藤さん！」

【祐哉視点】

俺は殺られそうになった姫終さんを間一髪に助けることに成功した。

祐哉「大丈夫か？ 姫終さん」

雪菜「なんで此処に」

祐哉「そんなの決まってるだろうが君を助けにきたに決まってるだろうが！」

雪菜「兵藤さん」

ジル「あなたは一体」

祐哉「さあね、只の通りすがりの学生だ」

ジル「あなたが誰かはどうでも良いですよ。アスタルテ」

アスタルテ「……命令受信《アクセプト》」

祐哉「な、」

女の子が突然巨人なり俺たちに襲いかけてきた。

祐哉「チィ、めんどくせえ」

俺は2丁拳銃を取りだし、

雪菜「兵藤さんそれは？」

祐哉「ああ俺の相棒だ！さて行くぜ。」

俺は2丁拳銃を構えていると、

???「(ワタシヲツカエ)」

祐哉「(な、なんでお前が)」

???「(ワタシヲツカエツカエツカエツカエツカエ)」

祐哉「な、やめ、グハーーーー」

雪菜「兵藤さん！」

俺の中から無数の刃が出てきて、

ジル「くう、これは仕方ない引き上げますよ。アスタルテ」

アスタルテ「・・・命令受信《アクセプト》」

突然に無数の刃が出て、男性と女の子は居なくなつた

そして俺は倒された

## 第5話

【祐哉視点】

祐哉「……うーん此処は、俺の部屋」

気が付くと俺は、自分の部屋に居た

イツセー「やつと目が覚めたか？祐哉」

祐哉「あれ？アニキ？」

イツセー「まったくまた一人でムチャをして、姫終さんが居なかつたら危なかつたんだぞ」

祐哉「そつか、ごめんアニキ心配させて」

イツセー「まあ良いけど」

祐哉「もしかして俺を運んだので、姫終さん」

イツセー「ん、いや運んだのは、」

達也「やつと目が覚めたか」

祐哉「あれもしかして俺を運んだので達也？」

達也「まあ正確には俺と信二だ」

祐哉「じゃ信二も来てるのか？」

イツセー「いや祐哉を運んだのあと帰ったよ」

祐哉「そつか、悪かったな達也此処まで運んだくれて」

達也「別に構わないよ」

アーシア「失礼します。イツセーさん、祐哉さんは？」

イツセー「今日を覚ましたよ。」

アーシア「そうですかよかったです」

祐哉「アーシア姉さんも心配させてすいません」

アーシア「いえ、祐哉さんが無事でよかったです」

祐哉「そう言えば姫終さんは？」

イツセー「お前なく今何時か分かれ」

祐哉「え、……」

俺はアニキが言うど時計を見て……

祐哉「……1時じゃねーか」

イツセー「そういうこと、まあ姫終さんも0時すぎまで居ただけどさすがに家に帰

した」

祐哉「……そつか姫終さんも」

イツセー「ああ、姫終さんもお前のこと心配してたぞ」

祐哉「ありがとうアニキ」

イツセー「姫終さんにもお礼言っとけよ」

祐哉「ああわかつたるよアニキ」

次の日、学校では

雪菜「兵藤さん！」

祐哉「姫終さん、昨日は悪かったな」

雪菜「いえ兵藤さんが無事でよかったです……そんな事より昨日のあれはなんですか!」

祐哉「いや……時がきたら話すよ。」

雪菜「兵藤さん!私は!」

祐哉「頼む!今は黙ってくれ!」

雪菜「!!!……分かりました。」

祐哉「悪い」

雪菜「所で兵藤さんこれからどうするですか?」

祐哉「昨日の事件について調べてみようと思つてな」

雪菜「手掛かりはあるですか？」

祐哉「さあ」

雪菜「さあて、どうするですか？」

祐哉「うーんそうだなー一回あの人たちに聞いてみるか」

雪菜「あの人？」

俺と姫柇さんとはある教室やてきた。

雪菜「兵藤さん此処は？」

祐哉「オカルト研究部の部室」

俺と姫柇さんはオカルト研究部の部室まで来て

祐哉「失礼します」

朱乃「いらっしやい祐哉くん」

祐哉「お邪魔します。朱乃さん」

雪菜「・・・お邪魔します。」

木場「あれ祐哉くん後ろの女性は？」

祐哉「あー彼女は」

雪菜「姫柇雪菜です。兵藤祐哉さんの監視役です。」

一同「え、」

イツセー「あれ祐哉どうした？」

祐哉「いや昨日の事件について」

イツセー「なるほどなーでもまずはあれをどうするかだ」

祐哉「え、」

俺が後ろのを見ると姫終さんが質問攻めになつてた。

祐哉「・・・マジかよ」



## 第6話

### 【祐哉視点】

話が終わって数分俺たちは、

リアス「やつぱり祐哉もただ者じゃなかったわね」

祐哉「ハハハ・・・すいません黙ってて」

リアス「別に構わないわよ、それで祐哉君の霸王の力でどんな力なの？」

祐哉「うーん」

イツセー「構わないよ最後に決めるのは祐哉だから」

祐哉「ありがとうアニキ」

朱乃「雪菜ちゃんはどうな力かわかってるんですか？」

雪菜「いえ私も詳しくは」

祐哉「知らなかったのかよ」

雪菜「私は兵藤さんの力がとんでもない力だから監視するようにと言われたので」

祐哉「なるほど、まあまずは・・・」

俺の霸王の能力について話し・昨日ことをアニキやオカルト研究部の部長たちに話して

アーシア「ジル・ド・シエですか」

祐哉「はい、どこかで聞いたことはないかな？アーシア姉さん」

アーシア「すこしなら」

雪菜「どんな人だったんですか？」

アーシア「私知ってるのはあの方は誰よりも聖女を愛してる人だったことしか」

祐哉「そっか」

イツセー「なんかわかったか？」

祐哉「余計分かんなくなつた」

アーシア「あうすいません祐哉君」

祐哉「あ、いえアーシア姉さんのせいじゃないよ」

イツセー「で、祐哉これから手掛かりなしでどうするだ」

祐哉「いえ手掛かりならあるよ」

一同「二・・・あるのかよ」

祐哉「あ、ああ手掛かりだけなら」

イツセー「手掛かりだけ、どう言うことだ」

祐哉「そのままの意味だよ相手の目的とかまではわからないけどあいつらの居場所の検討ついでる」

イツセー「じゃその居場所はどこだ？」

祐哉「あー居場所の場所は・・・」

俺と姫終さんはオカルト研究部を出てある場所に向かった。

雪菜「兵藤さん此処は？」

祐哉「知り合いの先輩がいる所」

雪菜「兵藤さんの知り合いの先輩？」

祐哉「ああ、失礼します。藍羽先輩」

浅菊「あれ祐哉君どうしたの？」

祐哉「藍羽先輩実は・・・」

俺は昨日のことや、ついさっきのことを話した

浅菊「なるほどで、私なにを調べばいいの？」

祐哉「良いですか？先輩」

浅菊「ええ構わないわ、それでまず何を調べればいいのか」

祐哉「今は使われない発電所か工場があるか調べてください」

雪菜「そんなところ調べてどうするですか？」

祐哉「正確には電気が通つてる発電所か工場だ」

浅菊「一件あつたわ、祐哉君」

祐哉「場所は分かりますか藍羽先輩」

浅菊「ちよつとまって今地図をだすわ」

祐哉「お願いいたします」

浅菊「今出たわ祐哉君のスマホに送つとくわね」

祐哉「ありがとう藍羽先輩」

浅菊「別にこれくらい構わないわ」

祐哉「じゃ俺たちはこれで」

俺と姫終さんは敵がいると思う発電所か工場に向かった

## 第7話

【祐哉視点】

俺と姫終さんは敵がいる場合まで来て、

祐哉「此所か」

雪菜「此所は発電所？」

祐哉「ああ、さて、行くか」

俺たちは発電所に入って、

雪菜「兵藤さんなんで此処に敵がいるって分かるんですか？」

祐哉「一つはあの女の子だよ」

雪菜「女の子？」

祐哉「ああ、あの子が使った眷獣が人工的に作られた物だからだよ」

雪菜「人工的に作られた眷獣。どうして兵藤さんはそれが分かるんですか？」

祐哉「俺のダチの一人が第四真祖だから」

雪菜「第四真祖と言うことは」

祐哉「ああ、眷獣についてはすこしは解る、話を戻すけどあの子が人工的の剣獣を使

うってことはそれなりのエネルギーを消費するってことその証拠にあの子は別の眷獣を吸収するのはその為」

雪菜「まさか吸収するのは」

祐哉「ああ、あの子の眷獣を維持する為、そしてそれをする為の場所が必要条件」

雪菜「そしてその場所は他の人に怪しまれない場所それは今は使われない発電所か工場ってことですか？」

祐哉「正解」

雪菜「兵藤さんはあれだけの手掛かりで敵の場所を、兵藤さん貴方は一旦何者なんですか？」

俺たちは発電所の地下にやって来て、

雪菜「これは」

祐哉「どうやらあたりみたいだ」

そこにあつたのは、女の子が入ってるカプセルが沢山あつた。

??? 「・・・侵入者を確認」

雪菜「貴方は？」

??? 「まさかもう見つかるとは」

雪菜「ジル・ド・シエ！貴方は此処で何を企んでるのですか！」

ジル「貴方には関係ありませんよ剣巫の巫女」

祐哉「テメエ！あの子に眷獣を埋め付けやがったな！」

ジル「ほおよく分かりましたね。それでも他の真祖の眷獣を吸収して寿命を伸ばしてるんですがこの子も良くて一週間の命ですかね」

雪菜「なあ！」

祐哉「キサマ！この子の命をなんだと思ってるんだ」

ジル「そんなの決まってるんじゃないですか、尊い犠牲ですよ」

祐哉「そうか・・・だったらテメエ俺が裁く」

### 【雪菜視点】

兵藤さんは2丁拳銃を出しジル・ド・シエに向かって、

ジル「アスタルテ」

アスタルテ「・・・命令受信《アスペクト》」

アスタルテが兵藤さんの前に出て来て、

祐哉「なあ、何で」

ジル「アスタルテは私が作りあげたホムンクルスですよ私の言うことしか聞きませ

ん

祐哉「だったら姫終さんあのおっさんをたのむ」

雪菜「兵藤さんは？」

祐哉「俺はあの子を止める」

雪菜「分かりました」

私は雪霞狼を出しジル・ド・シエに向かった、

ジル「私の相手は劍巫の巫女ですか」

雪菜「はい貴方の相手は私です」

ジル「まったく貴方も悲しい人ですね」

雪菜「何がですか」

ジル「やはり何も分からないとは悲しいですね」

ジル・ド・シエは黒何かで私の雪霞狼を受け止め私に話かけてきた、

雪菜「貴方は何が言いたいですか」

ジル「貴方は獅子王機関に見捨てられた人だからです」

雪菜「そんなことはありません」

ジル「じゃ貴方は親の顔を覚えてるんですか？」

雪菜「・・・それは」



ジル「覚えてないですよね。それは当たり前ですよ貴方は親に捨てられ獅子王機関に拾われたしかしその獅子王機関にも捨てられたそう貴方が居なくなっても誰も心配しないその雪霞狼が証拠ですよ」

雪菜「そん……な……私は一旦何の何の為に」

私は認めたくなかったけどあの人は正しいかった

ジル「さあ貴方も今楽にしますよ」

私はもう何も要らなかつた……私は生きるを諦めた

【祐哉視点】

俺はアスタルテと戦闘中のこと

祐哉「ん、姫終さん」

アスタルテ「……………」

祐哉「ちい、これは不味いな」

俺はアスタルテの攻撃を避け、2丁拳銃で反撃するもアスタルテの剣獣に弾かれまつた  
た効かなかつた

祐哉「仕方ない」

俺はアスタルテに魔眼を発動した

アスタルテ「……………機能停止」

祐哉「よしこれで」

だが俺の近くで姫終さんが戦意喪失して

祐哉「くそ！ 姫終さん！ 間に合ええええ」

【雪菜視点】

ジル・ド・シエは黒い影で斧を作り、私は生きるのを諦め目を閉じ、

ジル「これで終わりです」

ズバツ

しかし私は切られなかった

雪菜「なんで貴方が！」

私の目の前に居たのは

ジル「まさか貴方が彼女を庇うとは、兵藤祐哉」

そう兵藤さんだった

雪菜「な・ん・で」

兵藤さんは切られて血が流れて

祐哉「ま・・・だ・・・お・・・わり・・・じゃ・・・ない」

ジル「なっ身体が動かない」

兵藤さんは切られても魔眼を発動して相手の動きを封じた

ジル「くうまさか貴方にこんな力があるとは」

拳銃を相手に向けて、しかし兵藤さんは力尽き倒された

雪菜「兵藤さん・・・いや・・・いやあああああ」

ジル「行きます。アスタルテ」

アスタルテ「・・・命令受信《アスペクト》」

二人は居なくなり私は・・・

### 【祐哉視点】

俺は夢を見た。

??? 「祐哉なんで私たちを」

??? 「なんでなんでなんで」

祐哉「俺は・・・俺は」

??? 「マスターまだ生き残りが」

??? 「私がやりますよ」

祐哉 「やめろ」

??? 「私はまだ死にたくな・・・」

ズバツ

??? 「これで終わりましたよマスター」

祐哉 「なんでこんなことに」

俺は絶望した。俺は自分の力に絶望して俺は一人になった

??? 「・・・さん」

??? 「兵藤さん！」

祐哉 「あれ此処は？」

俺は目が覚め、俺の目の前には泣いてる姫終さんだった

雪菜 「兵藤さん・・・のバカ！」

祐哉 「え、」

姫終さんは泣きながら俺に怒鳴った

祐哉 「姫終さん？」

雪菜 「なんで私を庇ったんですか？私がいなくても誰も心配しないのに」

ブチ

祐哉「ふん」

雪菜「ひはいですひはいです（痛いです痛いです）」

俺は姫終さんのほっぺを思い切り引っ張った

祐哉「何がいなくても心配しないで、ふざけるな。少なくとも俺は心配するに決まってるだろう。」

雪菜「兵藤さん・でも私は」

祐哉「まったくまだそんな事言ってるのか姫終さん、姫・雪菜は一人じゃない俺がいる！もし一人が辛いなら俺が側にいる！」

雪菜「兵藤さん今何て」

祐哉「俺が側にいるって、まったく姫終さんはすごく可愛いんだからもっと自分に自信持ったほう良いって」

雪菜「／／兵藤さん／／」

そして俺は姫終さんの頭を撫でていると

???「もういいか」

祐哉・雪菜「「え、」

祐哉「アニキ、何で？」

イツセー「何でって部長から連絡あったから」

アーシア「祐哉君は目が覚めたましたか」

イツセー「ああさつきな、まあさつきまで二人の世界に入ってかけどな」

祐哉・雪菜「「なあー！」」

突然姫終さんが顔が真っ赤になり

雪菜「兵・兵藤さんのヘンタイ！」

祐哉「なんで！」

イツセー「もう大丈夫だな。」

アーシア「イツセーさんそろそろ時間が」

イツセー「わかった、祐哉」

祐哉「なにアニキ」

イツセー「お前まだ専属使えないだろう」

祐哉「ああ」

イツセー「少なくとも一人は使えるようにしろ」

祐哉「でもアニキ」

イツセー「そのせいで今回は危なかっただろ」

祐哉「そうだけど」

雪菜「専属？」

祐哉「姫終さん放課後に話したこと、俺には霸王の専属沢山いるけどそれを使うのには魔力がある俺の一人の魔力だけじゃ使えないんだ」

雪菜「だったら私の魔力を使って下さい」

祐哉「なあ！」

雪菜「やりかたはどうやるんですか？」

イツセー「ああやりかたはキスをすること」

雪菜「／／／／キスですか」

祐哉「ああ」

雪菜「うゝゝわ、分かりました。兵藤さんやりましょう」

祐哉「いいの？ 姫終さん」

雪菜「／／／／はい」

祐哉「わかった姫」

雪菜「雪、雪菜です。祐哉さん」

祐哉「雪、雪菜じゃやろうか」

雪菜「／／／／はい、祐哉さん」

俺と雪菜はキスをして、

チユ

イツセー「ひゅ〜」

アーシア「はわわ」

祐哉「ありがとう雪菜」

雪菜「はい、祐哉さん」

イツセー「これで準備は万全だな」

祐哉「ああ」

イツセー「じゃ部長からの伝言だ・・・」

とある場所では、

ジル「この程度、アスタルテ」

アスタルテ「・・・命令受信《アスペクト》」

そして・・・ジル・ド・シエは目的の物を見つけた

ジル「おおお、主をついに」

???「そこまでだジル・ド・シエ」

ジル「貴方たちは」

祐哉「よお」

ジル「まさかこうも早く来るとは」



祐哉「俺の姉さんは回復能力あるから、キズはもう治した」

ジル「それで貴方たちは何の為に此処に」

祐哉「決まってるお前をぶっ飛ばし為だ」

ジル「ほお貴方たちにできますか」

祐哉「いくぜ！個々から先は俺のステージだ！」

雪菜「いえ！私たちのステージです。」

ジル「良いでしょ私も本気で行きますよ」

ジル・ド・シエは呪文唱えて、まわりに黒の物体が出っけてきて、アスタルテはまわりに眷獸をだし

祐哉「なっマジか！」

雪菜「祐哉さん！」

祐哉「わかってる雪菜！行くぞ」

雪菜「はい！」

俺と雪菜は武器構えて、ジル・ド・シエが出した黒の物体やアスタルテに向かって、

ジル「そんな物で」

俺は2丁拳銃で黒の物体を撃ち抜いて雪菜は雪霞狼で切り

ズババババ

祐哉「これでどうだ！」

しかし黒の物体はキズが治ってきて

祐哉「なっ！キズ！」

ジル「その程度、アスタルテ」

アスタルテ「……命令受信《アスペクト》」

アスタルテ俺たちを襲ってきて

雪菜「祐哉さん彼女は私が引き受けます」

祐哉「わかったあっちは頼む雪菜」

雪菜はアスタルテの方に行き

ジル「一人で私に勝つつもりですか？」

祐哉「誰か一人だと言った」

ジル「なに」

祐哉「見せてやるぜ！俺のいや、俺たちの力を」

俺の左手に力いれ

祐哉「魔剣の力を我に……来いレーヴァティン」

レーヴァティン「やっとな私の出番マスター」

祐哉「ああ頼むレーヴァ」

雪菜「あの子が祐哉さんの専属」

ジル「まさかそれが貴方の力ですか」

祐哉「ああ、そうだ。行くぞレヴァ」

レーヴァテイン「了々解」

レヴァは黒の物体を切り付け

ジル「その程度で、な、キズが治らない」

祐哉「突然だレヴァは魔剣しかも呪いの魔剣だ」

ジル「呪いの魔剣だと」

レヴァはひたすらに黒の物体を切り

ジル「このままでは、アスタルテ」

雪菜「いえこれで終わりです」

雪菜はアスタルテの頭上に雪霞狼を差し

雪菜「今です祐哉さん」

祐哉「ああレヴァ」

レーヴァテイン「これで・・・終わり」

アスタルテの眷獣の中に沢山の剣が出てきて

アスタルテ「・・・・・・・・！！！」

アスタルテは複数の剣に刺されて倒れた

ジル「ばかな、アスタルテが」

祐哉「あとはお前だけだ」

ジル「まだです」

祐哉「いやこれでチエツクメイトだ！」

俺は拳銃を向け

祐哉「J A C C S P O T S H O T」

ジル・ド・シエの本を撃ち抜き、ジル・ド・シエは倒れた、

雪菜「終わりましたね」

祐哉「・・・頼む、ああわかった」

雪菜「祐哉さん？電話ですか？」

祐哉「ああごめん」

雪菜「いえ、誰からだったんですか？」

祐哉「古城先輩、アスタルテについてな」

雪菜「大丈夫なんですか？彼女は？」

祐哉「大丈夫だすぐに古城先輩来るって」

レーヴァテイン「・・・マスタ〜」

レヴァが俺の側にきて

祐哉「どうしたレヴァ」

レーヴァティン「チュ・・・おやすみマスター」

雪菜「なななにをしてるんですか祐哉さん」

祐哉「いやこれは」

雪菜「祐哉さんのヘンタイ！」

バチーン！

祐哉「なんでだ！」

古城「・・・どうゆうこと」

あれから二日後

雪菜「今日からこの家にお邪魔する姫終雪菜です」

イツセー母「こちらこそよろしくね雪菜ちゃん」

イツセー「祐哉これは？」

祐哉「ああ獅子王機関から俺と一生に暮らすようにって」

イツセー「マジか」

祐哉「マジだ」

雪菜「祐哉さんこれからもよろしくお願いいたしますね」

祐哉「ああよろしく雪菜」

俺たちにまた新しい家族が増えた

## 特別編 〈修学旅行編〉 番外編・修学旅行編その1

### 【祐哉視点】

フェイト「来週から修学旅行ですが準備は大丈夫ですか？」

一同「大丈夫です」

フェイト「それじゃ班ごとになって最終確認してください」

一同「はい」

俺たちは、来週から二泊三日の修学旅行だ。場所は北海道だ！

祐哉「うーんこんな感じでいいかな？達也、信二」

達也「俺は大丈夫だと思う」

信二「俺も良いと思う、他の人はどう？」

雪菜「私は大丈夫です。凧沙ちゃんと夕立ちちゃんは？」

凧沙「大丈夫だよ」

夕立「夕立も大丈夫かい」

祐哉「これで決まりだな」

く修学旅行当日く

夕立「わーすごいぽい」

凧沙「もお、夕立ちちゃん早く行くよー」

夕立「待ってぽい凧沙ちゃん」

なのは「はいみんな集合」

フェイト「班ごとに並んで下さい」

一同「はい」

なのは「それじゃみんな行くよー」

く飛行機の中く

祐哉「Z z z z z」

達也「寝てるし」

夕立「飛行機が出て10分ぐらいしか立てないのに早いぽい」

凧沙「ハハハ仕方ないよ。ね、雪菜ちゃん」

雪菜「……」



凧沙「雪菜ちゃん？」

雪菜「Zzzzz」

一同「二寝てるし！」

くそして北海道到着く

祐哉「うーんよく寝たく」

雪菜「私もよく寝たした」

信二「だろうな」

なのは「みんなく班ごとに並んで」

???「一日目は班ごとになって回ってもらう、それで良いですか？なのは先生」

なのは「大丈夫です。一刀先生」

祐哉「俺たち、最初はオルゴール館からだな」

信二「ああそうだ」

くオルゴール館く

凧沙「すごいいろんなオルゴールがある。」

夕立「うーん」

達也「どうしたの、夕立ちゃん」

夕立「姉妹のどれにしようか考え中ぼい」

達也「あー夕立ちちゃんの姉妹多いんだけ」

夕立「うん。だから悩むぼい」

達也「このオルゴールはどうかな？」

夕立「良い感じぼい。これにするぼい。ありがとう達也君」

雪菜「祐哉さんはなんのオルゴールを買うのですか？」

祐哉「俺はこれかな」

雪菜「○○たったーつだけの花」

祐哉「ああ」

雪菜「アーシアさんのお土産ですか？」

祐哉「そうだよ。アーシア姉さんには助ければつなしだからなーこれはそのお返し」

雪菜「イツセー先輩のは？」

祐哉「うーんアニキは食い物良いかな？アニキけっこう食べるし」

くそのころ兵藤家ではく

イツセー「ハックショ！」

アーシア「イツセー大丈夫ですか？風ですか？」

イツセー「いや多分祐哉あたりが噂をしてんだと思う」

くの中く

祐哉「オルゴール館このあたりで良いかな？」

凧沙「私たちも大丈夫だよ」

祐哉「じゃ次の所に行くか」

一同「「おー」」

こうして俺たち修学旅行が始まった

## 番外編・修学旅行編その2

【祐哉視点】

俺たちはオルゴール館をあとにして、牧場に到着した。

??? 「あれ、祐哉？」

祐哉 「ん、清隆？」

凧沙 「あー清隆君ヤッホー」

清隆 「凧沙は元気だな。それで祐哉たちも牧場に」

祐哉 「ああ」

凧沙 「清隆君他の人は？」

清隆 「みんなは牛の乳絞り行ってる。」

祐哉 「成る程」

清隆 「祐哉の班は？」

祐哉 「買い物に行ってる」

清隆 「あ、みんなが帰ってきたな。」

祐哉 「そのようだな」

俺たちは清隆たちと別れ、先生たちと合流して宿泊場所に到着した

なのは「みんな集合く19時30分に夕食なので19時30分には大広間に来て下さいね。もし場所がわからない人はしおりに場所が載ってるので、それを見て来て下さい。それでは解散」

俺からは部屋に向かった。

【雪菜視点】

私たちは部屋に入って、

凧沙「雪菜ちゃん、夕立ちちゃん温泉に行かない？」

夕立「夕立はOKぽい」

雪菜「私も構わないよ凧沙ちゃん」

凧沙「じゃ温泉に出発く」

夕立「おー」

私たちは温泉に向かった。

く温泉く

信二「女湯かと思った残念男湯でした」

達也「なぜ男湯なんだ」

清隆「うP主に聞けば」

うP主「ワタシハヨクワカリマセン」

信二「メタいつて」

祐哉「ハハハ」

く女湯く

凧沙「ふー気持ちいい」

雪菜「そうですね」

夕立「あれ誰か来たっぽい」

???「凧沙ちゃん？」

雪菜「フーカさんとリンネさん」

フーカ「みなさんどうもです」

凧沙「あ、二人ともヤツホー」

夕立「二人も一緒はいるっぽい」

リンネ「あ、おじやまします」

フーカ「ふー生き返るく」

リンネ「フーちゃん気持ちいいね」

夕立「ねえねえみんな誰か好きかい？」

一同「二／＼／＼／＼な、な、何を言ってる？」

夕立「うーわすごくわかりやすいかい？」

風沙「夕立ちちゃんは誰が好きなの？」

夕立「うーん今は居ないかい？」

雪菜「／＼／＼わ、わ、私は」

風沙「雪菜ちゃんは祐君ことが好きなんですよ？」

雪菜「／＼／＼な、な、なんで」

風沙「だって雪菜ちゃん祐君と一緒にいるじゃない？」

雪菜「／＼／＼あ、あれは、／＼／＼その」

フーカ「そーか雪菜さんは兵藤さんのこと好きなんだ」

夕立「フーカちゃんは兵藤君好きかい？」

フーカ「え、いや、その」

リンネ「もおフーちゃん誤魔化せてないよ」

フーカ「うーん」

夕立「フーカちゃんは何時兵藤君ことが好きになったのかい？」

フーカ「それは、ゴールドデンウィーク入って、リンネの家によった帰り変なゴロツキ

たちに絡まれてな兵藤さんが助けてくれたんです」

リンネ「そこで好きなの？」

フーカ「リンネ」

雪菜「そうなんだフーカさんも」

風沙「そう言うえば一夫多妻だったよね」

雪菜・フーカ「な、」

「そのころ男湯では」

祐哉「聞こえてるって」

達也「ハハハ」

信二「とりあえず祐哉爆発しろ」

祐哉「なんで！」



## 番外編・修学旅行編その3

【祐哉視点】

俺たちは何故か雪菜たちの部屋にいた

夕立「さあみんなでゲームして遊ぶほい」

祐哉・達也「いやいやいやいや」

凧沙「どうしたの二人とも」

信二「俺たちがいて大丈夫なのか？」

凧沙「大丈夫だよ。」

雪菜「私は良いと思いますよ」

祐哉「まあいつか」

達也「で、何して遊ぶだ？」

凧沙「あ、まってまだ全員集まってないよ」

祐哉「あと誰がくるの？」

凧沙「それは・・・」

コンコン

フーカ「おじやます」

凧沙「いらつしやいフーカちゃんリンネちゃん」

リンネ「どうも失礼します。」

夕立「これで全員揃ったばいから今から王様ゲームをやるばい」

信二「なんで王様ゲーム？」

夕立「ん、だつてこう言う所では王様ゲームが良いつて村雨お姉ちゃんが言つてた」  
達也「成る程」

く王様ゲーム開始く

一同「二王様だくれだ」

凧沙「最初は私だ。うーんそうだ7番が3番頭を撫でる」

祐哉「7番は俺だ」

フーカ「3番はわしじや」  
なでなで

フーカ「へへへ・・・」

リンネ「フーちゃん顔が」

雪菜「うゝ（いいいな）」

信二「次いくぞ」

一同「二王様だくれだ二」

信二「あ、俺だ」

達也「なにを命令するんだ」

信二「よし。6番が王様の肩を揉む」

夕立「夕立ぽい」

信二「彘」

祐哉・達也「あ、」

夕立「じゃ行くぽい」

信二「え、ちよ、まつ」

夕立「えい！」

信二「あーあーあー」

祐哉「・・・よし次行こう」

一同「二王様だくれだ二」

リンネ「私です。それじゃ2番が王様にお茶買ってくる」

フーカ「わしじゃ」

リンネ「じゃお願いねフーちゃん」

フーカ「ああじゃ行くか」

リンネ「いつてらっしやい」

フーカ「ほいリンネ」

リンネ「ありがとうフーちゃん」

「個々からはダイジエストです」

達也「1番がなんかのモノマネする」

リンネ「私ですね。じゃ行きます。」

凧沙「なんだろう」

リンネ「お兄ちゃん一緒にバスケやろうよ」

祐哉・達也「アウトロー」

信二「うP主中の人ネタはやめろ」

夕立「次は夕立ぼい。4番が1番の人を膝枕をする」

凧沙「私だ」

雪菜「1番は私です」

凧沙「どうぞ雪菜ちゃん」

雪菜「はい失礼します凧沙ちゃん」

フーカ「王様はわしじやな。5番の人は良い声で喋る」

祐哉「俺かよ」

達也「頑張れ」

祐哉「さあ実験を始めようか！」

雪菜・フーカ「／／／／／ドキッ！」

祐哉「俺かく6番が王様にお菓子を食べさせる」

雪菜「わ、私です」

凧沙「おーー」

雪菜「あ、あの祐哉さんどうぞ」

祐哉「あ、ああ」

パクッ

リンネ「私です。7番が1番の髪をブラッシングをする」

夕立「1番は夕立ぼい」

達也「7番は俺だ」

夕立「お願いぼい達也君」

達也「ああ、こんな感じで良いか？」

夕立「うん。気持ち良いぼい」

信二「次で最後かな」

凧沙「そうだな。時間的に調度良いかな」

夕立「最後は誰かなほい」

凧沙「最後は私です」

雪菜「最後はどうします？」

凧沙「最後はやっぱりあれかな。5番が1番と3番を腕枕して寝る」

達也「いや大丈夫なのかそれ」

凧沙「大丈夫私たちは別のベッド寝るから」

夕立「みんなは何番ほい。夕立は違うほい」

達也「俺も違う」

リンネ「私も違います」

信二「俺も違う」

祐哉「俺が5番だ」

雪菜「私が3番です」

フーカ「わしが1番」

凧沙「決まりだね」

祐哉「本当に大丈夫か？」

凧沙「大丈夫だよ」

く終演く

雪菜「それじゃおじやまします祐哉さん」

フーカ「わしも良いですか？」

祐哉「あ、ああどうぞ二人とも」

・  
・  
・  
・  
・

雪菜「そ、それじゃ祐哉さんお休みなさい」

祐哉「お、お休み雪菜」

フーカ「ひよ、兵藤さん」

祐哉「どうしたフーカさん」

フーカ「わしも兵藤さんのこと下の名前でも良いですか？」

祐哉「あ、ああ大丈夫」

フーカ「じゃ、ゆ、祐哉」

祐哉「な、なにフーカさん」

フーカ「祐哉も呼び捨てで呼んで」

祐哉「わ、わかったフーカ」

フーカ「／／うん祐哉」

祐哉「お、お休みフーカ」

フーカ「お、お休み祐哉」

## 番外編・修学旅行編その4

【祐哉視点】

〜修学旅行二日目〜

俺は目が覚めて、

祐哉「あれ、腕が動かない」

左を見ると、

雪菜「〜す〜祐哉さん〜」

右を見ると、

フーカ「〜祐哉〜」

祐哉「思い出した〜」

俺の腕を枕にしてる二人を見て、思い出してた、

達也「祐哉起きてるか」

祐哉「あ、達也たち悪いけど、二人を・・・」

一同「二おじやました」

祐哉「おい！」



く朝食中く

清隆「ハハハ・それは災難だったな」

祐哉「笑い事じゃないって」

俺が二人を見ると、

フーカ・雪菜「／＼／＼／＼／＼」

顔が真っ赤になってた。

く小樽運河く

信二「二日目は小樽運河か」

凧沙「何処から回る」

達也「うくんそうだな」

祐哉「ん、」

俺が雪菜の方見ると、

雪菜「・・・・・・・・」

祐哉「(仕方ない) 達也悪い俺雪菜と回るから」

雪菜「え、祐哉さん」

達也「・・・わかった、じゃまたあとで」

祐哉「ああまたあとでな」

俺は達也たちと別れ、雪菜と二人きりなり、

祐哉「じゃ行くか雪菜」

雪菜「は、はい」

俺と雪菜は一緒に小樽運河を回り・・・

雪菜「あ、あの祐哉さんなんで私と・・・」

祐哉「ん、ああ、まく昨日のこととかな」

雪菜「あ、くく／＼／＼」

祐哉「まあ、せっかくの修学旅行だから楽しもう。な、雪菜」

雪菜「(祐哉さん)・・・はい！」

俺と雪菜はいろいろ回り・・・

雪菜「祐哉さん祐哉さんこれなんですか？」

雪菜は緑の物体に指をさし俺に聞いてきた、

祐哉「ああそれはマリモだよ。」

雪菜「マリモさんですか」

祐哉「さて、次は何処に行く？」

雪菜「う〜んそうですね〜あ、そろそろお昼ですからお昼ご飯しませんか？」

祐哉「かしこまりました。お嬢様」

俺たちは昼飯を食べ終わり・・・

雪菜「あ、・・・」

祐哉「雪菜・・・」

雪菜「な、何でもありませんよ祐哉さん。さ、さあそろそろ集合時間ですから行きましょう。」

俺は雪菜が見てた方を見ると・・・

祐哉「(成る程) 雪菜ワリイちよつと待ってて」

雪菜「祐哉さん？」

・・・

祐哉「雪菜はいこれ」

俺は雪菜に雪の結晶がついてるネックレスをプレゼントして・・・

雪菜「祐、祐哉さんこれ」

祐哉「ああ、雪菜が欲しそうにしたから、俺からのプレゼントだ」

雪菜「くくくく」

祐哉「雪菜？」

ポロポロ・・・

雪菜は突然泣き出し、

祐哉「えー雪、雪菜どうした？な、なんか悪い事した？」

雪菜「いえ、嬉しくて・・・ありがとうございます。そ、そのこれは私からの  
チュ

雪菜「///お返しです」

祐哉「///雪、雪菜」

雪菜が俺のほっぺにキスして・・・

雪菜「さあ祐哉さんみんな所に行きましょう」

祐哉「あ、ああそうだな」

俺たちの二日目の修学旅行は終わって

く修学旅行三日目く

なのは「みなさん集合してください」

夕立「修学旅行すつごく楽しかったほい」

雪菜「ですね」

（兵藤家）

祐哉・雪菜「ただいま（戻りました）」

イツセー「おかえり祐哉、雪菜ちゃん」

祐哉「はいこれ、アニキたちのお土産」

イツセー「サンキュー」

こうして俺たちの修学旅行は終わった

## 艦これ編 深海の姫

## 第1話

【???視点】

俺たちは任務が終わり、

「久しぶりの家だ」

「司令官着いたの？」

司令官? 「ああ」

「ここが司令官の家か」

「ハラシヨ」

「いやそれは関係ないでしょ」

司令官? 「ハハハみんないくぞ」

【イツセー視点】

リアス「ねえイツセーそろそろじやない」

イツセー「もうそんな時間ですか」

アーシア「誰が来るですか？」

祐哉「俺たちのお父さんだよ」

リアス「イツセーたちのお父さん？」

雪菜「確か何処かの場所の司令官でしかけ」

祐哉「ああそうだ」

ピンポーン

モードレッド「来たみたいだな」

レーヴァテイン「私が出ようか？」

祐哉「いや俺とアニキが出るよ。母さんは料理して忙しいから」

雪菜「わかりました」

俺と祐哉は玄関まで来て・・

イツセー父「ただいま」

イツセー・祐哉「おかえりお父さん」

???「司令官早く中に」

イツセー父「すまないみんな」

祐哉「あれみんなも来たんだ」

???「はいです」

リアス「イツセーお母さまが準備が」

??? 「「「うん?」「」」

リアス・雪菜「誰?」

【祐哉視点】

イツセー父「それでは、カンパニー

一同「「カンパニー」」

イツセー父「まあ俺が居ない間色々あつたみたいだな。積もる話はあとでまずは自己紹介から始めようか」

アーシア「じゃまず私からアーシア・アルジエントと言います」

リアス「次は私ねリアス・グレモリーよ」

雪菜「私は姫終雪菜です。」

??? 「じゃ次は私たちね」

イツセー父「そうだなじゃまずは」

??? 「まず私から良い? 司令官」

イツセー父「ああそうだな暁から順番に頼む」

暁「それじゃ暁からね。暁型一番艦暁よ一人前のレディして扱ってよね」

?????? 「暁型二番艦響だよ。その活躍ぶりから不死鳥の通り名もあるよ」

?????? 「暁型三番艦雷よかみなりじゃないわ」



??? 「暁型四番艦電なのです沈んだ敵も助けたいのです」

リアス 「四人は人間なの？」

イツセー 「人間じゃないよ。四人は艦娘ですよ。」

アーシア 「艦娘？」

祐哉 「ああ艦娘だ」

雪菜 「確か艦娘は？」

祐哉 「そうだ戦艦の力宿した女性の事だよ」

イツセー 「そしてお父さんはその艦娘を指揮する司令官なんだ」

アーシア 「なんかすごいです」

リアス 「その艦娘が此所にいるってことは、」

祐哉 「うんお父さんの艦娘だよ」

イツセー母 「暁ちゃんたちはよく家に遊びにきてイツセーと祐哉と一緒によく遊んでたわね。」

暁 「はい奥様祐哉兄さん暁にとって大事な人です」

響 「うん兄さんたち私たち欠けがの人です」

雷 「そうよねー暁姉、響姉の夢は兄さんたちのお嫁さんになることだからねー」

祐哉・イツセー 「ブー」

俺とアニキは飲んでたジュースを吐き出した・・・

リアス・アーシア・雪菜「!!」

暁「ちよつと雷／＼／たしかに暁の夢は祐哉兄さんお嫁さんだけど」

響「／＼／私はイツセー兄さんがよければ」

ゴゴゴ

祐哉「どうしようすごくやな感じするんだけど」

イツセー「奇遇だな俺だ」

リアス「イツセーちよつと良いかな？」

イツセー「(目、目が笑ってない)」

雪菜「祐哉さんこれはどうゆうことですか？説明してくれますか？祐哉さん」

祐哉「雪、雪菜」

モードレッド「あくあ俺知くらゐい」

レーヴァテイン「まったくバカばっか」

祐哉・イツセー「なんでだ」

俺とアニキは雪菜とグレモリー先輩の天誅をくらった

## 第2話

【イツセー視点】

俺と祐哉は部長たちの天誅うけて部屋でぐったりしてつた。

イツセー「はく酷い目にあつた」

イツセー父「ハハハお前らも大変だな」

祐哉「他人事みたいに言つて」

イツセー父「まあ頑張れ」

祐哉「で、俺たちに用が有るんじゃない父さん？」

イツセー父「!!!なんでそう思うだ？」

祐哉「まあ普通なら暁たちを連れて来るわけがないからな」

イツセー父「まったくよくわかつたな」

イツセー「父さんは俺たちになにを頼みたいんだ？」

イツセー父「お前たちは深海棲艦のことは知ってるか？」

イツセー「ああ父さんから聞いているかな知ってるよ」

祐哉「その深海棲艦がどうしたの父さん？」

イツセー父「ああ実はなつい最近深海棲艦の姫級を捕獲した」  
イツセー・祐哉「はあああーーーーー」

【祐哉視点】

父さんの爆弾発言に俺とアニキは・・・

イツセー「父さんそれは大丈夫なのか？」

祐哉「危険は無いのか父さん？」

イツセー父「まあまあ二人とも落ち着け」

イツセー・祐哉「すぐく落ち着いた」

祐哉「で、その姫級の名前は？」

イツセー父「名前は・・・駆逐古姫」

イツセー「駆逐・・・古姫？」

イツセー父「ああそうだ」

祐哉「その駆逐古姫は危険じゃ無いのか？」

イツセー父「大丈夫だ。古姫は共存派の深海棲艦だ」

イツセー「共存派？」

イツセー父「ああそうだ。共存派を簡単に平和主義の深海棲艦だ」

祐哉「成る程だから大丈夫な訳か」

イツセー父「その通り。それに古姫は共存派のリーダー的な存分だ」

イツセー「それじゃ俺たちの依頼は？」

イツセー父「その古姫の護衛だ」

祐哉「護衛？」

イツセー父「ああ深海棲艦に共存派がある用にその反対の戦闘派の深海棲艦が存在する」

祐哉「それってまさか」

イツセー父「その通り祐哉とイツセーで古姫を戦闘派の深海棲艦から守ってほしい」

イツセー・祐哉「・・・」

父さんは俺たち前で頭を下げて・・・

イツセー父「頼む二人ともこの作戦で、古姫を狙ってる深海棲艦から古姫を守れば戦闘派の深海棲艦が大分減り共存派の深海棲艦増えるだ」

祐哉「はあ俺たちの答は決まってるよ。なあアニキ？」

イツセー「当然だ。その依頼受けるよ父さん」

イツセー父「本当が？」

祐哉「本当だよ父さん」

イツセー父「ありがとう二人とも」

俺とアニキは父さんの依頼を受けることにした

【雪菜視点】

私たちは暁ちゃんたちと一緒に祐哉さんや兵藤先輩ことを聞いてた。

暁「それで祐哉さんと一緒お風呂に入ったこともあります。」

雪菜「へ〜祐哉さんと一緒にね〜」

電「(め、めが笑ってないのです)」

雷「ひ、響は他になんかないかしら？」

響「ん、うーんそうだな〜」

リアス「そういうえばイツセーたち遅いわね」

アーシア「そうですねなんかあったのでしようか」

雪菜「(祐哉さんに暁ちゃんのこと聞かないといけませんね。私は祐哉さんの監視役

なのですから)」

まだ私たちは知らなかった艦娘やそして深海棲艦のことを・・・

祐哉「ビク、な、なんかやな予感する」

イツセー父・イツセー「??？」

## 第3話

【イツセー視点】

　　次の日の朝

　　俺と祐哉は父さんと一緒にとある場所に向かつてか・・

イツセー「此所も久しぶりだな」

祐哉「みんな元気かな？」

イツセー父「ああみんなは昔と変わらずに元気だよ」

俺と祐哉は何年かぶりに父さんの鎮守府に来て・・

???'「お帰りなさい司令官」

イツセー父「ああただいま大和」

イツセー「久しぶり大和姉」

大和「あらイツセー君、祐哉君久しぶり」

祐哉「久しぶりです大和姉さん」

大和「二人が来たってことは、」

イツセー父「そうだ」

??? 「司令官」

イツセー父 「どうした、吹雪なんかあったか？」

祐哉 「吹雪さん久しぶり」

吹雪 「祐、祐哉さん、お、お久しぶりです!!」

祐哉 「元気だった吹雪さん」

吹雪 「は、はい! (〃〃〃祐哉さんが来るなんて知らなかったよ、髪とか変じゃないかな)」

祐哉 「ん? どうしたの吹雪さん、大丈夫?」

吹雪 「大、大丈夫です!」

イツセー 「ところで吹雪は父さんに用があったじゃ?」

吹雪 「は、はい!! そうでした。司令官古姫さんが司令官に話したいことがあるそうです。」

イツセー父 「古姫が・・・わかったすぐに向かう」

俺たちは駆逐古姫がいる部屋に向かった・・・

司令室

イツセー父 「古姫俺に話したいこととはなんだ?」

駆逐古姫 「来たか・・・司令、実はこの近くでワタシの仲間が深海棲艦に襲われてるこ



とがわかつ。」

イツセー父「な！それは本当か古姫？」

駆逐古姫「ああ、本当だ」

イツセー「なあ父さん」

イツセー父「どうした？」

駆逐古姫「司令うしろ人は誰だ？」

イツセー父「俺の息子たちだ」

駆逐古姫「そうか。君たちが司令が言ってた人か」

イツセー「ああ兵藤一誠だ」

祐哉「兵藤祐哉です」

駆逐古姫「駆逐古姫だよろしく頼む」

俺たちは自己紹介をして・・

祐哉「アニキ父さんに聞きたいことがあったんじや」

イツセー「そうだ父さん、なんで古姫さんは仲間が深海棲艦に襲われていることがわかるんだ？」

イツセー父「それは・・深海棲艦は同じ深海棲艦の気配で解るんだ」

祐哉「本当かよ！」

駆逐古姫「本当だ。正確な物までは近くに来ない限りわからんけど」

イツセー「その気配の深海棲艦が古姫さんの仲間の物だったとことか」

祐哉「ああそして古姫さんや俺たちの敵の深海棲艦の気配もある。だろ古姫さん、父さん」

駆逐古姫「そうだ、だからワタシに仲間を救う力貸してほしい」

イツセー父「(古姫・・・)」

イツセー「大丈夫だ古姫さん俺たちは古姫さんを救うために個々まで来たんだ。だから安心してくれ古姫さん」

祐哉「そう言うことだから俺たちも力になります。古姫さん」

駆逐古姫「ありがとう一誠、祐哉」

こうして俺たちは駆逐古姫の仲間を救うのであった。

## 第4話

【祐哉視点】

俺たちは古姫さんの仲間を助ける為に準備をしてた・・・

イツセー「古姫さんちよつと良いかな？」

駆逐古姫「なんだ一誠？」

イツセー「古姫さんの仲間はどんな名前なんだ？」

駆逐古姫「そう言えば教えてなかったな」

祐哉「父さんは解る？」

イツセー父「いや俺も知らん」

吹雪「じゃ古姫さん名前を教えてくださいても良いですか？」

駆逐古姫「ああ大丈夫だ！ワタシの仲間の名前は空母水姫だ」

〽鎮守府近くの海城〽

空母水姫「くう、このままでは」

??? 「ココマデだ空母水姫」

空母水姫 「まだ、終わらない・・・」

空母水姫は上空に艦載機を出し・・・敵の深海棲艦に向かって・・・

??? 「コノテイドの艦載機でワタシにカテルトモ」

深海棲艦は艦載機を簡単に落とした・・・

??? 「コノテイドか空母水姫」

空母水姫 「そんな・・・」

??? 「コレで沈メ」

深海棲艦は空母水姫に止め指そうと空母水姫に近づき・・・

空母水姫 「(どうやらワタシは個々までのようです。ごめんね古姫ちゃん)」

空母水姫は自分の最後と思い、目を閉じた

イツセー 「さくせくるるか」

突然空母水姫の間に入り

??? 「ナッ！」

イツセー 「ぶっ飛べ」

深海棲艦を殴り飛ばし

イツセー 「大丈夫か？」

空母水姫「は、はい！大丈夫です」

イツセー「ふう、なんとか間に合ったな」

???「キサマナニを」

イツセー「テメエこそ大切な仲間になにしやがる」

空母水姫「どうしてワタシを？」

イツセー「当然だ仲間だからだ！理由はそれだけだ」

空母水姫「仲間？ワタシが？」

イツセー「ああ」

???「ワタシをムシスルナ」

イツセー「うるさい」

また深海棲艦をぶっ通し

祐哉「アニキー」

イツセー「祐哉遅いぞ」

祐哉「悪い。アニキが行ったあとに別の深海棲艦が出ってきて邪魔されてな。全部倒

すのにすこし時間が掛かっちゃまた。」

イツセー「それじゃあとは、」

祐哉「あああとはあいつだけだ」

空母水姫「(この人たちはなんで?)」

駆逐古姫「水姫、無事か?」

空母水姫「古姫ちゃん!」

駆逐古姫「良かった水姫お前が無事で」

空母水姫「古姫ちゃんこそ無事で良かった。そうだ古姫ちゃん今までどうしてたの

?」

駆逐古姫「それは・・・」

???「キサマラよくも」

イツセー「続きはこいつを倒したあとでな」

駆逐古姫「気をつけろあいつは戦艦夕級だ」

祐哉「戦艦・・・ね、アニキどうだ?」

イツセー「俺一人で充分だ」

駆逐古姫・空母水姫「え、」

戦艦夕級「ハハハこの戦艦夕級にタイシテ一人ダトワラワセセルナニンゲン」

イツセー「だったら力を見せてやるよ」

祐哉・イツセー父「あ、」

イツセー「(行くぞドライグ)」

ドライグ「(ああいつでもいいぞ相棒)」

イツセー「禁手《バランスブレイク》」

ドライグ「Welsh Dragon Bslance Breaker! 《ウエル

シュ ドラゴン バランス ブレイカー》」

そう言うときアニキの体に赤い龍の鎧を纏った

## 第5話

【祐哉視点】

アニキは赤い龍の鎧を纏って・・・

イツセー「さあお前の罪を数えろ」

戦艦タ級「人間ガナメるな」

戦艦タ級がアニキに砲撃して・・・

戦艦タ級「コレで・・・ナ、」

イツセー「その程度か戦艦タ級」

アニキは戦艦タ級の砲撃をかわし一瞬で懐に入り

イツセー「遅い！」

思い切りタ級を殴り飛ばした

戦艦タ級「まだだ」

イツセー「いや！コレで終わりだ」

《b o o t h、 b o o t h、 b o o t h》

イツセー「ドラゴンシユート！」



戦艦夕級「オ、オノレ」

戦艦夕級はアニキが打った一撃で消滅した

空母水姫「す、すごい」

駆逐古姫「戦艦夕級を一撃で」

イツセー「ふー二人とも大丈夫か？」

空母水姫「は、はい！大丈夫です」

駆逐古姫「ワタシも大丈夫だ」

イツセー「良かった」

空母水姫「ドキ／＼／＼」

祐哉「あ、」

イツセー「空母水姫さん顔が赤いけど大丈夫？」

空母水姫「大、大丈夫でしゅ／＼／＼」

イツセー「そ、そうか」

祐哉「じゃ戻ろうか」

イツセー「そうだな戻るか」

俺たちは鎮守府に戻り・・・

イツセー「ただいま」

大和「おかえりなさい」

吹雪「みなさん無事で良かったです」

空母水姫「ね、古姫ちゃんワタシ此所に来て大丈夫かな」

駆逐古姫「なんじゃ大丈夫じゃ司令官には許可をもらってる」

吹雪「空母水姫さんですよね？」

空母水姫「ええ」

吹雪「初めまして吹雪型一番艦吹雪です。これからよろしくお願いいたします。」

空母水姫「!!!」  
「ワタシの方こそよろしくお願いいたします。そして改めて空母水

姫です。」

一同「よろしく（お願いします）水姫（さん）」

こうして父さんの鎮守府に新しい仲間空母水姫さんやてきた。

〈兵藤家〉

祐哉・イツセー「ただいま」

レーヴァテイン「おかえり」

モードレッド「あ、マスター帰ったか」

祐哉「あれ、他のみんなは？」

モードレッド「あゝ」

暁「おかえりなさい祐哉兄さん」

そう言うのと暁が俺に飛び込んできた

祐哉「ゴフウ」

レーヴァテイン「マスター大丈夫」

祐哉「大丈夫だ問題ない」

暁「えへへへ」

祐哉「(まったく仕方ないな)」

ナデナデ、俺が暁の頭をなでると、

暁「祐哉兄さんのナデナデすごく気持ちいい」

レーヴァテイン「じー」

祐哉「どうした？レヴァ」

レーヴァテイン「いや別々に」

祐哉「レヴァちよつと」

レーヴァテイン「なに」

ナデナデ、俺はレヴァの頭もなでってやり・・・

レヴァアテイン「マ、マスター／＼／＼／」

祐哉「嫌だったか？」

レヴァアテイン「い、いやじゃない／＼／＼／」

暁「ふにゃ〜」

レヴァアテイン「／＼／＼／」

俺が二人をなでつてると、

雪菜「なにをしてるんですか、ゆ、う、や、さん」

ゴゴゴ

祐哉「雪菜？い、いやこれは」

雪菜「祐哉さんのヘンタイ！」

祐哉「なぜだー」

俺はまた雪菜の天誅を食らった。

# ハイスクールD×D・フェイトシリーズ編 放課後の聖

## 杯戦争

### 第1話

【???視点】

オレは反逆者だ。昔にオレは実の父親を殺そうとした。だが、それは失敗し逆にオレが殺された。

??? 「うおおお父親えええ覚悟」

??? 「くう！まだ終わりじゃありません」

グサツ!!!

??? 「な、まさかこんな父・・・親・・・」

オレは父親に殺られて、

??? 「モード・レッド・ワタシハ・ムリヨクダ」

その時父親は何を言ったかオレは聞こえなかった。けどそんな時の父親の悲しみの顔は覚えてる。

モードレッド「夢か、なんであの時父親は、あんな顔をしたんだ。」  
イツセー「モードレッド、朝メシができたぞ」

モードレッド「わかったマスター」

イツセー「ん、どうした？モードレッド」

モードレッド「なんもねーよ。」

イツセー「・・・」

オレがそう言う・・・

ナデナデ・・・

モードレッド「な、な、な、何をするんだいきなり」

イツセー「いやモードレッドが元気がなかったから」

マスターは突然オレの頭を撫でてきた

イツセー「嫌か？」

マスターは笑顔で聞いてくる。

くそ、その顔でそれを言うのは、反則だ。

モードレッド「い、嫌／／じゃない／／」

イツセー「そうか。」

祐哉「コホン、アニキそろそろ良いかな？」

イツセー・モードレット「あ、」

【イツセー視点】

兵藤家リビング

一同「「いただきます」」

祐哉「まったくアニキは」

イツセー「すまんすまん」

レーヴァテイン「このみそ汁味が違う」

イツセー母「今日はリアスさんが作ってくれたのよ」

雪菜「すごいです。グレモリー先輩」

イツセー「すごく美味しいです。部長」

リアス「ありがとうございます。二人とも」

アーシア「むくく」

リアス「お母様今日部活部員を部屋によんでも良いでしょうか？」

イツセー母「構わないわリアスさん」

リアス「ありがとうございますお母様」

祐哉「グレモリー先輩なんで今日はうちの部屋なんですか？」

リアス「今日は旧校舎の大掃除で部室が使えないのよ」  
祐哉「成る程」

【達也視点】

く藤丸家く

達也「姉さん朝だよ。朝ごはんできてるよ。」

???「うくくもう朝くく達也」

達也「もう朝だよ。立夏姉さん」

立夏「ありがとう達也」

達也「ほら、早く起きて朝ごはん食べるよ。」

立夏「はくい」

まったく姉さんは。

彼女は俺の姉さんの、藤丸立夏姉さん。1つ上で高校一年、まあ見た通りすこしのんびり者だ。

ピンポン



??? 「おじやまします。先輩起きてますか？」

立夏 「大丈夫だよマシユ。今起きた」

達也 「起こされたの間違いなだろ」

マシユ 「ハハハ・いつも大変です達也君」

達也 「もう慣れたよ。マシユ先輩」

部屋に入って入って来たのは、姉さんと同じクラスのマシユ・キリエライト。どうして彼女が姉さんのことを先輩と呼ぶのは・・・

達也 「それはまた今度だ」

立夏・マシユ 「えーそんていいのー」

達也 「俺は知らん。うP主に聞け」

うP主 「・・・また次回」

達也・立夏・マシユ 「おい！」

## 第2話

[???

視点]

遠い昔私は亡くなった。魔女と呼ばれ私はこの世を去った。

???

「お客様着きましたよ」

???

「ありがとうございます。」

そして私は……

【イツセー視点】

くイツセーの教室く

イツセー「はく」

???

「どうした？イツセー」

イツセー「あ、シロウか」

シロウ「よ、イツセー、でどうした？」

イツセー「いや最近なく色々大変でなく」

彼は、衛宮士郎、小学生からの幼馴染みだ。

シロウ「色々てなんだよ」

イツセー「言わなきやダメか？」

シロウ「イヤお前のことだから、女性のことだろ？」

イツセー「わかつてるなら聞くなよ」

シロウ「なんとなく」

イツセー「おい！」

その日の夕方

↳兵藤家イツセーの部屋↳

リアス「今からミーティングはじめるわ」

一同「「はい」」

・  
・  
・

リアス「アジア今月の契約3件」

祐哉「すごいじゃないですかアジア姉さん」

アジア「たまたまですよ」

リアス「イツセー今月の契約0件」

一同「「・・・」」

イツセー「なんだよ」

木場「なんか意外なく」

アーシア「はい、イツセーさんならもつと沢山できると思うのですが？」

イツセー「イヤ赤龍帝でも、悪魔は初心者だよ」

祐哉「正直赤龍帝と悪魔は別者だから」

イツセー「そう言うこと」

イツセー母「どうかしらすこし休憩でも、これ持て来ちやた。」

イツセー・祐哉「はい!!!」

母さんは突然俺たちのアルバムを持ってた。

イツセー母「この時からイツセーたら女の子のおしりばつかり見ていてね」

イツセー「最悪だ」

朱乃「あらあら」

リアス「小さいイツセー、小さいイツセー、は」

アーシア「わたし部員さんの気持ちすごく分かります」

リアス「本当に、嬉しいわアーシア」

部員とアーシアはすごく目をキラキラしてた。

雪菜「あれ、祐哉さんの小さい頃の写真が一枚もありません」

祐哉・イツセー「!!!」

祐哉「それは・・・俺は養子なんだ。だから小さい頃の写真がないんだ。」

雪菜「そうなんですか」

祐哉「ああ」

雪菜「分かりました」

イツセー・祐哉「(ホ、)」

木場「イツセー君ちよつと良いかな？」

イツセー「どうした？木場」

木場「この写真なだけど」

木場が一枚の写真に指を差し

イツセー「あ、それは・・・小学生の時の」

木場「イヤ後ろ剣のことで」

イツセー「あく確か幼馴染みの家に友達と一緒に遊びに行ったときのかな。その剣は」

木場「エクスカリバーだよ」

モードレッド「(なに！そんなバカな！)」

木場「まさかこんな近くに有るなんて」

イツセー「(木場、それにモードレッド)」

俺はまだ木場ことやモードレッドことの過去や因縁ことはまだ知らなかった。

## 第3話

【イツセー視点】

〽次の日の夜〽

俺たちは部長に呼ばれ、はぐれ悪魔の討伐に向かった  
リアス「皆気をつけて来るわ」

はぐれ悪魔「!!!」

はぐれ悪魔は小猫ちゃんを襲おうとし・・・

イツセー「させるか！」

俺は小猫ちゃんの前に出って・・・

イツセー「小猫ちゃんには指一本振れさるか」

小猫「／／／イツセー先輩」

イツセー「ドラゴンシユート」

俺ははぐれ悪魔に反撃し・・・

イツセー「おい！木場をなにポーとしてやがる」

木場「!!」

俺の言葉で我に返った木場ははぐれ悪魔を真つ二つにして、はぐれ悪魔「!!」

体が真つ二つになったはぐれ悪魔だが突然木場に襲い掛けて、イツセー「木場!!!」

木場「く、」

小猫「・・・させません」

小猫ちゃんが半分になったはぐれ悪魔を捕まえて

小猫「ぶっ飛べ」

リアス「朱乃」

朱乃「はい部長」

ぶっ飛ばしたはぐれ悪魔は朱乃さんの雷鳴を食らい落下し

リアス「これで消し飛ばしあげる」

部長の魔法で消滅した。

イツセー「ふうー」

朱乃「完全に我を失ってました」

イツセー「ああなるのはカンベンだぜ」



クイクイ

イツセー「ん」

小猫「／／／イツセー先輩先程はありがとうございます」

イツセー「別に構わないよ小猫ちゃんは大事な仲間なんだから」

ナデナデ

祐哉「ジューー」

イツセー「わ、祐哉居たのか？」

祐哉「最初から居たよ」

イツセー「そ、そうかすまん」

雪菜「祐哉さんと兵藤先輩ってやっぱり兄弟ですね」

イツセー・祐哉「え、」

バツーン

リアス「これで目が覚めたかしら祐斗」

木場「すいませんん部長それじゃ僕はこれで」

リアス「待ちなさい祐斗」

木場はそう言うとう一人で居なくなつた

【??  
?? 視点】

イツセーたちと別の場所では・・・

?? 「やっぱりあいつの仕業ね」

一人の女性は何かを調べてた。

?? 「姉さんなんか分かったか？」

?? 「ええやはりあいつの仕業ね」

?? 「やはりか」

?? 「ええ、ところであなたはどうするの？信二」

信二 「決まってるあいつは俺が消す」

?? 「違うだろう俺たちであいつを消す・・・だろう」

信二 「そうだったな達也」

達也 「あいつだけは絶対に俺たちの手で・・・」

信二 「当然だ」

?? 「でも大丈夫？この事祐哉君に言わなくて」

信二 「祐哉を巻き込みたくない」

達也 「それにこれは俺たちの問題だから」

信二 「そう言うこと凜姉さん」

凜「分かったわ。あなたたちがそう言うなら私からは何も言わないわ」  
達也「ありがとうございます凜さん」

凜「ただしこれが終わったらちやんと祐哉君と話すのよ」

信二「大丈夫だよ姉さん、これが終われば祐哉に話すつもりだから」

達也「祐哉がなんて言うかは予想できるけどな」

祐哉はすべて知ったら俺や達也のことまだダチって言ってくれるかな。まだ思っ  
てくれると良いな。

## 第4話

その夜突然雨がふって一人の男性が歩いてたら、

??? 「ウヤウヤウヤひさしぶりじやくないでくすか」

木場 「お前はフリード・アイゼン、なぜお前が此所に？」

フリード 「答えるきはあくりません」

フリードは剣を抜き木場に切りつけてきた

木場 「くう、お前の目的は一体なんだ！」

フリード 「答えるきはないですよイケメン君」

??? 「いや、答えて貰うぞフリード・アイゼン」

突然フリード・アイゼンに向かって銃弾だ飛んできた。

フリード 「邪魔物がきたようなのでチャイナラ」

木場 「ま、まて」

フリードは閃光に紛れて消えた。

??? 「くそ、逃がすか！」

もう一人もフリードを追って消えた。そして木場祐斗は、

木場「僕は……」

【イツセー視点】

俺は木場と別れたあと、部長たちと木場が見ていたアルバムの写真を見ていた。

リアス「祐斗はこの写真を見ておかしくなったのね」

イツセー「はい」

祐哉「アニキは心覚えは？」

イツセー「うーん、あ、思い出した。」

俺の隣に写ってる子に指を差し

イツセー「この子が引越す前教会の近く住んでつて、俺ともう一人の友達で教会に

遊びに行った時の写真です」

リアス「そう言うことなのね。」

祐哉「グレモリー先輩なんかわかったんですか？」

リアス「いやまだ全部はわかってないわ」

イツセー「そうですか」

リアス「でも、おそらく祐斗はわたったんでしょうね」

アーシア「木場さん無事だったらいいのですが」

一同「……」

リアス「もう遅いし続き明日にしまよう」

祐哉「そうですね。じゃ俺は部屋に戻るよ」

イツセー「ああ、おやすみ祐哉」

祐哉「おやすみアニキ」

祐哉が部屋に戻り……

リアス「私たちも寝ましょうか」

部長は突然服を脱ぎだし

イツセー「ぶ、部長なぜ突然服を」

リアス「私が裸じゃないと眠れないは知ってるでしょ」

イツセー「それは知ってるんですが、なぜ個々で脱ぐですか」

リアス「あなたの体温を感じて寝たいのよ」

アーシア「私も脱ぎます！仲間外れはいやです。」

アーシアも脱ぎだし。

モードレッド「……」

【達也視点】

達也「くそ！何処に行きやがったあいつ」

俺は逃げたフリード・アイゼンを追ってた。

達也「チィ、逃げ足が速い奴だな」

???「達也、あいつは？」

達也「信二、すまん逃げれた」

信二「いや構わない」

達也「だが、おそらくフリード・アイゼンはいつと繋がりがあるのに」

信二「でもフリード・アイゼンがこの近くにいることがわかったことだけでも収穫は

あった」

達也「そうだな」

ドカーン

達也「なんだ！」

信二「あつちからだ」

俺たちは音がした方向に向かった

??????「ここまでね」

???「ふざけるじゃないわよ」

??? 「いやここで終わりよ。エリザベート・バートリー」

達也 「いや終わりじゃない」

俺は女の子の前に出て・・・

エリザベート 「あ、あなたは・・・」

達也 「もう大丈夫だ。キミは俺が守るから」

これが藤丸達也とエリザベート・バートリーの出会いだった。



## 第5話

【達也視点】

俺は女の子を救うのに成功した。

達也「キミ大丈夫？」

エリザベート「え、大丈夫よ」

信二「どうやら間に合ったようだな」

達也「ああ」

???「く、邪魔物が来たみたいね」

達也「悪いけど邪魔させてもらう」

???「一対三で戦うほど愚かじゃないわ」

エリザベート「待ちなさい」

???「エリザベートまた会いましょう」

もう一人が女性はそう言うと言えた・・・

達也「逃げたみたいだな」

信二「ああその様だ。ところで達也あの子は？」

達也「ああ、あの子なら・・・」

エリザベート「ちよつとあなた！」

達也「どうした？」

エリザベート「なんでワタシを助けたのよ？」

達也「ん、キミが危なかったから」

エリザベート「それだけ」

達也「うん？そうだけど」

エリザベート「まったく」

信二「キミはなんであの女性に襲われてたんだ」

エリザベート「あいつにとってワタシは邪魔物なのよ」

達也「どう言うことだ」

エリザベート「ワタシは・・・英霊よ」

信二「そう言えばさつきあの女性あなたのことエリザベートって」

エリザベート「そうよ。ワタシはエリザベートⅡバートリーよ」

達也「たしかエリザベートⅡバートリーで」

エリザベート「その通りよ」

信二「じゃもう一人の女性は・・・」

エリザベート「カーミラ・・・未来のワタシよ」  
達也「な、なんだってーーーーー」

【立夏視点】

私たちはシロウ君の家におじやましていた。

立夏「襲いな達也」

凜「心配？」

立夏「当たり前だよ」

シロウ「心配なら連絡してみたらどうだ」

立夏「さつきから電話してるてど出ないの」

シロウ「マジか」

立夏「うん」

凜「きつと大丈夫よ立夏」

シロウ「凜の言うとおりだ立夏。達也たちなら大丈夫だって」

立夏「凜、シロウ君」

達也「たごいま」

凜「噂をすれば」

立夏「達也お帰り・・・え」

達也の後ろから女の子が出て来て・・・

達也「あ、姉さんこの子は・・・」

立夏「この子は誰よ！達也」

信二「やっぱりこうなったか」

エリザベート「???」

凧「ちよつと立夏止めなさい」

立夏「止めないで凧」

凧「いや落ち着きなさいよ」

立夏「これが落ち着けるか！」

凧「だから彼女はサーバントよ」

立夏「だから・・・え?・・・サーバント?」

凧「そうよ」

【祐哉視点】

俺は突然達也に呼ばれシロウ先輩の家に来た

祐哉「で、俺を呼んだっつと」

達也「悪い祐哉」

祐哉「じゃあれは？」

達也「あれは・・・」

立夏「本当にごめんなさい」

エリザベート「大丈夫よ別に」

達也「姉さんが彼女と勘違いして」

祐哉「OK把握した」

雪菜「祐哉さん、達也さんのお姉さんって」

祐哉「立夏先輩は弟の達也を溺愛してる」

信二「ところでなんで姫終さんが？」

雪菜「私は祐哉さんの監視役ですから」

信二「成る程なく」

シロウ「まあ今日はもう遅いから泊まってけ」

達也「ありがとうございますシロウ先輩」

シロウ「詳しい事は明日になってからだ。それで良いか？」

祐哉「だな。まずは明日になってからだ。達也たちも詳しいことは・・・」

達也「わかった祐哉、明日話す。」  
俺たちは明日に向けてシロウ先輩の家で泊まるのだった。

## 第6話

【祐哉視点】

（衛宮家）

俺は突然達也から電話きて、衛宮家に来た。

祐哉「で、これは、どう言うことだ」

達也「まあ、カクカクシカシカで」

雪菜「いやよく分かりませんよ」

祐哉「OK把握した」

雪菜「わかつたんですか！」

祐哉「まあ前回のを見ればわかる」

信二「お〜メタイメタイ」

雪菜「ゆ〜う〜や〜さ〜んたち、あんまりふざけると雪霞狼で切りますよ」

雪菜が笑ってない目で雪霞狼を構えてた。

祐哉・達也・信二「すいませんでした!!!」

俺たちは土下座して謝った。

## 【達也視点】

祐哉「それで、その子どうする？」

祐哉がエリザベートを見て俺に聞いて来た

シロウ「俺は契約した方が良い良いと思う」

凜「私もそれが良いと思うわ」

信二「確かにまたカーミラと言うのがまた出て来たらマズイからな」

達也「うーんエリザベートはどうしたい？」

エリザベート「ワタシは・・・」

達也「俺的にはキミが契約してくれるならうれしいけどな」

エリザベート「／／／／え、良いの？」

達也「ああ可愛い子は大歓迎だ」

エリザベート「／／／／わ、わかったわ、そ、そこまで言うなら、け、契約してあ

げても、い、良いわよ」

祐哉・信二「ツンデレだ」

凜「じゃさくと契約しちゃいませよか」

達也「わかった」



エリザベート「／＼／＼／＼わ、わかったわ」

【信二視点】

達也とエリザベートが向かい合い、二人の下から魔方陣が出てきて・・・

達也「サーヴァントランサー、エリザベートⅡバートリーよ我、藤丸達也のサーバントになりて契約に応じを・・・」

エリザベート「サーヴァントランサー、エリザベートⅡバートリー、藤丸達也との契約を応じ、マスター藤丸達也と契約する」

魔方陣が消え・・・達也の右手から赤いタトウが浮かび上がった。

達也「これがサーヴァントとの契約の証か」

達也は右手を見てそう言った

エリザベート「ええ、そうよ」

達也「これからはよろしくエリザベート」

エリザベート「／＼／＼／＼エ、エリーよ」

達也「え、」

エリザベート「／＼／＼／＼エ、エリザベートは長いからエ、エリーで良いわ、マ、マスタ―」

達也「わかったよエリー、改めましてよろしくな」



祐哉「すみませんシロウ先輩でもやっぱり帰りますますよ」

シロウ「そうかわかった気をつけて帰ろよ」

祐哉「はい」

達也「祐哉、本当に話さなくて良いのか？」

祐哉「ああ、達也が話したくなったら話してくれば良いよ」

達也「ありがとう祐哉」

祐哉「ああ、またな」

祐哉と雪菜さんは帰ってつた。

信二「今度はちゃんと話さないとな」

達也「そうだな」

俺たちはシロウ先輩の家で泊まり夜がすぎていった。

## 第7話

「イツセー視点」

「次の日の放課後」

俺たちは学校終えて、

祐哉「(アニキ、この気配は)」

イツセー「(ああ、聖なる光の気配か?)」

ドライグ「(そうだ、急いだからいいな。)」

俺たちは急いで家に向かった。

イツセー「ただいま」

イツセー母「おかえり皆」

???「あ、イツセー君ひさしぶり。元気だった」

祐哉「アニキ知り合い?」

イツセー「え、(誰だっけ)」

イツセー母「もう、イリナちゃんよ紫藤イリナちゃんよ」

イツセー「あくお前イリナか?」

イリナ「うん、ひさしぶりだねイツセー君」

イツセー「まさか女の子だったなんて」

イリナ「あのときは、だいぶやんちやしてたからね」

???「イリナ思い出話もいいが私達の目的を忘れるな」

イリナ「わかってるわよゼノヴィア」

イリナとゼノヴィアと言う女性は母さんとすこし話して帰ってた。

リアス「まさか直接こつちに来るなんて」

イツセー「アーシアと雪菜ちゃんは部屋に戻させてきました」

リアス「ありがとうイツセー」

祐哉「それでグレモリー先輩どうするですか？」

リアス「明日の放課後話し合いすることにきまつたわ」

イツセー「明日ですか！」

祐哉「場所は何処で？」

リアス「部室よ」

イツセー「祐哉は明日・・・」

祐哉「俺も明日の話し合い参加するぞ。」

イツセー「良いのか？」

祐哉「ああ、それになんか嫌な予感するんだ、グレモリー先輩俺も参加して良いですか？」

リアス「私は構わないわ、イツセーはどうかしら？」

イツセー「俺は部長が良いなら」

祐哉「ありがとうアニキ、グレモリー先輩」

「次の日」

部室に昨日会ったイリナとゼノヴィアがやって来た

ゼノヴィア「急な話し合いですまない」

リアス「いえ、私たちの方こそあなたたちには色々聞きたいことがあるわ」

ゼノヴィア「申し訳ないがあなたたち悪魔に話すことはない」

リアス「じゃあなたたちはなんで教会から来たのかしら？」

ゼノヴィア「私とイリナはある目的の為に此所に来た」

リアス「その目的はなにかしら？」

ゼノヴィア「悪いが、そこまで教えるきはない、私からは一つ私とイリナの目的の為

あなたたち悪魔はこの出来事に一切手を出さないで頂きたい」

リアス「それは、私たちになにもするなっでことかしら？」

ゼノヴィア「ああそのとおりだ。悪魔の力は借りるきはない」

イリナ「ちよつとゼノヴィア」

ゼノヴィア「なんだ？イリナ」

イリナ「もお！いきなり何しててるのよ」

ゼノヴィア「何つて説得だが」

イリナ「今のどこが説得よ！」

???「あんたらの目的は何者かに盗まれた聖劍の回収もしくは破壊だろ」

ゼノヴィア「!!!誰だ」

祐哉「達也なんで此所に？」

達也「まあ色々とな」

エリザベート「ん、マスターどしたの？」

達也「あんたらには聖劍回収は無理だ」

ゼノヴィア「それはどう言うことだ」

達也「さあな、戦えば解るじゃない？」

ゼノヴィア「良いだろ。お前が戦うのか？」

達也「いや戦うのは俺じゃない」

ゼノヴィア「じゃ誰が？」

???「僕だよ」

イツセー「木場・・・」

ゼノヴィア「お前は・・・」

祐斗「キミたちの先輩だよ但し失敗作だけどね」

イツセー「戦うなら俺もやる」

祐哉「アニキ良いのか？」

イツセー「ああ」

ゼノヴィア「良いだろ。イリナはもう一人の奴頼む」

こうして俺たちは聖剣のことを知ることになるのだった。

エリザベート「ちよつとワタシのこと無視なわけ」



## 第8話

【祐哉視点】

アニキと木場先輩は教会から来た二人と戦うことになった。

イリナ「本当にいいの？ イツセー君」

イツセー「ああ、大丈夫だ」

イリナ「わかったよイツセー君」

イツセー「さて、やるか」

アニキがそう言うともものすごい殺気を放って・・・

イリナ「なっ！」

ゼノヴィア「この殺気は、」

リアス「これは、」

祐哉「アニキの殺気だよ」

イツセー「いくぞ！ イリナ」

イリナ「え、まつ、」

アニキがイリナさんの懐にはいり、

イリナ「くっ」

イリナさんがアニキに切りかかると、アニキはそれをよけて、

イツセー「あまい」

アニキはイリナさんに足払いし・・・

イリナ「キヤ、」

イリナさんは尻餅をし・・・

イツセー「俺の勝ちだ」

アニキがイリナさんの首の所に指で押さえて勝負がついてった・・・

イツセー「大丈夫か？イリナ」

イリナ「うん、大丈夫」

イツセー「もうちよつとまわりを見た方が良いぞ」

ナデナデ・・・

イリナ「／／／うん／／／気をつける」

一分の女子「「「「ジーーーーー」」」

イツセー「(あれ、なんか後ろから殺気が)」

祐哉・達也「ハハハ・・・」

こうしてアニキとイリナさんの勝負はアニキの勝利で終わった。

祐哉「（まあ、アニキなら大丈夫だっと思っただけど、問題はやはり木場先輩か・・・）」

ゼノヴィア「まさかこうも簡単にイリナが負けるとは、けど、」

木場「ハーーー」

木場先輩は氷の剣と炎の剣を出し、ゼノヴィアと戦いをしていた、

ゼノヴィア「フン、」

ゼノヴィアの一撃で木場先輩の二つの剣が砕け・・・

木場「クツ、まだ」

木場先輩は新たな剣を出して・・・

ゼノヴィア「いや、お前の負けだ」

木場「ガツハ、」

ゼノヴィアの攻撃で木場先輩が倒れ、木場先輩が敗北した。

ゼノヴィア「さて、次は、キミか？」

ゼノヴィアがアニキに向かって来て・・・

???「マスターが出る幕はねえよ」

ゼノヴィア「お前は？」

横からモーさんが出っ来て来て・・・

モードレッド「俺はモードレッド、兵藤一誠のサーヴァントだ」

ゼノヴィア「モードレッド、サーヴァント？」

イツセー「モードレッド」

モードレッド「マスターこいつは俺が相手して良いだろ？」

ゼノヴィア「私は構わない」

イリナ「(モードレッドって確かに・・・)ダメ！ゼノヴィア彼女は、」

達也「エリー」

エリザベート「了解よマスター」

エリザベートさんがモーさんの前に出っ来て・・・

達也「そこまでだ、モーさん」

モードレッド「テメエも俺の邪魔をするのか、」

イツセー「いや、達也の言う通りだモードレッド、勝負はもう着いた。」

モードレッド「なんでだよマスター」

イツセー「無駄の戦いだからだ」

モードレッド「でも、」

イツセー「でも、じゃない、もし聞かなかつたら・・・当分ナデナデしない」

エリザベート「それで聞いたら・・・」

モードレット「ガーン！（。ロ。わ、わたったからそれだけは勘弁してくれー」

祐哉・達也・イツセー以外「「えー」」

イツセー「二人もそれで良いか？」

ゼノヴィア「あ、ああ」

イリナ「わ、私も良いよ」

二人は去って、任務に戻ったのであった。

## 第9話

「イツセー視点」

木場がゼノヴィアに負けて、次の日の放課後俺と祐哉は、教会から来た二人を探してた。

祐哉「アニキ、本当にグレモリー先輩に言わなくて良いのか？」

イツセー「ああ、これは俺たちの問題だから、部長たちを巻き込みたくない。」

モードレッド「すまないマスター、俺のせいで、」

イツセー「別にモードレッドのせいじゃなよ」

モードレッド「ありがとうマスター」

祐哉「は、じゃ俺もとことん付き合うよ、アニキやモーさんだけじゃ心配だからな

」

イツセー「サンキューな祐哉」

レーヴァテイン「マスター、達也たちなんか教えて貰わなかった？」

祐哉「確か聖剣を盗んだのはバルパー・ガリレイとコカビエルって言ってた」

ドライグ「コカビエルか、相棒気をつけるコカビエルは墮天使の幹部一人だ」

イツセー「ドライグそれって、こないだ戦ったドーナシークよりも強いってことか？」  
ドライグ「ああドーナシークより断然強い」

イツセー「わたったドライグ、なんか有ったら、そんなときは頼むぞドライグ」

ドライグ「分かっているさ相棒、俺たちの力を見せ付けてやろう」

イツセー「頼りにしてるぞ」

祐哉「(しかし本当に敵がバルパー・ガリレイとコカビエルだけか、一昨日の達也たちの反応、恐らく敵はバルパーとコカビエルだけじゃない、まだ俺たちが知らない敵がいる)」

レーヴァテイン「どうしたの、マスター」

祐哉「いやなんでもないよレヴァ」

モードレッド「だけど、あの二人何処に居るんだ？」

イツセー「うーん、足で探すしかないか」

祐哉「だな」

レーヴァテイン「ねえねえマスター」

祐哉「どうした？レヴァ」

レーヴァテイン「マスターたちが探してたる二人組ってあれじゃない」

祐哉のレーヴァテインが怪しい二人組を見つけた。

ゼノヴィア・イリナ「哀れの子羊に天の恵みを、」

イツセー・祐哉「・・・関わりたくねえ」

モードレッド「じゃ、マスターあとはよろしく」

レーヴァテイン「がんばって〜ねマスター」

イツセー・祐哉「な、ちよっ」

二人は霊体になって消えた。

イリナ「なかなかあつまらないわね」

ゼノヴィア「それもこれも、イリナお前がすべてのお金をこの胡散臭い絵にかけるか

らだろう!」

イリナ「違うわゼノヴィアこの絵は、天の力が宿ってるのよ!」

ぐうぐう

ゼノヴィア「は〜しかし腹が減ったな〜」

イリナ「そうね〜」

イツセー「あの〜もし良かったら・・・」

〜どこかのファミレス〜

がつがつ・・・



祐哉「しかし良く食べるな」

ゼノヴィア「まさか悪魔に恵みを貰うことになるとは」

イリナ「やっぱり日本食が一番ね」

イツセー「そろそろ良いか？」

ゼノヴィア「ああ、キミたち私たちに何の用が？」

イツセー「単刀直入に言う俺たちにも聖剣の回収、もしくは破壊を手伝わせてほしい」

ゼノヴィア・イリナ「!!!」

俺たちはイリナたちと合流して聖剣の回収もしくは破壊することに決めただのであった。

## 第10話

【祐哉視点】

アニキがイリナさんやゼノヴィアに言うど、

イリナ「本気なの、イツセー君」

イツセー「ああ、本当だ」

ゼノヴィア「悪魔の協力は、」

イツセー「悪魔とは関係ない、これは、俺個人の意志だ」

ゼノヴィア「しかし、」

イツセー「じゃドラゴンとしてならどうだ」

イリナ「イツセー君それって、」

イツセー「俺は今代の赤龍帝だ」

イリナ・ゼノヴィア「な、」

イツセー「それに祐哉は悪魔じゃない」

ゼノヴィア「確かに、イリナを圧倒した力なら・・・」

イリナ「ゼノヴィア、良いの?」

ゼノヴィア「正直私たち二人だけじゃ上手く任務が行くか難しいかった。けど、赤龍帝なぜそこまでする?」

イツセー「俺のダチが大変だから、できれば協力してやりたいんだ。それに幼馴染みのイリナが傷付く所は見たくない」

イリナ「／／／／ドキツ／／／」

祐哉「あ、」

ゼノヴィア「なるほどわかった」

こうして俺たちはイリナさんとゼノヴィアさんに協力することにした。

祐哉「で、アニキこれからどうするだ?」

イツセー「そうだな」

???「イツセー先輩」

イツセー「え、小猫ちゃん、」

祐哉「と、匙先輩」

イツセー「二人ともどうしたんだ」

匙「俺もついさつき搭城さんと会ったんだ」

この人は匙元士郎先輩、アニキと同じ悪魔でポーンだ。まあ簡単に言うとは原作通りの人だ。

匙「なんか俺の紹介雑じゃね」

うP主「気のせい気のせい」

イツセー「それで小猫ちゃんは どうして此所に？」

小猫「私も祐斗先輩が気になりますから、だから私も一緒に行っても良いですか？」

イツセー「まったくそんな顔されたら断れないじゃないか」

小猫「じゃ・・・」

イツセー「ああ一緒に行くこう小猫ちゃん」

小猫「ありがとうございます先輩」

匙「俺は？」

祐哉「まあ良いじゃないすか先輩」

匙「おいおい」

祐哉「ところでアニキ木場先輩に連絡は？」

イツセー「いまからするよ」

アニキが木場先輩に連絡し、俺たち木場先輩と合流した。

木場「イツセー君、どうして・・・」

イツセー「あんな木場俺たちは同級生で同じ悪魔だそれで俺のダチだ。ダチが困つて  
るなら手を貸す。ダチは助け合いでしょ。」

木場「イツセー君・・・」

小猫「私も祐斗先輩が居なくなったらいやです」

木場「小猫ちゃんにも言われたら仕方ないな」

匙「で、俺は？」

木場「匙君も居たんだ？」

匙「最初から居たぞ！木場！」

木場「ご、ごめん匙君」

祐哉「あのお木場先輩に聞いて良いかな？」

木場「なんだい祐哉君」

祐哉「申し訳ないけど木場先輩はどうして聖剣に対してそこまでするんですか？」

木場「そうだねそろそろ話しても良いかな、」

匙「どういうことだ木場」

木場「この聖剣の事件は僕の過去に関係してるんだ」

イツセー「木場の過去？」

木場「うん、」

俺たちは木場先輩の過去を知ることになり、木場先輩が言う聖剣がどういう物か知ることだった。

## 第11話

今から何年前か前一人の少年はとある施設預けられた。そこには、少年と同じ年の少年少女が沢山預けられた。ある日少年少女たちはある実験に受けることになった。その実験とは、体内にある物を移植する実験をしていて少年少女はすごい力が使えると思ひ実験に受けることに迷いが無かった。少年少女はそれが危険なこととは知らず受けた。だがそれは地獄だった、沢山の少年少女は実験に耐えきれず命を落とし、一人また一人と命が消えていった。だが一人の少年だけが施設から抜け出した。しかし実験のせいでその少年も命が消えかけていた。そこで出会ったのは紅い髪の少女だった。

「まだ生きたいかしら？」

「僕は、まだ生きたいみんなのために。」

「分かってわ」

紅い髪の少女の力で少年は救われ、その少年は悪魔になった。

そしてその実験は聖剣計画と言われた・・・

【イツセー視点】

俺たちは木場の過去を聞いて・・・

祐哉「まさか木場先輩にそんな過去が有ったなんて」

イツセー「ああ」

匙「うおおおおおん、木場お前大変だったんだな」

匙がすごい勢いで男泣きをしていた。

イツセー「匙お前、」

匙「木場俺も男だ、ダチのため協力するぜ」

木場「ありがとう匙君」

祐哉「此れからどうするだ？アニキ」

イツセー「そうだな・・・」

くその夜く

祐哉「まさか俺がたちがこんなカツコするなんてな」

ゼノヴィア「フリード・セルゼンは教会の人を狙う」

イツセー「だからこのカツコなのか」

ゼノヴィア「ああそうだ」

俺たちは黒いコートを羽織りシスターのカツコをし・・・

イツセー「二手に別れてフリード・セルゼンを搜索して、なんか有ったら連絡する。こ



とで良いか？」

ゼノヴィア「問題ない」

小猫「・・・私達の問題ありません」

俺たちはフリード・セルゼンを捜索するため教会にやって来た。

匙「うーんなんかだれも居なそうだな」

祐哉「いや、誰かいる」

匙「え？気のせいだろ」

イツセー「いや間違いない」

木場「いったい誰が・・・」

突然誰かが俺たちに切りかっかけて来た。

木場「フリード・セルゼン!!」

黒いコートを脱ぎ、木場は聖剣をつくりフリード・セルゼンに向かっていた。

フリード「教会から来たシスターちゃんと思いきやくそいつぞやの悪魔ちゃんじゃ

くあくりまくせんか」

祐哉「アニキ俺たちも」

イツセー「いやこれは、木場の戦いだ」

祐哉「でもアニキこのまじや」

イツセー「俺たちの仕事は木場の援護だ」

祐哉「(アニキ)」

イツセー「匙！お前で、敵の動きを止めることできるか」

匙「ああまかせろ。たのむぜライン！」

匙の右手に黒いへびみたいのが出でて来た。

ドライグ「(あれは、ヴリトラ)」

イツセー「(ドライグ、ヴリトラて?)」

ドライグ「(五大龍王の一角でヴリトラは呪いの邪炎を使う使う)」

イツセー「(まさか匙が龍王の力を宿するなんてな)」

木場「はあああ」

フリード「そんなじゃオレっちのエクスカリバーちゃんはびくともしませくん」

木場「(くう、このままじゃ)」

イツセー「今だ！匙」

匙「まかせろ！のびろライン」

匙がだしたラインでフリード・セルゼンの捕らえた。

フリード「こんなものオレっちのエクスカリバーちゃんて・・・」

だがラインは切れなかった。

フリード「なんで切れない」

フリードは何度もやるがラインは切れなかった。

イツセー「今だ！木場！」

木場「まったく君って奴は・・・魔劍創造《ソード・バース》

木場が放った魔劍創造でフリードを追い詰めた。

フリード「くろう」

祐哉「よしこれで」

???「苦戦しているようだな、フリード」

イツセー「お前は」

フリード「バルパーの旦那」

そこに出て来てのはバルパー・ガリレイだった。

バルパー「まったく仕方ないおい！出番だ」

???「オオオオ」

祐哉「なんだあれは」

???「エクスカリバー・・・」

イツセー「まずいみんな伏せろ！」

???「モルガーン」

祐哉「くそ、間に合えええ」

俺たちは強大の攻撃に巻きこれた。

バルパー「もう此所には用がない、いくぞフリード」

フリード「わかったぜバルパーの旦那」

バルパーとフリードと黒い甲冑の女性はその場を去ったのであった。

## 第12話

【達也視点】

俺と信二はものすごい物音がして向かうと、教会らしき物が無くなってた。

達也「これは、」

信二「どうなってるんだ」

エリザベート「マスター、人の気配がする」

達也「え、」

信二「まさかこの下に」

達也「早く助けないと」

???「ドラゴンショット」

突然赤い球体が瓦礫を砕き、沢山の人が出て来た

達也「イツセー先輩!!」

イツセー「ハア・ハア・ハア・みんな大丈夫か?」

匙「なんとか」

木場「無事だよ」

小猫「私も無事です」

信二「イツセー先輩大丈夫ですか？」

イツセー「信二、達也、ああ俺たち大丈夫だ」

信二「一体これは？」

イツセー「祐哉のおかげで助かったんだ」

匙「その祐哉は？」

祐哉「ハア・・・俺なら・・・ハア・・・此所だよ・・・ハア・・・」

エリザベート「ちよつと大丈夫なの」

祐哉「ハア・・・力を・・・ハア・・・使いすぎた・・・」

信二「一体どうしたんだ」

祐哉「・・・敵の・・・ハア・・・力を・・・を・・・」  
バタン

祐哉は力尽きて倒れた・・・

イツセー「祐哉!!!」

信二「おい！しっかりしろ」

イツセー「詳しい話しはあとだ！まず祐哉を早く安全な場所に」

達也「わかった」

（兵藤家）

俺と信二はイツセー先輩の家にお邪魔して・

祐哉「・・・スウ・・・スウ・・・」

雪菜「祐哉さん・・・なんで一人で」

リアス「イツセーこれはどう言うことかしら」

イツセー「すいません部長」

リアス「説明してくれるかしら」

イツセー「分かりました」

俺たちイツセー先輩から何か有ったか聞いた

イツセー「俺たちは教会からきたイリナたちと聖劍の捕獲もしくは破壊の協力して、

まずは聖劍を持つてるフリード・セルゼンの搜索をしました」

朱乃「なぜフリード・セルゼンが聖劍を持つてるってわかったのですか？」

達也「それは俺たちが教えました」

リアス「たしか貴方たちは」

信二「そう言えばちゃんと自己紹介してなかったな」

達也「じゃ改めて、藤丸達也です。祐哉とは同じクラスです」

信二「俺は遠阪信二です。クラスは祐哉や達也と一緒にです」

エリザベート「そして私はエリザベート・バートリーよ。藤丸達也のサーヴァントよ」

イツセー「達也と信二も祐哉と一緒にで能力者です」

朱乃「一体どんな能力が？」

信二「すいません朱乃先輩、まずは何か有ったの続きを」

リアス「そうね、イツセー話しの続きをお願いしますわ」

イツセー「分かりました。・・・俺たちは二手に別れてフリードを探しました。」

達也「そしてあの教会でフリード見つけた」

イツセー「ああそうだ。その後木場をメインでフリードを捕らえようとした時、バル

パー・ガリレイが俺たちの前に現れたんだ」

信二「バルパー・ガリレイだと!!」

達也「やっぱりバルパーもこの事件に絡んでたか」

リアス「バルパー・ガリレイ・・・始めて聞いた名前ね」

イツセー「そして、バルパーの後ろから黒い甲冑をきた女性出て来て、その女性の一

撃で教会ごとぶっ飛ばしたんだ」

アーシア「でもイツセーさんたちはどうやって助かったのですか？」



イツセー「祐哉の魔眼の力で相手の攻撃を停止させてそのスキに俺が地面を砕いてな  
んとかなったんだ。しかし祐哉は魔眼の力を使いすぎて倒れたんです」

リアス「そうだったのねイツセー」

イツセー「はい、すいません部長俺が勝手にしたばかりに・・・」

リアス「良いのよイツセー、イツセーたちが無事で本当に良かった」

イツセー「ありがとうございます部長」

リアス「それはそうとイツセー」

イツセー「はい？（なんだろうすごくやな予感が）」

リアス「お尻を出しなさい」

イツセー「え？ぶ、部長」

リアス「オシヨキのお尻叩き千回よ」

イツセー「・・・・・・・・」

リアス「イ・ツ・セー・早・く・し・な・さ・い」

イツセー「・・・・・・・・はい」

リアス「一回」バチン リアス「二回」バチン

達也・信二「うわあ」

モードレッド「・・・・・・・・チチウエナンド」

リアス「五回」バチン

イツセー「ギャーロー」

イツセー先輩のおシヨキは夜遅くまで続き。イツセー先輩はお尻叩きはもうカンベ  
ンしてほしいと言つてかゝるくトラウマなつた。

そしてモードレッドが小声で言つた意味とは・・・

## 第13話

【雪菜視点】

祐哉さんたちがフリード・セルゼンを追って数時間後・祐哉さんはまだ目を覚まさない。

雪菜「なんで、いつも無理するんですか。どうして私に相談してくれないですか。祐哉さん」

レーヴァテイン「あなたも無理すると倒れるよ」

レーヴァテインさんが後ろから出て来て・・・

雪菜「レーヴァテインさん!!何時から此所に!」

レーヴァテイン「ついさつき」

雪菜「レーヴァテインさん：どうして祐哉さんは一人で無理するんですか。レーヴァテインさんなら・・・」

レーヴァテイン「多分それは、無理・・・」

雪菜「どうしてですか!」

レーヴァテイン「それがマスターだから・・・だからわたしはマスターの側に居るの」

雪菜「え、それってどう言う・・・」

レーヴァテイン「それがわたしとマスターの絆・・・キル姫との絆だから」

雪菜「(絆・・・私と祐哉さんは・・・)」

レーヴァテイン「でも・・・今マスターを救うことができるのはあなただけ」

雪菜「え、」

レーヴァテイン「今のマスターは魔力が切れている状態・・・だからあの時みたいに魔力を渡せば、マスターは目を覚ます」

雪菜「あ、あの時って／＼／＼」

レーヴァテイン「うん、マスターとキス」

雪菜「・・・キス／＼」

レーヴァテイン「どうしたの、やんないの」

雪菜「私は・・・(祐哉さん)」

私は祐哉さんを見て・・・

雪菜「・・・やります」

私は・・・

雪菜「祐哉さん、行きます」 チュ

私は唇がふれるくらいのキスして。

祐哉「うゝ・・・あれ此処は」

雪菜「祐哉さん！」

祐哉さんが目をさまして、私は祐哉さんに抱きつき・

祐哉「雪菜・・・(そうかまた俺は)」

レーヴァテイン「目が覚めたマスター」

祐哉「レヴァ・・・これは」

レーヴァテイン「うん、魔力を補充して・・・」

祐哉「悪かったな、レヴァ」 ナデナデ

レーヴァテイン「ううん、マスターが目を覚ましてくれて良かった」

雪菜「祐哉さん！無理はしないでください」

祐哉「ああ、気を付けよ雪菜」 ナデナデ

雪菜「／／／／／」

レーヴァテイン「ところでマスター」

祐哉「どうしたレヴァ」

レーヴァテイン「新しい眷属が使えるじゃない」

祐哉「あくそう言ええば」

雪菜「今度はどんな人ですか？」

祐哉「ちよつとまで今喚ぶから」

祐哉さんが新たな眷属を喚ぶために呪文を唱え始めて、

祐哉「その剣は高速の絶技・・・現れる！」

???「私、大勝利！」

祐哉さんが喚んだのは、髪が桜色の女性だった。

三人「「え、誰？」」

???「え、私が誰か解らないんですか？」

三人「「いや、まったく」」

???「・・・ゴフウ！」

女性は突然血をだし倒れた・・・

三人「「え、ええええええええええ」」

達也「どうした祐哉」

信二「なんかあつたか」

藤丸さんたちが部屋に入ってきて、現場は見て・・・

一同「「どう言うことなの!!」」

## 第14話

【イツセー視点】

　　次の日の昼休み

イツセー・祐哉「はああ」

士郎「どうした二人とも」

凜「元気がないみたいだけど」

信二「まあ」

達也「色々とな」

立香「なんかあつたの」

達也「昨日のこと話ても良いじゃないかな」

祐哉「そうだな、俺は良いと思うけどアニキはどうかな」

イツセー「シロウたちには、世話になつたしな」

立香「じゃ・・・」

士郎「話してくれるか」

イツセー「ああかまわないよ」

俺は昨日の出来事をシロウに話た。

士郎「なるほど、そう言うことか」

凜「でも、サーヴァントが眷属として召還されるなんて」

立香「こんなことが起きるなんて、祐哉君つて一体何者」

祐哉「ハハハ・・・」

士郎「そのサーヴァントとの真名は解るのか？」

祐哉「ああ、そのサーヴァントとの真名は・・・」

く昨日の出来事く

祐哉「おい、あんた大丈夫か？」

???「だ、大丈夫ですよ」

祐哉「(本当に大丈夫かよ)」

雪菜「祐哉さん彼女は一体」

エリザベート「彼女はサーヴァントよ」

達也「マジか」

信二「じゃ彼女もエリザベートさんと一緒に英霊なのか」



エリザベート「ええ、そうよ、まだ英霊の名前はわからないけど」

達也「まさか祐哉の眷属の一人がサーヴァントなんて」

祐哉「俺もよくわからん」

雪菜「どう言うことですか祐哉さん？祐哉さんは眷属のどこわかるんじゃないんですか？」

祐哉「俺だって全てわかるもんじゃない」

雪菜「じゃ彼女は？」

レーヴァテイン「恐らくはマスターの魔力を回復するときに起きた出来事」

祐哉「確かに今回の魔力回復は少し違った・まあ考えるのはあとだな今は）君の名前を覚えてくれるかな」

???「私のですか」

祐哉「ああ、ダメかな」

???「良いですよ。それじゃ改めてましてセイバー・沖田総司と言います。」  
一同「二……ええええええええええ」

祐哉「本当にあの沖田総司」

沖田「はい、あの沖田総司です」

達也「新撰組の沖田総司」

沖田「はい、そうです」

祐哉「・・・マジか」

沖田「マスターもしかして信じてないんですか」

祐哉「そ、それはない」

沖田「本当ですかマスター」

祐哉「当たり前だ沖田さんが誰だろうと俺の大切な仲間だ！」

沖田「やっぱりマスター大好き」

沖田さんは祐哉に抱きつき・・・

祐哉「／＼／＼お、沖田さん」

沖田「えへへ・・・沖田さん大勝利」

雪菜「ゆ・う・や・さん！」

祐哉「・・・ビクッ・・・雪菜、こ、これは」

雪菜「祐哉さんの変態!!!」

祐哉「ギャーーー」

（現在）

士郎「・・・まあ、ドンマイ」



モードレッド「わかった．．．あれはオレの父上だ」

士郎「親父？」

モードレッド「ああ間違いない」

凛「ちよつとまつてあなたの父上つてまさか」

モードレッド「そのまさかだ．．．オレの父上はアルトリア・ペンドラゴンだ！」

こうして俺たちはモードレッドの過去を知ることになった。

## 第15話

「イツセー視点」

俺たちは、モードレッドからあの黒い甲冑を着た女性について教えて貰った。

モードレッド「アルトリア・ペンドラゴン、オレの父上で円卓の騎士だ」

立香「円卓の騎士？」

モードレッド「ああ、父上は円卓の騎士の中でも最強の騎士だった」

信二「もしかしてモーさんも円卓の騎士？」

モードレッド「そうだオレも円卓の騎士だ。そして裏切りの騎士だ」

シロウ「裏切りの騎士、どう言うことだ」

モードレッド「そのままの意味だ、オレは父上を裏切り、父上に殺された」

一同「!!!」

モードレッド「オレは、あの時の父上の顔は今も覚える」

イツセー「父親の顔？」

モードレッド「ああ、あの時の顔は悲しい顔をしてきた。どうして父上があんな顔を



信二「確かに」

シロウ「それでモードレッドが変わらないだろ」

立香「達也が良いなら私は大丈夫だよ」

凜「あくしくたくね達也基準するのはやめなさいよ」

立香「??」

凜「え！ちがうの顔するじゃないわよ」

立香・凜「ガミガミガミガミ・・・」

信二「本当になにやってるんだ」

シロウ「ハハハ」

祐哉「なんだかな」

モードレッド「まったく本当にみんなバカだな・・・でもみんなありがとうな。それか

らこれからもよろしくな」

一同「二ああよろしくな。モードレッド」

祐哉「でもあれがモーさんの父親のアルトリア・ペンドラゴンならなんであんな目し

てたんだろう」

イツセー「どう言うことだ祐哉」

祐哉「いやあの目はすべての人が敵と思う目だった」

信二「じゃ祐哉あれは」

祐哉「ああそうだ」

凜「ちよつとまって」

信二「どうした姉さん」

凜「なんで祐哉はそんな事がわかるの」

祐哉「あれ凜先輩は俺の能力知らなかったけ」

凜「祐哉の能力つて眷属を召還する能力でしょ」

達也「あく祐哉は俺や信二と同じ魔眼をもつて」

凜「いやそれも知ってるけど」

祐哉「俺とアニキは相手の目を見て相手の思考が分かるんだ」

凜「マジ」

祐哉「ああ」

イツセー「確かにあの目はすべてが敵と思いつべての敵を凜ぎ払う目だったな祐哉」

祐哉「うん、モーさんはなんか知ってる」

モードレッド「オレもよくわからん」

???「恐らくあれは、オルタ化よ」

一同「!!!」



こうして俺たちはモードレッドとの本当の仲間になった、そして女性が言ったオルタ化とは一体・・

## 第16話

## 【祐哉視点】

俺たちの前に一人の女性が出て来て・

イツセー「あなたは、」

祐哉「フェイト先生!!」

フェイト「ごめんなさい脅かして」

達也「なんで先生が此所に」

フェイト「兵藤君たちの声が聞こえたから」

凜「先生、さつき言ったオルタ化って一体なんですか？」

フェイト「貴方たちなら教えてもいいわね・オルタ化は元の英霊が闇に墮ちた姿がオルタ化よ」

信二「じゃあれはアルトリア・ペンドラゴンが闇に墮ちた姿でそれがオルタ化したアルトリア・ペンドラゴンってことか」

フエイト「ええそうよ。私たちは英霊の事について色々調べていてその一つがオルタ化なの」

イツセー「教えて下さいどうしたらオルタ化から元の英霊に戻すにはどうしたらいいですか」

フエイト「……」

フエイト先生は突然黙り

立香「まさかもう」

フエイト「ええオルタ化した英霊は今の段階では戻すことは不可能……」

モードレッド「それじゃ父上はもうずっとあのまま」

フエイト「ごめんなさい、私たちも調べているのだけど戻す方々はないわ」

凜「倒すしかないのね」

フエイト「ええその通りよ」

イツセー「……ない……」

信二「え？イツセーさん」

イツセー「あきらめない！俺は絶対あきらめない」

フエイト「兵藤君でも戻すことは、」

祐哉「戻すことできるのはゼロじゃない。そうでしょフエイト先生」

フェイト「確かにゼロじゃないわけど」

イツセー「俺は1%でもあるなら俺はあきらめず掴んでみせる」

フェイト「無謀よ」

祐哉「それでも俺が不可能を可能にしてみせる」

イツセー「それを言うなら俺たちがだろ。祐哉」

祐哉「そうだなアニキ」

信二「やれやれだぜ」

凜「本当に貴方たちは」

達也「変わらないな」

立香「フフフ」

シロウ「イツセーたちらしいな」

モードレッド「マスター・・ありがとうな」

フェイト「まったく貴方たちは、分かりました私も貴方たちに掛けます」

イツセー「先生」

フェイト「その代わり言ったからにはやり遂げなさい！」

一同「はい!!」

そして俺たちは学校から出て・・・



## 第17話

「イツセー視点」

俺たちは学校から出て部長たちと合流してバイパー・ガリレイを見つけるに捜索に出るが……

イツセー「うくんどうしよう、祐哉」

祐哉「どうしよう、じゃないよアニキ」

凜「手がかりがないじゃどうすることも出来ないわよ」

祐哉「いや、大丈夫だ手がかりはある」

達也「本当か祐哉」

凜「じゃその手がかりって言うのは、」

祐哉「まずバイパーとコカビエルの目的は残った聖剣の回収だ。つまり」

凜「つまり残った聖剣を持つてるイリナとゼノヴィアの所に来るってことかね」

祐哉「はい」

信二「でも祐哉、二人の場合がわからないとどうすることも出来ないんじゃない」

立香「確かに」

祐哉「……達也の魔眼の能力を借りる」

信二「でも達也の魔眼の能力って」

立香「うん、」

モードレッド「???達也の魔眼ってどんな魔眼なんだ？」

達也「俺の魔眼は空間の魔眼だ」

リアス「空間の魔眼？」

達也「はい。簡単に言うとワープができる」

小猫「……ワープですか？」

信二「基本ワープだ」

アーシア「凄い能力です」

達也「いや、俺の魔眼は欠点があるんだ。」

朱乃「欠点、ですか」

達也「はい。まず俺の魔眼にはマーキングが居るんだ。マーキングがあつてマーキングの所にワープができる。それに距離が長くなるほど魔力の消費が激しいだ」

立香「マーキングしてないからワープ出来ないんです。」

祐哉「……それはマーキングがないとだろ」

達也「まさか祐哉お前」

祐哉「フッフそのまさかだ」

雪菜「祐哉さんどう言うことですか」

祐哉「実はイリナさんにマーキングをしといたんだ」

イツセー「さすが祐哉」

シロウ「ん、でも祐哉のマーキングでワープ出来るのか？」

信二「あく知らなかったけ」

リアス・アーシア「??」

小猫「・・・どう言うことですか」

祐哉「俺たちの魔眼は同じ魔力で動いているんだ」

朱乃「同じ魔力ですか」

達也「ああどう言う仕組みかはわからないけど」

リアス「わかったわ、それじゃお願いね達也君」

達也「了解。じゃみんな俺の近くに」

みんなが達也の近くにあつまり・・

達也「よし飛ぶぞ」

こうして俺たちはイリナの近くにワープをし・・けど俺たちの見たのは・・

イツセー「な！イリナ！」



イリナがボロボロになって倒れてた・

イツセー「イリナ！しっかりしろ！」

イリナ「イツ・セー・君・」

祐哉「アーシア姉さん早く回復を！」

アーシア「は、はい！」

祐哉「この感じは、そこだ！」

???「フッフ危ない危ない」

黒い六羽の墮天使が俺たちの前に出てきた。

イツセー「てめえコカビエル!!!」

## 第18話

【祐哉視点】

イツセー「てめえ！コカビエル」

コカビエル「ほう俺のことを知ってるとは」

俺たちの近くに現れたのは黒に12羽の堕天使コカビエルだった。

祐哉「コカビエルお前の目的は本当に聖剣を盗む事なのか」

モードレット「どう言う事だ祐哉」

祐哉「聖剣を盗むだけならバイパーやフリードを使わなくても良かったはずだ」

コカビエル「ククク・よくわかったな」

祐哉「それでお前の目的は一体なんだコカビエル」

コカビエル「俺の目的は・・・戦争だ」

イツセー「なんだと・・・戦争だと」

コカビエル「ああそうだな今の三大勢力は戦争をしてくれなくてな」

俺の中で何かがキレた。

【雪菜視点】

コカビエルが戦争をしたいと言うと突然凄い殺気を感じると祐哉さんが殺気を放つてた。

コカビエル「ハハハ良い殺気だ」

リアス「コカビエル貴方の好きにさせないわ」

達也「悪いけどお前は個々で消えて貰うぞ」

コカビエル「フフフそんなに急がなくても相手してやるぞしかし個々では戦争するには狭いだから場合を移そうじゃないか」

コカビエルがそう言う和学校から一筋の光が出て来た。

凜「あれは」

コカビエル「どうやら実験は成功したようだな」

立香「実験？」

コカビエル「そうだ盗んだ聖剣を一つにしたんだ」

凜「何ですって」

コカビエル「さてあそこで戦争しようじゃないか」

そう言うコカビエルは消えて・・

立香「コカビエルは」

シロウ「恐らくあそこだ」

衛宮先輩が学校の方を指を差して

朱乃「部長!!」

リアス「分かってるわ朱乃コカビエルの計画を絶対に阻止するわよ」

イツセー「はい部長」

小猫「・・・私も行きます」

アーシア「ケガをしたら私が治します」

朱乃「私も行きますわ」

イツセー「祐哉とモードレッドはどうする?」

モードレッド「オレは突然行くぜマスター、父上を取り戻しマスターを守るのがオレの使命だからな」

イツセー「ありがとうモードレッドでも無理するなよ」

モードレッド「了解だマスター」

祐哉「俺は・・・あいつをコカビエルを絶対にぶっ飛ばし戦争を止めてみせる」

レーヴァテイン「それは言うなら俺がじゃなくて俺たちでしょマスター」

沖田「そうですね。マスターには私たちがいますよ」

雪菜「私も突然行きます。私は祐哉さんの監視役ですから、祐哉さんが無理をしない

ように私が監視します」

祐哉「みんなありがとうな」

達也「個々まで来たたら俺も最後まで付き合うよ」

立香「達也が行くなら私も行くよ」

凜「まったく立香はくでも私も行くわ」

シロウ「まあダチが心配だから俺も行くよ」

信二「突然俺も行く」

エリザベート「マスターたちが行くなら私も行くわ」

リアス「みんな行くよわよ」

一同「「はい!!!」」

## 第19話

## 「イツセイ視点」

俺たちはコカビエルを追って学校に向かったら

??? 「リアス無事だったようね」

リアス 「ええなんとか無事よソーナ」

彼女はソーナ・シトリー学園の生徒会長さんだ。学園では偽名をを使って使っている。部長と一緒に悪魔だ。

リアス 「ソーナ今はどんな感じかしら」

ソーナ 「今私たらで学園一带に結界を貼ってるわ」

朱乃 「リアス今サーゼクス様に連絡をして」

リアス 「ちよつと朱乃これは・・・」

朱乃 「リアスあなたも分かってるでしょコカビエルの用な墮天使の幹部が出て来てる以上私たちだけじゃ」

リアス 「まったく朱乃には嘘は着けないわね」

ソーナ「それで朱乃サーゼクス様は何て」

朱乃「二時間後に来てくれると」

リアス「分かったわ朱乃」

モードレッド「???どう言う事だ」

凜「まったく簡単に言うのと二時間で援軍が来るからそれまで耐えろそう言うことよ」

モードレッド「なるほど」

一同「……」

イツセー「なんかすいません」

立香「ねえ凜」

凜「どうしたの立香」

立香「私たちは結界の方が良いじゃない」

凜「そうね」

ソーナ「あなたたちは確か一年の・・・」

立香「うん、高等部一年の藤丸立香です」

凜「同じく一年の遠坂凜よ。会長結界を維持するために手伝います。」

ソーナ「しかし」

イツセー「大丈夫です会長二人も魔力を持ってるので」

ソーナ「・・・分かりましたお願いいたします遠坂さん、藤丸さん」

立香「うん任してください」

凜「行くわよ立香」

信二「無茶だけはするなよ姉さん」

達也「気をつけて姉さん」

凜「分かっているわ信二」

立香「うん！」

凜と立香は結界を維持する為に学園の外に残って、俺たちはコカビエルがいる校舎に入った。

イツセー「コカビエル何処だ！」

コカビエル「ククク」

祐哉「アニキ上だ」

イツセー「コカビエル!!」

コカビエル「待っていたぞリアス・グレモリー！」

リアス「コカビエル貴方の好きにはさせないわ」

達也「悪いけどお前は個々で終わらせる」

信二「二時間もすれば援軍も来る。コカビエルお前も終わりだ」



コカビエル「ククク・ハハハハそれは願ったり叶ったりだ」

雪菜「どう言うことですか」

祐哉「そう言う事かコカビエル」

イツセー「おい祐哉それって・・・」

コカビエル「そうだ俺が求めているものは戦争だまずはサーゼクス・ルシファアからだ」

達也「言つたはずだお前は個々で終わらせると」

信二「戦争なんか起こさせない」

コカビエル「フフフ良いだろ相手をしてやろう。しかしまずは前座からだ」

コカビエルがそう言うのと校舎から三つほどの魔方陣出て来てた。

リアス「あれは」

魔方陣から出て来てるのは三つ首の獣が現れた

朱乃「間違いわあれは地獄の番犬ケルベロス」

コカビエル「そうだお前たちには俺様のペットの相手をしてもらう。行けケルベロス  
たちよあいづら食らい付くせ」

ケルベロス「「#\*#\*#\*」」

ケルベロスたちが俺たちに向かって来た

雪菜「祐哉さん来ます」

ケルベロスの一体が祐哉の方に襲いかけてきた

雪菜「祐哉さん！危ない避けてください」

祐哉「……」

しかし祐哉は動かなかった

雪菜「祐哉さん！なんで避けないんですか祐哉さん！」

ケルベロスが祐哉に近付き・

ケルベロス「##\*\*」

ザシユ!!

祐哉の方で大量の血流れて・

雪菜「ウソですよね祐哉さん」

祐哉「……」

雪菜「そんな祐哉さんまだ・私・祐哉さんに・言つて・ないのに」

祐哉「なにか？」

雪菜「それは私が・ん？」

祐哉の方を見るとケルベロスが倒れた

レーヴァテイン「マスターこれで良い？」

祐哉「ああナイスタイミングだレヴァ」

どうやらレヴァアティンがケルベロスを倒したようだ

祐哉「で、雪菜俺がなんて」

雪菜「・・・さん・・・の・・・」

祐哉「え、なんて」

雪菜「祐哉さんの馬鹿ー！！」

祐哉「うわ！」

雪菜「私がどんだけ心配したと思ってるんですか！」

祐哉「ごめんって雪菜」

雪菜「嫌です絶対に許しません」

祐哉「えええ本当にごめんって」

雪菜「・・・じゃ」

祐哉「え？」

ギユウ

雪菜「これで許します。だけど次は許しませんから祐哉さん」

祐哉「うん心配させてごめん雪菜」

雪菜「ああ私はやっぱり祐哉さんのことが好きですから）もう私を心配させないで

ください」

祐哉「うくん善処します」

雪菜「まったく祐哉さんは」

二人が抱き合つてると・・

リアス「コホン貴方たちいつまで抱き合つてるのかしら」

祐哉・雪菜「あ！」

朱乃「あらあら」

モードレット「なあマスター」

イツセー「言いたいことはわかるがなんだ」

モードレット「オレら今戦闘中だよな」

イツセー「ああそうだな」

モードレット「なんだんだこれは！」

イツセー「知らん」

信二・達也「茶番だ」

沖田・エリザベート「私たちの出番は！」

レーヴァテイン「本当に馬鹿ばっか」

## 第20話

「イツセイ視点」

レーヴァテインの一撃でケルベロスを一体倒した。残りのケルベロスが俺たちに襲いかけてきた。

リアス「朱乃」

朱乃「はい部長」

朱乃さんの雷撃がケルベロスに直撃するが・

ケルベロス「###\*!!」

朱乃「そんなまだ動けるの」

ケルベロスが朱乃さんに襲いかけてきた・

リアス「朱乃!!」

達也「エリー！」

エリザベート「了解よマスター」

ケルベロス「###\*」

エリザベート「これでおとなしくしなさい」

エリザベートの一撃でケルベロスがブツ飛ばし・

リアス「朱乃無事」

朱乃「ええ藤丸君のおかげで無事よ。藤丸君もありがとうございます」

達也「いえ無事で良かったです」

エリザベート「!!マスター後ろ!!」

達也が振り抜くとケルベロスが達也に襲いかけてきた

達也「しまった」

??? 「させないよ」

??? 「これで」

突然出ってきた二人の攻撃でケルベロスがぶつ飛んだ。

イツセー「まったく遅いぞ・・・木場」

祐哉「ゼノヴィアさんも」

木場「遅くなつてごめんイツセー君」

ゼノヴィア「おいまだ同盟は続いていると思つて良いか？」

木場「僕も続いていると思いたいよ」

ゼノヴィア「フツそれじゃ行くか」

木場「ああ」

しかし突然光が収まり・

信二「なんだ」

バイパー「ハハハハハ遂に完成だ」

達也「まさか」

バイパー「そうだこれが最強のエクスカリバーだ」

信二「くつ間に合わなかったか」

バイパー「フリード」

フリード「おおこれが最強のエクスカリバーかさすがバイパーの旦那だ」

バイパー「フリード最強のエクスカリバーの力をあいつらに思い知らせてやれ」

フリード「分かっているぜバイパーの旦那うひよひよこれである悪魔たちをテストロイ  
できるぜ」

イツセー「木場お前は自分の過去に蹴りつけてこい」

祐哉「ゼノヴィアさんも」

木場「イツセー君でも」

イツセー「この犬ころは俺たちに任せて行ってこい」

木場「イツセー君・分かった」

ゼノヴィア「すまない個々は任せろ」

木場とゼノヴィアはフリードに向かって行った

フリード「最初はイケメンとクソビッチが相手かうひよひよ早速このエクスカリバー  
ちやんで切り刻んでやるぜ」

イツセー「まったく世話が焼ける」

祐哉「確かに、さてあばれるかアニキ」

イツセー「だな」

そしてあと二体のケルベロスに向かった。

くそのころ結界の外側ではく

匙「おいこれ本当に大丈夫かよ」

凜「立香は大丈夫」

立香「私は大丈夫だけど」

凜「(不味いわね他の人たちが)」

ソーナ「匙気張りなさい」

匙「でも会長この間までは」



??? 「でしたら私たちも協力します。」

立香 「あなたたちは……」

【祐哉視点】

祐哉 「これでどうだ」

イツセー 「これはおまけだドラゴンショット」

俺たちは残りのケルベロスを相手にして、木場先輩やゼノヴィアさんのフリードの相手をしていた。

フリード 「うひよひよひよこれが最強のエクスカリバーちゃんの力だ」

木場 「くっこのままじゃ」

フリード 「どうしたどうしたイケメン君クソビッチ」

木場先輩たちフリードのエクスカリバーに苦戦をしていた

ゼノヴィア 「(仕方ないあれを使うしかない)」

バイパー 「無様だな木場祐斗」

木場 「どう言う意味だバイパー・ガリレイ」

バイパー 「こう言うことだ」

突然バイパーは青いクリスタルみたいな物を木場先輩の近く投げた。

木場「これは」

バイパー「それは聖剣計画で犠牲者の記憶だ」

イツセー・祐哉「な！」

イツセー「キサマなんて事を」

バイパー「木場祐斗よ私は感謝しているこの程度の犠牲者で最強のエクスカリバーを創ることができたのだからな」

祐哉「この程度の犠牲者だと・・・ふざけるな!!」

木場「なんで」

イツセー「木場・・・」

???「大丈夫だよ」

木場「え・・・」

木場先輩が声の方を向くと

子供「僕たちなら大丈夫だよ」

子供B「だから元気をだして」

バイパー「なんだこれは」

イツセー「あれは一体？」

木場先輩のまわりに沢山の子供が集まっていた。

子供「僕たちのせいでキミが犠牲になることはないよ」

木場「でも僕は・・・キミたちを・・・」

子供C「うん僕たちはキミに出会えたことに後悔してないよ」

子供D「僕たちはキミに出会えて本当に幸せだったよ」

子供E「でももしキミが不和になったら僕たちがキミを支えるよ」

子供「だから絶対に大丈夫だよ」

木場「あり・・・が・・・とう・・・みんな」

子供「頑張つてね」

木場先輩は一本の聖剣だし・・・

木場「・・・行くよみんな」

子供たち「うん」

子供たち光になって消えて木場先輩の聖剣から二つの力が一つになって・・・

バイパー「ば、ばかな聖の力と魔の力を一つにしただと」

木場「そうこれが僕のいや僕たちの力聖と魔の融合・・・双覇の聖魔剣《ソード・オブ・

ビトレイヤー》」

バイパー「まさかこんなことがおきるとは」

リアス「あれは・・・」

イツセー「木場の禁手化《バランス・ブレイカー》です」

朱乃「あれが祐斗君の」

ゼノヴィア「まだこっちにも居るぞ」

ゼノヴィアさんの前に魔方阵が出て来て・・・

バイパー「あれはまさか」

魔方阵から一本の剣が出て来た・・・

ゼノヴィア「そうこれがデュランダルだ」

バイパー「デュランダルだと」

ゼノヴィア「ああこのデュランダルはじやじや馬でな本来なら別空間に封印しているのだがこの際仕方ない」

バイパー「フリード」

フリード「分かっているぜバイパーの旦那」

再び木場先輩たちフリードに向かっていた

イツセー「それじゃ俺たちもちやちやとやりますか」

祐哉「だな」

【木場視点】

ゼノヴィア「これでどうだ」

フリード「くっ」

ゼノヴィアの一撃でフリードがのけぞり

木場「はああ」

ゼノヴィア「まだまだいくぞ」

フリード「こ、この程度でこのフリード様が」

木場「いやこれで終わりだ・・フリード・セルゼン」

フリード「なに」

僕の一撃でバイパー・ガリレイが創ったエクスカリバーが折れた。そして・

フリード「そん・・な・・ばかな」

バタ

フリード・セルゼンの倒れた。

イツセー「やったな木場」

イツセー君たちが僕の近くに来て・

アーシア「木場さん本当に良かったです。」

木場「あれイツセー君ケルベロスは？」

イツセー「あの犬ころならもう倒れたけど」

木場「ハハハやつぱりイツセー君は規格外だね」  
イツセー「なんだよそれは」

バイパー「ま、まだだ」

祐哉「往生偽悪いぞバイパー・ガリレイ」

バイパー「まだ私にはコカビエルが居る」

コカビエル「そうだなバイパー・ガリレイお前はよく働いてくれた。だがもう用無しだ」

バイパー「な」

ザシュ!!

コカビエルの一撃がバイパー・ガリレイの腹を貫いた

エリザベート「仲間を・・・」

コカビエル「仲間ハハハハハハ俺はあいつの力を利用したに過ぎん」

???「それはお前もだ・・・墮天使コカビエル」

ザシュ!!

コカビエル「な・・・ばかな」

突然コカビエルの後ろから黒い剣が刺さってた

モードレッド「あれは父上!!」

そうコカビエルを刺したのは黒いアルトリア・ペンドラゴンだった。そしてコカビエルも倒した。

??? 「セイバーオルタよくやった」

セイバーオルタ 「・・・コクリ」

祐哉 「キサマは何物だ」

達也 「レフーー!!!」

祐哉 「達也?」

レフ 「これはお久し振りです藤丸達也君、遠坂信二君」

祐哉 「達也あいつは」

レフ 「知らない人いますからここは自己紹介でもいたしましょうか。知ってるかたわお久し振りです知らない人ははじめまして私はレフ・ライノール・フラウロスです長いのでレフとお呼びください」

祐哉 「レフつと言ったかキサマは目的はなんだ」

レフ 「私は全世界をてにいれる」

イツセー 「全世界だと」

レフ 「ええ神が居ないなか私が全世界を支配します」

ゼノヴィア 「おい神が居ないとはどう言うことだ」

レフ「どうやれ知らなかったようですね。神は遠い昔しに無くなりましたよ」

アーシア「そんな・・・」

ゼノヴィア「嘘だそんなこと信じるか」

レフ「信じるか信じないかは貴方たちにお任せしますけど神が居ないは真実です」

ゼノヴィア「それじゃ本当に神は・・・」

アーシア「ゼノヴィアさん・・・」

レフ「分かりましたか神はもうこの世界には存在しません」

祐哉「・・・それがどうした」

アーシア「・・・祐哉さん」

祐哉「神が居ない・・・それがどうした」

レフ「ほお貴方の神が居なくても悲しくないんですか？」

祐哉「さあな知らねよ。けど一つ分かるのはテメエがみんなを不幸にするってことだ。だから俺はテメエをぶつ飛ばす！ただそれだけだ」

イツセー「たしかに神は居ないかもしれないけど人は神に縛られて生きてない人は誰かの為に生きているんだ」

アーシア「イツセーさん・・・私はイツセーさんを信じます。イツセーさんが居るから私もがんばります。」



ゼノヴィア「そうだこんなことで落ち込んで居られない」

達也「レフ！キサマの野望も個々で終わりだ」

レフ「それはどうでしょう。オルタ！」

セイバーオルタ「・・・コクリ」

セイバーオルタが僕たちの前にたち阻んできた。

モードレッド「父上！」

レフ「まだ終わりじゃありませんよ」

レフがそう言うときセイバーオルタのまわりに複数の魔方陣が出て沢山の黒に人形が出て来た

リアス「これは」

沖田「マスターあの黒い人形はサーヴァントです」

祐哉「な！」

レフ「その通りです彼女はサーヴァント・・・ハサン増殖の能力があります」

イツセー「マジかよ」

エリザベート「一体何体いるのよ」

レフ「そうですねたしか百体ぐらいでしたけ」

アーシア「そんな百体も」

レフ「それでは私は此れで」

達也「待ちやがれ」

レフ「みなさん運が良かったらまたお会いしましょう」

達也「レフーーーー!!!」

そしてレフは消えて百体のハサンとセイバーオルタだけが残った。

達也「クソ」

祐哉「達也気持ちはわかるけどまずはこれを何とかしないと」

達也「祐哉・・・そうだな」

信二「さてまずはどうするか」

だが突然百体のハサンが襲いかけてきた

祐哉「やべ」

雪菜「祐哉さん」

ガキーン

祐哉「え？」

祐哉君前に突然巨大な盾が出て来て祐哉君を守つた。

【祐哉視点】

祐哉「あなたは」

???「なんとか間に合いました」

達也「マシユさん!!」

???「私もいますマスター」

祐哉「ジャンヌ」

小猫「・・・彼女たちは」

マシユ「始めまして私は藤丸立香のデミサーヴァントのマシユ・キリエライトと言います」

リアス「デミサーヴァントとは一体？」

ジャンヌ「詳しいことは次回にお願いいたします」

朱乃「そう言う貴方は？」

ジャンヌ「私はジャンヌ・ダルクと言います兵藤祐哉のサーヴァントです」

沖田「ええええちよつとマスターこれはどう言うことですか」

祐哉「お、沖田さん詳しい話しは後ほど」

沖田「んく分かりました。」

ジャンヌ「他の人たちもそれで良いですか？」

リアス「分かったわけけど終わったらちやんと説明しなさいよ」

祐哉「分かりましたグレモリー先輩」

信二「けど二人だけじゃ」

マシユ「個々に来たのは私たちだけありませんよ」

祐哉「え、それってどう言う・・・」

ドカーン

イツセー「なんだ」

「なんとか間に合ったぽい」

「もう夕立一人で先行するんじゃないわよ旗艦は暁なのよ」

「じゃ旗艦殿私たちどうすればいいのかな？」

暁「コホン・・・まずは雷と電は祐哉兄さんたちの安全確保」

雷「分かったわ電行くわよ」

電「了解なのです」

暁「響と夕立は各個敵撃破」

夕立「まかせてぽい」

響「了解したよ」

?? 「暁ちゃん私たちはどうしたらいいのかな」

暁 「大和さんは個々で援護射撃をお願いします」

大和 「分かったわ暁ちゃん」

暁 「残りの暁、時雨、吹雪は敵を撃破しながら祐哉兄さんたちと合流するわ」

時雨・吹雪 「了解」

祐哉 「な、なんで暁ちゃんたちが」

マシユ 「それは・・・」

雷 「提督が私たちに出击任務を出したからよ」

イツセー 「父さんが」

電 「はいそうです」

祐哉 「まったく父さんは」

イツセー 「モードレッド！アルトリアさんの方に」

モードレッド 「けどマスター」

祐哉 「個々からはモーさんのステージだ」

イツセー 「そうことだモードレッド。だから行けモードレッド!!」

モードレッド 「!!了解だマスター」

モーさんはアルトリアさんの方に向かった

祐哉「俺たちは」

イツセー「お掃除と行くか」

暁ちゃんたちの援護でハサンたちの数が少なくなってきた。そしてモーさんは……

【モードレッド視点】

モードレッド「父上！」

セイバーオルタ「……」

モードレッド「決着つけよう」

俺は父上との決着を付けるため剣を構えた

モードレッド「はああ」

セイバーオルタ「!!」

ガツキン

モードレッド「はあ」

セイバーオルタ「……」

ガツキン

俺の攻撃は父上に受け止められ

セイバーオルタ「!!」

モードレッド「くうまだだ」

俺は父上の攻撃をなんとかガードするのに成功したが

モードレッド「くうこのままじゃ拉致があかないだつたら父上お互いに最大の技で決めようじゃないか」

セイバーオルタ「……コクリ」

俺と父上は距離を取り……

セイバーオルタ「エクスカリバーモルガーション」

モードレッド「くられ宝具解放！クラレント・ブラッドアーサー！！」

【イツセー視点】

突然モードレッドの方から巨大な爆発が起きて……

イツセー「モードレッド!!」

俺たち百体のハサンを片付けモードレッドの方に向かった。

イツセー「モードレッド無事か」

モードレッド「はあ……はあ……マスター」

イツセー「大丈夫かモードレッド」

モードレッド「ああなんとかな」

祐哉「アルトリアさんは？」

モードレッド「!!そうだ父上!!」

モードレッドは倒れてるアルトリアさんの方に向かって

モードレッド「父上!!しっかりしてください」

アルトリア「こ……こ……は」

モードレッド「父上！」

アルトリア「モー……ド……レット……ド……私……は……一……体……な……に……を」

モードレッド「もう大丈夫です父上悪いのは全分倒しました」

アルトリア「そう……です……か……モードレッド……貴方が……私を……助

けて……くれた……のですか」

モードレッド「いえ父上お、私の力だけじゃありませんマスターや頼れる仲間がいた

から個々まで来れました。」

アルトリア「……そう……です……か……それは……良……か……つ……た……で  
す」

モードレッド「父上しっかりしてください父上父上!!」

信二「まだ間に合うモーさん」

モードレッド「けど……もう父上は……」



信二「大丈夫あとは俺に任せろ」

イツセー「モードレッド個々は信二に任せよう」

モードレッド「う、うん」

信二「よし行くか・・・我が名は、遠坂信二その力、その剣で如何なる敵を凧ぎ払え我が契約に応じよアルトリア・ペンドラゴン」

信二が契約の呪文を言うとアルトリアさんの体が光だし・・・

アルトリア「あれ・・・私は確か」

モードレッド「父・・・上」

アルトリア「モードレッドどうしまし・・・」

モードレッド「父上!!!」

モードレッドはすぐにアルトリアに抱きついた

モードレッド「父上、父上」

アルトリア「モードレッド・・・まったく仕方ありませんね」

祐哉「これで一件落着と」

イツセー「いやまだなんか来る」

祐哉「え？」

パリーン

達也「なんだ一体」

空を見ると・・

達也「あれは」

白い竜の装甲つけた人が俺たちの前に降りて来た

???「どうやらもう終わったようだ」

信二「あんたは一体」

???「俺はあいつらの回収に来ただけだ」

イツセー「じゃ持っててくれ」

白い竜の装甲つけた人はバイパーとコカビエル回収して消えた。

達也「あいつは一体誰なんだか」

祐哉「まあ良いじゃないかこれで一旦終わったんだから」

達也「だな」

木場「部長どうもすみませんでした」

リアス「祐斗貴方はよく頑張ったわまた私のところに戻ってくれるかしら」

木場「部長・・はい！これからは貴方の騎士してみんなを守ってみます。」

リアス「それじゃ勝手に居なくなつた罰でお尻叩き一万回よ祐斗」

イツセー「一万回って」

祐哉「マジか」

木場「大丈夫だよイツセー君祐哉君僕はグレモリー眷属の騎士さ、このくらいで……」  
そして木場のオシヨキは夜遅くまで続いた。

くその二日後く

イツセー・祐哉「ええええ」

リアス「そう言うことだから新しい騎士のゼノヴィアよ」

ゼノヴィア「ふむゼノヴィアだこれからよろしく頼む」

祐哉「本当に良かったんですか？ゼノヴィアさん」

ゼノヴィア「神が不在が分かったからな悪魔になつてみた」

イツセー「おいおいマジかよ」

ゼノヴィア「そう言うことだからよろしくねイツセー君」

イツセー「真顔でイリナの真似はやめてくれ」

ゼノヴィア「む、結構難しいな」

リアス「デュランダルを持つてるゼノヴィアが仲間になつて心強いわ」

ゼノヴィア「よろしく頼むリアス部長」

こうして新たにゼノヴィアが部長の眷属になり信二のサーヴァントにアルトリアさんが仲間になった。

# F G O 偏 カルデアの切り札と疾風 過去偏 前編

【祐哉視点】

コカビエル襲撃から二日が経って俺たちはオカルト研究部の部室にやって来た。

リアス「全員揃ったわね」

朱乃「ええ揃いましたわ」

雪菜「あれ暁ちゃんたちは？」

祐哉「暁ちゃんたちはコカビエルの件で鎮守府で報告書を書いているところ」

「その頃暁たちは」

暁「うくん疲れた」

響「もう少しで終わりだよ姉さん」

夕立「これも追加ぽい」

暁「また増えた」

響「私も手伝うから頑張ろう司令官代理」

暁「ありがとう響」

く必死で報告書を書いてた」

祐哉「まあこんな感じで頑張ってる」

リアス「あれお父さまは？」

イツセー「父さんは新たな艦娘を迎えにいつて隣り街まで行ってる」

アーシア「そうなんですか」

達也「そろそろ良いかな」

祐哉「わりい大丈夫だ」

信二「俺たちとレフの間に何かあったか知りたいたいんだろ」

リアス「ええ貴方たちに何かあったか教えてくれるかしら」

達也「分かりました。信二も姉さんも良い？」

信二「ああそもそもこの事件が終わったら言う積もりだったから」

立香「私も良いよ」

達也「それじゃまずは・・・」

く半年前く

【達也視点】

冬休みに俺と信二と姉さんで一緒にカルデアにやって来た。

達也「此処も久し振りだな」

信二「去年の冬休み以来だからな」

立香「達也く信二君早く行くよー」

信二「了解今行く。達也行こうぜ」

達也「ああ、あいつは元気かな」

俺たちはカルデアの中に入って・・・

凜「あら遅かったじゃない」

凜さんが出ってきた。

達也「ごめんすこし遅くなった」

凜「別にかまわないわ。それよりあの子たちも貴方たちを待ってるわ。早く行きま

しょう。」

信二「了解凜姉さん」

俺たちは凜さんの後を追ってどこかの部屋の前にやって来た。

凜「此処でみんなが待つてるわ」

そして部屋のドアを開けると・・

??? 「「おかえりなさい」」

沢山の人が歓迎してくれた。

立香たち「「ただいまみんな」」

俺たちは部屋に入ると・・・

マシユ「お久し振りです先輩」

立香「久し振りマシユ元気だった？」

マシユ「はい！先輩も元気そうでしたです」

??? 「信二君も久し振りだね」

信二「ダ・ヴィンチちゃん！」

ダ・ヴィンチ「信二君も元気そうでした」

??? 「凜君はいこれ」

凜「ロマニ博士ありがとうございました」

達也「よっ久し振り」

??? 「うん！久し振り達也」

達也「元気そうだな。ななか」



ななか「うん！私は元気だよ。」

達也「なんかいつもどうりだな」

ななか「ハハハそうだね」

彼女は白河ななか、このカルデアに居る適合主だ凜さんが話してる人はロマニ・アーキマン博士個々のまあ博士だ最後に信二と一緒にいる人はダ・ヴィンチちゃん個々に居るサーヴァントで科学者だ。そしてみんなすごく楽しんでいた。

レフ「白河君そろそろ時間ですよ」

レフ博士が部屋に入ってきた

ななか「レフ博士分かりました。それじゃまたね達也」

達也「ああまたななか」

ななかはレフ博士と一緒に部屋を出って何処かに向かった。

凜「ねえロマニ博士毎回レフ博士はななかさんと何処に行ってるの？」

ロマニ「ごめんそれまではわかんないんだ」

凜「でもやっぱり」

ロマニ「ああやっぱり」

凜・ロマニ「なんかある」

俺が知らない間にカルデアで事件が起きようとしていた

## 過去偏 中編

【達也視点】

ななかがレフさんに着いてって数時間後

ロマニ「今日はこれで解散しようか」

凜「そうね今日はこのぐらいにして明日にしましょ」

俺たちは解散して部屋にもどると・・

立香「♪♪♪」

ん？

達也「姉さんなんで俺の後を？」

立香「え？一緒に部屋に行こうと」

達也「いやいや部屋は別だからな」

立香「ガーン!!!そ、そんなorz」

姉さんが凄く落ち込んだ。

凜「あのね達也も中二よ当たり前でしょ」

立香「達也と別・・達也と別・・」

ロマニ「なんか前よりパワーアップしてないか」

マシユ「もう先輩たら」

達也「ハハハ・・・」

ダ・ヴィンチ「はゝ達也君とは部屋は別だけど立香ちゃんの部屋は達也君の部屋と隣同士にしてるから元氣出しなさい」

立香「ほ、本当にダ・ヴィンチちゃん」

ダ・ヴィンチ「本当よ」

立香「やったー」

姉さんは部屋が隣同士と聞くとすぐに明るくなり凄く喜んでつた。

凜「本当にあんたは単純よね」

ダ・ヴィンチ「まったくだわ」

凜さんとダ・ヴィンチちゃんは呆れてた。

くとある研究室く

レフ「もう良いですよななか君」

ななか「ありがとうございますレフ先生」

レフ「いえ別にかまいませんよ」

ななか「それでは私はこれで失礼します」

レフ「ええまた」

ななかが研究室を出ると・・・レフはななかのカルテを見て・・・

レフ「まさかこうも早く計画を進めることができるこは・・・フッフ」

レフは不気味の笑みをこぼした。

「次は日」

達也「Z z z・・・うゝんあれまくらってこんなに柔らかかったけ」

俺がもつとさわると・・・

立香「ん、ん、あ」

・・・あれ

達也「ま、まさか」

おそるおそる見ると・・・

達也「姉さん!! な、なんで」

コンコン!! ドアが叩く音がして・・・

ななか「達也ー起きてる」

達也「な、ななか」

ななかが部屋の前に来たみたいだ。

立香「むきゆ・・達也くもつとく」

姉さんが変な寝言を言うよ・・

ななか「達也ー入るよ」

え、マジでま、まづい

達也「ちよつま・・」

ガチャ！ドアが開き

ななか「達也おはよう」

ななか部屋に入り・・

ななか「そう言えばさつきから騒がしいけどどう・・した・・の」

ななか「俺と俺のベットに入ってる姉さんを見て・・あ、詰んだわ俺

ななか「たくつくやこれは何かな」

達也「こ、これは姉さんが勝手に」

ななか「ふくんとくで達也はいつまでも立香さんの胸を揉んでるのかなくねえ達也

フッフ

ななか「笑ってない顔で・・」

ななか「達也の・・・バカーーーー」

達也「ギャーーー」

く朝御飯中く

凜「あなたは何を考えてるのよ」

凜さんの説教で姉さんは正座をさせられていた。

立香「だって達也と一緒に寝たかったもん」

凜「ほくまだオシヨキが足りなかったようね」

凜さんの手に魔力が宿り

立香「ま、まって凜さ、さすがにそれは私でも」

凜「あなたは反省しなさい」

立香「ゴメンナサーイ」

達也「ななか本当にごめん」

ななか「・・・はくもう良いよどうやら悪いのは立香さんだから」

達也「本当に！ありがとうななか」

ななか「／＼／＼でもその代わり次は私と一緒に寝てよね」

達也「さ、さすがにそれは」

ななか「ダメ？」

ななかが子犬のような目で俺を見て・・

達也「う／＼わ、分かったよななか」

ななか「本当にやった！」

あ、あの目は犯則だよななか

レフ「ななか君ちよつと良いかな？」

ななか「あれどうしました先生」

レフ「いや今日私が忙しくなってしまうって今からでも良いかな？」

ななか「構いませんよ先生」

レフ「それは良かった。それじゃ行きましょななか君」

ななか「はい。じゃ達也また後でね・・約束わすれないでね」

達也「あ、ああ」

なんかななかが遠く行ってしまふような予感がした。

そして数時間後異変が起きた。

ドカーン!!!

突然カルデアの何処かが爆発が起きた。

俺たちは爆発のほうに向かって・・



達也「な、なんだ一体これは」  
俺はとんでもないものを見てしまった。

## 過去偏 後編

【達也視点】

達也 「なんだこれは」

俺たちが見たのは・・・

立香 「ひ、ひどい」

ボロボロになったカルデアの指令部だった

ロマニ 「なんで指令部が」

・・・あ、確か

達也 「ロマニ博士！ ななかは！」

ロマニ 「え、」

信二 「そう言えばレフ博士の部屋は・・・」

ロマニ・凜 「!!!」

く、俺は急いで指令部の隣のレフさん部屋に入った

達也「ななか！無事か！」

俺が見たのは・・・倒れてるななかだった

達也「ななか！大丈夫かしっかりしろ」

ななか「た・・・ここ・・・にげ・・・」

達也「え？何だつてななか」

ウィーーーーーン

隣の部屋で変な音がして

ロマニ「大変だ達也君カルデアの装置が勝手に」

達也「え？」

突然俺の前が光だし・・・

達也「な！」

・・・

達也「・・・!!!」

俺が目を開けると・・・

達也「個々は？一体」

見たことがない初めて見る景色だった

信二「無事か達也」

達也「あ、ああ大丈夫だ。信二個々は一体何処か解るか」

信二「いや全然わからん。俺も気が付いたら個々に居たら」

達也「それじゃななかや姉さんたちは」

信二「それもわからん個々の近く居るかも全然わからん」

達也「そんな・マジか」

信二「まあ個々にいても仕方ないから移動するか？」

達也「そうだな。早くみんなと合流しないと」

ドカーン

達也「な、なんだ」

信二「急ぐぞ達也」

達也「おう」

く何処かの街く

・・・ハアハア

立香「このままじゃ」

立香は謎の奴に追われて逃げていたが・・・

立香「そんな行き止まりなんて」

???「ーーーー」

立香「だ、誰か」

謎の奴が立香に襲いかけて、立香が目を閉じると・・・

ガツキン

しかし謎の奴の攻撃は立香には届かなかった。

立香「あれ？」

???「大丈夫ですか先輩」

盾をもった女性が立香を庇った

立香「マシユ！その姿は？」

マシユ「詳しい事は後で、今はあの敵を・・・」

謎の奴が再び立香とマシユに襲いかけた

立香「マシユ！」

マシユ「くっ！」

???「!!!」

突然に謎の奴が消えた

立香「い、一体何が」

達也「姉さん無事か」

立香「達也!!」

姉さんが突然俺に抱きついてきた

達也「ね、姉さん」

立香「達也の匂いだハゝ生き返る」

達也「姉さんくすぐたいよ」

???「あんたは一体なにをやっているのよ」

ドカッ

立香「痛た!何するのよ!凜」

凜「それはコツチのセリフよ」

ガミガミ・・・

信二「何とか無事みたいだな」

マシユ「信二君たちもコツチに」

信二「マシユさん他の人は?」

マシユ「恐らく他の人は・・・」

??? 『・・・み・・・ぶ・・・』

信二「声が、何処から」

ロマニ『みんな無事』

信二「ロマニ博士！これは？」

ダ・ヴィンチ『コッチの方は落ち着いたから何とか連絡してみただけど繋がって安心したよ』

信二「一体何が合ったんですか」

ロマニ『カルデアの装置が起動して、信二君たちが別の所に飛ばされたんだ』

マシユ「じゃ此所は一体何処ですか？」

ダ・ヴィンチ『それがそこが何処かはわからないんだ』

信二「それじゃどうしたら」

ダ・ヴィンチ『それなら信二君たちを飛ばした犯人の探して見つければ此所から出れるはず』

信二「なるほど分かりました」

ロマニ『僕たちも出来れば協力するよ』

信二「分かりましたなんかあったらお願いいたします」

ロマニ『分かった信二君たちも気を付けて』

信二「はい．．．おくい達也たちそろそろ移動するぞ」  
達也・立香・凜「え？」

俺たちは信二から話を聞いて．．．

凜「なるほど私たちは個々に飛ばした犯人を探せばいいのね」

信二「ああ、だけど誰はわからんけど」

達也「まあ会えばわかるだろう」

信二「たな」

立香「そう言えばマシユその姿は？」

マシユ「この街に飛ばされる前に先輩の魔力の力でサーヴァントの力に覚醒したんです」

ダ・ヴィンチ『それは恐らく立香ちゃんの魔力でサーヴァント化の力を得てデミ・サーヴァントになったとことたな』

信二「なるほどな」

たつや．．．たつや

達也「え？」



信二「どうした達也」

達也「誰か呼ばなかったか」

信二「いや呼ばなかったぞ」

達也「じゃ誰が俺を・・・」

達也・・・お願い

達也「まさかななか」

達也お願い力を貸して

達也「ななか・・・分かった俺で良かったら力になるぞ」

ありがとう

達也「ななか俺たちは何処に向かえばいい？」

一番高い所に・・・

達也「一番高い所って・・・まさかあそこか・・・よし行くか」

立香「達也？」

俺は一番高い所に向かってくと・・・

立香「達也どこに行くの？」

達也「ななかがよんでるんだ」

信二「ななかが」

達也「ああなかなかあそこに居るってなかなか教えてくれた」

俺はなかなか居ると思う所に指を指した

達也「だから俺はなかなか助けに行く」

信二「だったら俺も行くぞ」

立香「達也が行くなら私も行く」

マシユ「みんなはデミ・サーヴァントの私が守ります」

凜「決まりね達也」

達也「ありがとうみんな。よし行くぞみんな」

達也以外「ああ了解」

俺たちは高い所に到着した

凜「個々になかなかちゃんがいるのね」

達也「ああ、よし入るぞ」

中に入ると・・

???「もう来るとは」

達也「誰だ」

奥の方から誰かが出て来た

立香「あなたは、レフ博士！」

マシユ「なんであなたが此処に」

レフ「今はあなたたちに教える気はありません」

達也「ななかは何処に居るだ」

レフ「ななか君なら・・・」

レフの後ろを見ると捕まった女性が一人居て・

達也「ななかー！！」

ななか「達也・・・」

達也「レフななかをどうするつもりだ」

レフ「ななか君には私の計画のすこし協力貰ってます」

達也「ななかはお前の道具じゃない！」

レフ「キミたちじゃななか君を救うことが出来ないじゃないか」

達也「本当にそう思ってるのか」

レフ「それじゃどうやって助けるのですか」

達也「こうやるだ・・・信二！」

信二「まかせろ！」

信二の眼が光るとななかも光だして・・・ななかが消えて突然俺の所に来た。

レフ「なに・・・」

凜「悪いわねレフ博士これが私の弟の力・・・磁力の魔眼よ」

レフ「磁力の魔眼？」

信二「磁力の魔眼は俺の目が届く距離ならその距離縮めることが出来るんだ」

達也「そう言うことだレフななは返してもらった」

なな「達也」

達也「もう大丈夫だ」

信二の力でななかを救うことが出来た。しかしレフは・・・

レフ「フフフ・・・まさかこんな力をかくしていたとは、良いでしょそれじゃ次は私の  
力いや私の研究の成果お見せしましょう」

パッチン

レフがそう言つて指を鳴らすと・・・

??? 「ウオオオ」

凜「何をあれ」

変な化け物が出て来た

レフ「これが私の研究成果・・・ガイヤメモリーの力です」

ロマニ『ガイヤメモリーだつて！』

達也「ロマネ博士ガイヤメモリーって一体？」

ロマネ『ガイヤメモリー・・・地球にある物や生物もとに開発された物だ』  
凜「なんですって」

ロマネ『しかしあまりの協力すぎて開発が中断して全部破棄になったはず』  
立香「・・・まさかレフ博士は」

レフ「そうです。私の力でガイヤメモリーを復活させたんですよ」  
マシユ「なんてことを」

達也「でもなんでカルデアでガイヤメモリーを・・・」

レフ「それは・・・カルデアの適合主がガイヤメモリーと愛称が良いからですよ。」  
凜「なるほどだからなかなかちゃんが・・・」

レフ「そうです・・・特にななか君はガイヤメモリーの適合がずば抜けて高かった」  
達也「テメエよくも」

ななか「・・・達也」  
達也「えっ」

レフ「話もこれで終わりです。行きなさいマグマドールバント」  
マグマドールバント「ウオオオ」

マグマドールバントが向かって来ると・・・突然ななが俺に・・・

ななか「・・・ねえ達也悪魔に相乗りする気はある？」

達也「ななかそれってまさか」

ななか「ケースを開いて俺に聞いてきた

ななか「・・・うんガイヤメモリ」

俺の考えは決まってる

達也「ななか俺は言ったはずだキミの助けになると」

俺がそう言うのと黒いガイヤメモリをとって赤いドライバーを腰に装着した

信二「達也来るぞ」

マシユ「みんなは私が守ります」

マシユの盾でマグマドーブアントの動きが止まった

マグマドーブアント「ウオオオ」

しかしマグマドーブアントの力で少しずつ押されきた

マシユ「くうこのままじゃ」

立香「マシユ！」

達也「大丈夫あれは俺たちが何とかする」

凜「危険よ二人とも」

達也「大丈夫！行くぞななか」

ななか「うん」

俺とななかはガイヤメモリーもって・・・

『サイクロン』『ジョーカー』

2つのメモリーをドライブバーに挿して・・・

達也・ななか「変身！」

【信二視点】

二人がそう言うのと・・・左が黒で右が緑に姿が変わった。

達也「これが俺とななかの力だ」

レフ「・・・その姿は一体」

ななか「レフ博士この力であなた止める」

二人が言うのと・・・

達也・ななか《この俺たちの力仮面ライダーWの力で・・・レフ・・・あなたの罪を数

えろ》

【達也視点】

仮面ライダーWに変身した俺たちは・

W（達也）「行くぞななか」

W（ななか）「うん行こう」

レフ「変身した所でマグマドールバントには勝てませんよ」

W（達也）「それは」

W（ななか）「どうかな」

マグマドールバントに向かって・

W（達也）「おりゃ」

マグマドールバント「!!」

一撃を加えて・

W（ななか）「まだまだ行くよ」

マグマドールバント「!!!」

ななかも引き続き攻撃し・

マグマドールバント「ウオオオオ」

マグマドールバントが反撃してきて

W（達也）「くうまだそんな力があるとは」

W（ななか）「だったら」



W (達也) 「え、」

『ルナ』

『ルナ・ジョーカー』

W (ななか) 「はあああ」

マグマドールバント 「グオオ」

ななかが突然メモリーを変えて、マグマドールバントを吹き飛ばした

W (達也) 「ちよつななか突然かえないでよ」

W (ななか) 「ハハハゴメンゴメン」

W (達也) 「まったく」

マグマドールバント 「ウオオオ!!」

W (ななか) 「そろそろ決めるよ達也」

W (達也) 「ああ、これで決めるぜ」

『サイクロン』

『サイクロン・ジョーカー』

『ジョーカー! マキシマドライブ!』

W 「はあああ」

マグマドールバント 「グオオ」

ドカーン

俺たちの一撃でマグマドールバントを倒しマグマメモリを破壊するのに成功した

W（達也）「フウー丁上がり」と

W（ななか）「・・・達也私・・・」

W（達也）「・・・わかつてる・・・」

W（ななか）「え、」

W（達也）「レフのせいだななかの身体は限界なんですよ」

W（ななか）「・・・うん・・・ゴメンね達也約束守れなくて」

W（達也）「・・・なあなか俺は凄く嬉しかった。ななかに出会えて」

W（ななか）「・・・達也・・・私も達也に会えて嬉しかっただからまた1つ約束して良い

かな？」

W（達也）「ああ構わないよ」

W（ななか）「ありがとう・・・達也私たちがみたいな人を幸せにしてあげてね」

W（達也）「約束するよななか」

W（ななか）「ありがとう達也・・・」

変身を解くためにドライバーに手を置いて・・・変身を解いた。

ななか「バイバイ達也」

達也「ああ」

ななかは白く光って消えた

レフ「まさかドーバントを倒すとはしかし・・・これが初まり・・・」

突然凄いい音になり・・・崩壊が突然始まった

立香「なにになに」

レフ「どうやらタイムリミットの様ですね。それではみなさんごきげんよう」

そう言うのとレフが消えた

凜「このままじゃ私たちが・・・」

『ダ・ヴィンチ』「みんなあの空間に飛び込んで」

黒いデカイホールが出て来て俺たちはその空間に飛び込んで・・・

信二「あれ、此所は？」

ダ・ヴィンチ「みんな無事」

信二「ダ・ヴィンチちゃん」

凜「ダ・ヴィンチちゃんたちが居ってことはカルデアに戻って来たみたいね」

ロマニ「あれ達也君は」

信二「達也ならあそこに」

達也「ななか・俺・約束するよ絶対」

立香「達也・大丈夫だよ」

ギユ

姉さんが後ろから抱きついたきた

達也「姉さん」

立香「達也には私たちが着いてるよだから・今は我慢しなくて良いんだよ」

達也「姉さん・あり・がう・う」

こうして俺たちのカルデアの戦いは終わった・・・

く現代く

### 【祐哉視点】

俺たちは達也とカルデアのことを聞いて・

達也「レフが最初に起こした出来事だ」

リアス「なるほどあなたたちのことは分かったわ・・・だけど次からは私たちにも協力させなさい」

信二「だけど」

リアス「もうあなたたちは私たちの大事な仲間よだからこれからはオカルト研究部も協力するわ」

朱乃「ええ突然ですわ」

木場「キミたちには助けられたから今度は僕達が助けるよ」

小猫「・・・私も協力します」

アーシア「私もがんばります」

ゼノヴィア「私も協力しよう」

イツセー「達也たちも俺の大事のダチだ。だから協力するぞ」

エリザベード「私のマスターだから突然私も・・」

祐哉「突然俺もダチの為に協力するぞ」

達也「みんなありがとうな」

信二「だろ俺の言った通りだっただろ」

達也「だな・・・(ななか俺絶対約束守るからな)」

・  
・  
うんががんばってね。  
達也

# ハイスクールD×D・艦これ編 教室停止の白露型 第1話

【暁視点】

私は無事書類仕事終わらせることが出来た。

暁「やっと終わった〜」

電「お疲れさまなのです暁お姉ちゃん」

電が私の所に来てお茶を出してくれた

暁「ありがとう電」

電「はいなのです。そう言えばそろそろ司令官が帰って頃なのです」

暁「あら？もうそんな時間なのね」

私たちがそんな話をしていると・・・

イツセー父「今戻ったぞ〜」

司令官が戻って来た

暁・電「お帰りなさい司令官」

イツセー父「ああただいま」

暁「後ろに居るのが今日着任する艦娘かしら」

イツセー父「ああそうだ。二人共自己紹介頼む」

「了解よく司令官はいはくい白露型三番艦村雨よ」

「白露型五番艦春雨です。よろしくお願いします」

暁「暁よ」

電「電なのです」

イツセー父「電村雨と春雨の案内を頼む」

電「了解なのです。村雨ちゃん、春雨ちゃん行きましょう」

村雨「ええ」

春雨「分かりました」

村雨と春雨は電と一緒に指令室を出て行った

イツセー父「暁なんか変わったことはなかったか？」

暁「祐哉兄さんから連絡があつたわ」

イツセー父「祐哉はなんて？」

暁「達也さんのとこで・・・」

イツセー父「分かった。ありがとう暁」



私たちの鎮守府に村雨と春雨が着任した。

【イツセー視点】

達也たちの過去を聞いたその夜俺は依頼人の家に来た

??? 「悪いなこんな時間に呼んで」

イツセー「いえいえ構いませんよ」

??? 「そうかなら入ってくれ」

俺は依頼人の家に入り・・・

イツセー「確か今日は話し相手ですよね」

??? 「ああそうだ・・・さてそろそろちやんと話そうじゃないか・・・赤龍帝」

イツセー「・・・そうですね・・・堕天使の総督さん」

??? 「!!! さすが赤龍帝。いつ頃気が付いた」

イツセー「人間じゃないことは最初から気付いてた。あんたは人と別の気配がしたからな。堕天使の総督ってことはつい最近ある人から教えてくれた。」

??? 「ある人？」

??? 「私ですよ。アザゼル様」

突然魔方阵が出て来て一人の女性が出て来た。

アザゼル「げえレイナーレ」

レイナーレ「まったくこんなところに探しましたよアザゼル様」

アザゼル「くうこんな所で捕まってたまるか」

アザゼルと言うが逃げようとすると・・

レイナーレ「フフフ・・甘いですよアザゼル様」

???「そこまでですアザゼル」

もう一人の女性がアザゼルを捕まえた

アザゼル「げえ、お前は愛宕」

愛宕「まったくあなたはこの忙がしい時に何をしてるんですか」

アザゼル「いや、その、これは」

愛宕「帰ったら覚悟来て下さいね。ア・ザ・ゼ・ル」

アザゼル「・・・・・」

愛宕「あ、そうでしたレイナーレ」

レイナーレ「はい！愛宕様何ですか？」

愛宕「アザゼルは私に任せてあなたはゆっくりしててください」

レイナーレ「良いんですか？愛宕様」

愛宕「ええあなたはよく頑張ってくれましたから休息をしても良いですよ」

レイナーレ「ありがとうございます愛宕様！」

愛宕「いえしつかりと休んで下さい。あ、そうでしたレイナーレちよつと良いですか？」

レイナーレ「・・・？はいなんですか？愛宕様」

レイナーレが近づくと・・・

愛宕「（赤龍帝と二人きりなので頑張ってくださいねレイナーレ）」

レイナーレ「（／／／愛、愛宕様そ、それってどう言うことですか）」

イツセー「??？」

なんか話して居ると愛宕と言う女性がアザゼルを連れて消えた

イツセー「えーとまずは久しぶりで良いのかな？」

レイナーレ「う、うん久しぶりイツセー君」

イツセー・レイナーレ「・・・」

イツセー「・・・最近はどうだ？」

レイナーレ「最近はとつても充実してるよ。これもイツセー君のお蔭だよ」

イツセー「俺は何にもしてないよ」

レイナーレ「ううんイツセーが私を助けてくれたからだから本当にありがとうイツ

セー君」

イツセー「／＼／＼お、おう」

レイナーレ「イツセー君は最初どう？」

イツセー「俺は・・・」

こうして俺とレイナーレは一晩中話し合った。

　　次の日の朝

【祐哉視点】

俺が学校のクラスに入ると・・

ガヤガヤ・・・

祐哉「なんか騒がしいな」

信二「祐哉実は俺たちのクラスに新入生が入ってくるんだ」

達也「二人も入ってくるだ。しかも二人とも女性だ」

祐哉「マジか」

達也「ああマジだ」

フエイト「みんな席に着いて」

みんなが席に着くと

男子「先生今日新入生が入って来る噂で本当ですか？」

フエイト「ええ本当よ。それじゃみんな知ってることだし紹介するわね。二人とも入って良いわよ」

??? 「はい」

二人の女性クラス入って来て

フエイト「二人とも自己紹介お願い」

??? 「海風ですよろしくお願ひいたします」

??? 「河風だよろしくなみんな」

祐哉・達也・信二「!!!」

達也「(おい!祐哉あれ)」

祐哉「(あ、ああ間違いないあれは艦娘だ)」

信二「(なんで艦娘がいきなり)」

祐哉「(一体どうして艦娘がいきなり学校に)」

フエイト「じゃ河風は祐哉の隣で海風は信二の隣の席でお願い」

海風「分かりました」

河風「分かったぜ」

河風さんが俺の隣に来て

河風「よろしくな」

祐哉「あ、ああよろしく」

俺たちの学校に新たな艦娘が来た。

## 第2話

【祐哉視点】

（昼頃）

俺たちは屋上に来ていた

祐哉「やっぱリアニキの所にも艦娘が」

イツセー「ああ確か名前は・・・白露って言ってた」

雪菜「私のクラスにも三人入って来ました」

祐哉「雪菜その三人の名前覚えてる？」

雪菜「はい！覚えています。名前は、涼風さん、五月雨さん、山風さんの三人です。」

イツセー「合計で六人も入って来たか」

雪菜「ですが夕立ちちゃんは凄く嬉しそうでした」

祐哉「だろろうな姉妹が六人も入って来たんだからな」

イツセー「仕方がないだろ時雨ちゃんは父さんの所だから夕立ちちゃん一人だったから

な」

ガチャ

屋上のドアが開いて

夕立「ほい？」

雪菜「どうしたんですか？夕立ちちゃん」

夕立「みんなを学校の案内してたほい」

???「夕立どうしたの？」

夕立「あ、白露姉さん今友だちと話してほい」

白露「もし良かったら私たちにも紹介してよ」

夕立「うん分かったほい。えーとまずは誰から紹介したら・・・」

雪菜「じやまず私から夕立ちちゃんと同じクラスの姫終雪菜です。」

イツセー「次は俺たちだな。兵藤一誠だ」

祐哉「その弟の祐哉です」

雪菜「夕立ちちゃんのお姉さんと言う事は艦娘なんですか？」

白露「うんそうだよ。それじゃちゃんと紹介するね。白露型一番艦白露です！はい、

一番艦ですつ！」

???「白露型六番艦五月雨です」



「白露型駆逐艦七番番そして改白露型一番艦海風です。みなさんどうぞよろしくお願います。」

「白露型駆逐艦九番艦、改白露型の江風だよ！あ、読み方、間違えなんなよ。」

「あたし……白露型駆逐艦……その八番番艦。山風。いいよ……。別に。」

「ちわ！涼風だよ。私が艦隊に加われば百人引きさ！」

夕立「みんなな夕立の姉妹ぽい」

祐哉「よろしくお願いますみなさん」

白露型「「こつちこそよろしく」」

俺たちは白露さんたちと昼飯を食べながらいろんな事を話した。

### 【イツセー視点】

俺は放課後昨日の夜の事や白露さんの事を部長たちに話した。

リアス「まさか墮天使の総督がイツセーに接触するなんて」

イツセー「すいません部長」

リアス「イツセーのせいじゃないわよ。」

木場「それも気になるけどいきなり来た艦娘も気になるね」

イツセー「ああ、父さんに聞くとよくわからないって言ってた」

???「どうやら色々大変そうだね」

一同「!!!」

部室に突然男性とメイド服を着た女性が出て来た

リアス「お兄様！」

ゼノヴィア「貴方が魔王か？」

???「ああ、魔王のサーゼクス・ルシファード。リアスにデュランダル使いが来るとは心強いよ。その力仲間やみんなの為に使って欲しい」

ゼノヴィア「魔王様に言われたら仕方ない私の力仲間やみんなの為に使おうじやかないな」

リアス「お兄様は魔王なのですよ！仕事を放棄してなにを・・・」

サーゼクス「いやいやこれも仕事の内さ、実は近々やるトップ会談をこの学園でやる  
ことが決まった」

一同「・・・えええええー」

???「そう言うでよろしくお願いしました。」

イツセー「確か貴女様は？」

??? 「はいメイドのグレイフィアと申します」

魔王様たちが部室来て・・・

着信音【ドリームトリガー】

俺のスマホが突然になった

イツセー「すいませんちよつと電話に出てきます」

サーゼクス「構いませんよイツセー君出ておいで」

イツセー「ありがとうございます」

く何処かの廊下く

俺はスマホのディスプレイを見て電話に出た

イツセー「もしもし」

??? 『イツセー俺だ』

イツセー「どうした突然お前が電話をしてくるなんて珍しいな」

??? 『・・・近々トップ会谈するんだよな』

イツセー「そうだけど・・・なんかあつたのか？」

??? 『ああ少し厄介の情報が入ってな』

イツセー「厄介の情報？」

??? 『実は……って事が分かった』

イツセー「!!!それは本当か！」

??? 『間違えないこの情報は奴から聞いた』

イツセー「お前は どうする？」

??? 『俺は……だ』

イツセー「お前ならそう言うと思ったよ」

??? 『イツセー気を付けろよ』

イツセー「お前な……」

??? 『じゃまたイツセー』

イツセー「またな……」

俺は電話を切り

イツセー「仕方ない祐哉にあの力使いこなせるしかないか」

ドライグ『しかし相棒あの力は』

イツセー「大丈夫だドライグ祐哉絶対あの力を使いこなせるさ」

ドライグ『相棒……そうだな祐哉なら必ず……』

そして俺は部屋に戻った

## 第3話

「イツセー視点」

サーゼクス様が部室に来てその夜

サーゼクス「妹がリアスがお世話になってます」

イツセー父「いやいやリアスさんは凄く良い子ですよ」

うちの父さんとお酒を飲みながら話しをしていた。

リアス「イツセーなんでうちに読んだのよ」

イツセー「泊まる所がないから仕方なく、すみません部長」

リアス「・・・別に構わないわよ」

部長が少し拗ねた顔をしていた

祐哉「(グレモリー先輩も大変だな)」

イツセー「そうだ！祐哉ちよつと良いか？」

祐哉「・・・別に良いけど」

雪菜「私も・・・」

イツセー「ごめん雪菜ちゃん祐哉だけの話しなんだ」

祐哉「ごめん雪菜そう言う事だから」

雪菜「・・・分かりました」

「イツセーの部屋」

祐哉「それで話してなんだよアニキ」

イツセー「・・・今日の部活中にアイツから連絡があった」

祐哉「え？それって」

イツセー「アイツが言うにはけっこう厄介な事になつてゐるみたいなんだ」

祐哉「厄介な事？」

イツセー「ああ・・・だから祐哉あの力を使いこなせる用になつて欲しいんだ」

祐哉「!!!だよ」

イツセー「ん？」

祐哉「なんでだよ！アニキ！俺はあの力のせいであつて・・・」

イツセー「祐哉・・・分かつてるお前がああ力のせいでどんなに苦しんだか」

祐哉「だつたらなんで」

イツセー「・・・祐哉これからも雪菜ちゃんや眷属のみんなに守られながらいくつも

りか」

祐哉「!!」

イツセー「祐哉お前が頑張った事は俺がよく分かっているだからあの力だつて祐哉の力になってくれるさ」

祐哉「・・・アニキ俺はあの力だ怖いんだ。雪菜やみんなを傷付けるのが怖いんだ」

イツセー「大丈夫だ祐哉。力は力でしかないその力をどう使うのはその人次第だ」

祐哉「その人次第？」

イツセー「ああ俺は祐哉があので沢山の人の笑顔を守ることが出来るって俺は信じる」

祐哉「俺に出来るかな？」

イツセー「出来るさ祐哉なら絶対にな」

祐哉「アニキ・・・ありがとう・・・俺頑張ってみるよあの力を使いこなせる為にだから協力してくれるか？アニキ」

イツセー「もちろんだ祐哉」

【イツセー父視点】



みんなが部屋に戻ったころ俺はサーゼクスさんと話しをしていた。

サーゼクス「やはり艦娘は・・・」

イツセー父「ええ深海棲艦を倒す為に生まれた兵器ですよ」

サーゼクス「貴方は艦娘を兵器と見てるんですか？」

イツセー父「それはない！あの子たちは俺たちの大事は家族です」

サーゼクス「しかし他の人は・・・」

イツセー父「ええすこし前より減ったけどまだ艦娘を兵器だと思ってる人が居ます。

サーゼクスさんは艦娘をどう思っていますか？」

サーゼクス「私は艦娘をあんまり見た事がありませんだから貴方が教えて下さい艦娘の事を大事に思ってる貴方の口から艦娘の事教えて欲しい」

イツセー父「分かりました。しかしすこし長くなりますけど良いですか？」

サーゼクス「構いませんよ。夜は長いですから」

イツセー父「ありがとうございます。そうですねまずは・・・」

## 第4話

「今から三年前」

【イツセー視点】

イツセー父「それじゃ・・・カンパーイ」

一同「ニカンパーイ」

今俺の弟の祐哉が小学校を卒業してパーティーをしていた。

イツセー「祐哉も4月から中学生が」

祐哉「うん。そうだよ」

イツセー父「そう言うばアイツは？」

イツセー「今日も・・・」

イツセー父「そうか・・・そうだ祐哉、イツセー明日から暇か？」

イツセー「俺は大丈夫だ祐哉は？」

祐哉「俺も大丈夫だけどなんかあった？」

イツセー父「実は明日からしばらく鎮守府に泊まり込みで仕事することになったから

祐哉とイツセーに手伝つて欲しいんだけど良いかな？」

イツセー「それなら大丈夫だよ。なあ祐哉？」

祐哉「ああ大丈夫それに艦娘にも会って見たいし」

イツセー父「ありがとう。じゃ明日一緒に行こうか」

「次の日」

イツセー母「三人共気を付けてね」

一同「行つてきまゝ」

俺と祐哉は父さんの鎮守府に到着した

祐哉「個々が父さんの仕事場か」

イツセー「でも俺と祐哉を連れて来たんだ父さん」

イツセー父「・・・二人とも艦娘のこと知ってるか？」

イツセー「すこしぐらいなら学校で教えて貰ったけど」

イツセー父「どんな事か覚えて居るか？」

イツセー「確か艦娘は、戦艦の力を獲た女性事で」

祐哉「深海戦艦と言う物から守る女性ぐらいしか知らないかな」

イツセー父「それじゃイツセーと祐哉は艦娘をどう思っている？」

イツセー「うーん現実に見たことないからよくわからないかな」  
祐哉「俺も同じかな」

イツセー父「そうか・・・じゃあちゃんと見て判断してくれ」

イツセー「分かったよ父さん。祐哉もそれで良いだろう」

祐哉「うん」

イツセー父「じゃ入るぞ二人とも」

父さんのあとを追って俺と祐哉は鎮守府の中に入った

吹雪「司令官お帰りなさい」

一人の女性が敬礼をして話し掛けてきた

イツセー「父さん彼女は？」

イツセー父「ああ彼女が艦娘だ」

祐哉「彼女が・・・」

イツセー「(何処から見ても普通の女の子じゃないか)」

吹雪「司令官この人たちは？」

イツセー父「俺の息子たちだ」

吹雪「この人たちが司令官の・・・はじめまして特型駆逐艦一番艦吹雪よろしくお願

いします」

イツセー「・・・あ、息子の一誠だ」

祐哉「一誠の弟の祐哉です」

俺と祐哉が自己紹介をして・・・

????? 「司令官大変だ！」

イツセー父「どうした？響」

響「姉さんが勝手に出撃をして」

イツセー父「暁が！」

響「うんやっぱり姉さんはまだ」

イツセー父「まだ暁は・・・くっ吹雪！」

吹雪「はい！」

イツセー父「今すぐ赤城たち連絡して暁を追ってくれ」

吹雪「了解しました」

父さんの命令で吹雪さんは出ていった

祐哉「父さん何があった？」

イツセー「父さん話してくれ」

イツセー父「分かった・・・」

響「司令官！彼たちは一般人だ！」

イツセー父「こいつらは俺の息子だ。それに暁の為に息子たちを読んだんだ」

響「姉さんの為？」

イツセー父「ああだから大丈夫だ」

響「・・・分かった司令官が言うなら」

イツセー父「ありがとう響。イツセー、祐哉聞いて欲しいお前たちを読んだ意味を・・・」

父さんは話してくれた。数ヶ月前暁さんたちはブラック鎮守府に居てそこでは暁さんたちは兵器とた人間じゃないとか言う理由で無理難題の命令をしていた。特に酷かったのは暴力だった。司令官は任務に失敗すると駆逐艦に暴力していた。当時暁さんは妹の為に身代わりになって司令官の暴力をずっと受けてた。妹たちはいつも傷付いた暁さんを見て泣いてた。しかし司令官はいつも暁さんに暴力をして何時しか暁さんの心は壊れ始めてたそして暁さんの心は壊れ目には光が消えた。そんな暁さんを見て妹たちは暁さんを連れてブラック鎮守府を出て行って静な所まで行く途中暁さんの妹たちは父さんに出会い父さんの鎮守府に預かった。だが最初は妹たちは警戒をしていた。当然だ暁さんをこんなにした所に妹たちは行くはずもない。だけど父さんはキ

ミたちが居った鎮守府とは違うキミたちに暴力をふる司令官は此処には居ないもしまだ信用出来ないなら自分の所にきて確認してくれても構わない父さんがそんなことを言うのと妹たちは警戒しながらも父さんの鎮守府に入った。それから妹たちはこの鎮守府は自分たちが居た鎮守府じゃないことをが分かった。何故なら此所は艦娘たちが笑顔だったり此所の司令官の父さんと話しりしていた。それを見た妹たちも少しづつ認めはじめた。そして暁さんや妹たちが鎮守府に入り妹たちは暁さんを戻す為に此所であつたことを話して妹たちは暁さんを支えた。話しを聞いた俺のたちは・・・

イツセー父「・・・今話したのが暁たちの過去だ」

イツセー「そんな事があつたなんて」

祐哉「・・・」

イツセー「祐哉？」

祐哉「アニキ俺・・・」

イツセー「・・・大丈夫だ祐哉俺も同じ気持ちだ」

イツセー父「どうした二人とも？」

祐哉「父さん俺たち決めたよ・・・俺たちは艦娘を助けたい。笑顔にして心を救いた  
い」

イツセー「父さん俺も同じ考えた。人間だろうか艦娘だろうか関係ない救えるなら救うそれだけだ」

祐哉「だから今暁さんを救う」

そう言うのと祐哉は外に出ていった。

イツセー父「まったく祐哉」

イツセー「それが祐哉だからな」

響「司令官彼は大丈夫なのか？」

イツセー「安心してください祐哉は必ず暁さん救ってくる」

響「だけど姉さんが勝手に出撃した理由は私たちが居た鎮守府が攻めて来たからなんだ」

イツセー「ねえ響さんは暁さんの事大事？」

響「大事に決まってる！けど私たちは姉さんを救えなかった近くに居たのに大事な姉さんを私は……」

響さんから一筋の涙が落ちて……

響「……姉さん……私は……」

ナデナデ

響「……え?……」



イツセー「よく頑張ったな響さんもう大丈夫だ響さんたちは俺たちが救うよだから今だけ我慢しなくて良いよ」

響「くくくくわーーん」

響さんは俺の胸の中で泣いた。

【祐哉視点】

俺は暁さんを追うため海に出た。

祐哉「くそ暁さんが何処にも居ない」

ドカーーン

祐哉「!!あの音はもしかして」

俺は音がした方に急いで向かった

【暁視点】

数分前

暁「・・・」

ブラック司令官「会いたかったぞ暁」

暁「……………」

ブラック司令官「どうした暁なんか言ったらどうだ久しぶりに司令官に会ったんだからなもしかして嬉しくて黙ってるのか」

暁は黙って主砲を司令官に向けた

ブラック司令官「なんの積もりだ暁」

暁「……………邪魔……………は……………させない……………」

ブラック司令官「所詮は壊れた兵器か」

ドカーーン

暁のまわりが突然爆発した

暁「……………な……………に……………」

ブラック司令官「壊れた兵器はいらないだからお前を壊すそして今度は俺様に楯突かないようにしてやるよ」

ブラック司令官は暁に向かってイージス艦の主砲をうちまくった。暁は主砲の攻撃を避けるが

暁「……………!!……………!!」

イージス艦の主砲は激しさをまして

暁「……………!!!」

ドカーーン

遂に主砲は暁は捕らえ暁は主砲威力で跳ばされた

暁「・・・・・・・・動か・・・・・・・・ない・・・・・・・・」

跳ばされたた暁は動くことはできなつた。ブラック司令官はとどめを指す為に主砲を暁に向かつたて射つた

暁「・・・・・・・・」

暁は諦めて目を閉じた。

ブラック司令官「なんだ何が起きてる！」

暁が目をあけると主砲の弾丸が停まっていた

暁「!!!」

暁はなにが起きたか分からなかつた

祐哉「なんとか間に合つた」

【祐哉視点】

俺は間一髪で一人の艦娘に向かつてた弾丸を停める事に成功した

祐哉「キミが暁さんだよね」

暁「・・・・・・・・コクリ」

祐哉「良かったやつと見つけた」

暁「・・・・・・・・？」

祐哉「もう大丈夫だ暁さん。暁さんは俺が守る」

ブラツク司令官「兵器を守るだつと笑わせるな艦娘は兵器だ兵器だから俺の言うことを聞けば良いんだ兵器に艦娘に心はいらない俺さえ居れば俺の言うことを聞けばこいつら兵器は幸せなんだよそれが艦娘なんだよ」

暁「・・・・・・・・・・」

祐哉「そんな事はない」

ブラツク司令官「なに？艦娘は兵器じゃないと言うのか」

祐哉「ああそうだ暁さんたち艦娘は兵器じゃない暁さんたちだつて生けてるんだだからちゃんと心があつて俺たちと一緒に怒つてり泣いたりしてそして笑うだ。お前が暁さんを笑顔にしないなれ俺が暁さん笑顔するそして俺が暁さんの笑顔守る。知ってるか暁さんたち艦娘の笑顔悪くない」

ブラツク司令官「キサマ何者だ」

祐哉「通りすがり学生だ覚えとけ」

ブラツク司令官「キサマまとめてイージス艦の餌食にしてくれるわ」

ブラック司令官は祐哉たちに主砲を向け

祐哉「いやこれでチエックメイトだ」

俺はイージス艦の主砲の中に弾丸を入れ

ドカーーン

主砲は爆発したそしてイージス艦は炎上した

ブラック司令官「バカな」

祐哉「言つたはずだチエックメイトだと」

俺と暁さんは父さんの艦娘たちと合流して父さんの鎮守府に戻ってブラック司令官は父さんがよんだ憲兵に捕まった

クイクイ

祐哉「ん？」

横を見ると暁さんが服を引つ張つてた

祐哉「どうした？ 暁さん」

暁「……………な……………んで……………たすけ……………たの？」

祐哉「言つたはずだよ暁さんキミを笑顔にするって」

暁「…………でも……わたし……は」

祐哉「キミは一人じゃないよ」

暁「…………え？」

響「姉さん！」

雷「暁姉！」

電「暁お姉ちゃん！」

暁「…………みんな……」

妹たち暁さん抱きしめて

響「姉さんごめんなさい」

雷「もう暁姉だけ無理させないから」

電「暁姉ちゃんを絶対に一人にはさせないのです」

暁「…………みんな……わたし……」

響・雷・電「「だから私たち前から居なくならないで」」

暁「暖かい……みんなありがとう」

暁さんの目に光が戻った。

〈現代〉

イツセー父「私が経験したことです」

サーゼクス「分かりました。貴方に聞いて正解でした」

イツセー父「サーゼクスさん？」

サーゼクス「私も艦娘を救いたい私たちも協力させてください」

イツセー父「ありがとうございますサーゼクスさん」

サーゼクス「いえこれからは一緒に頑張りましょう」

イツセー父「はい此方こそよろしくお願いしますサーゼクスさん」

## 第5話

## 【祐哉視点】

ドカーーン

イツセー「おらどんどん行くぞ」

祐哉「くつままだレヴァア！」

レーヴァティン「うん」

モードレットド「オレを忘れるな！」

俺はある力を使いこなせる為にアニキたちと特訓をしていた。

祐哉「ハア・・・ハア・・・」

イツセー「大丈夫か？祐哉」

祐哉「なんとか」

???「はいマスターこれ」

一人の女性が俺にタオルとスポーツドリンクを渡して来た。

祐哉「ありがとうジャンヌ」



ジャンヌ「どうしましてマスター、ところでマスター特訓の調子どうですか？」

祐哉「うーんあと一歩でわかる気がするんだけど」

ジャンヌ「あと一歩が分かんない」と

祐哉「うん」

雪菜「祐哉さんたちそろそろ朝ご飯の時間ですよ」

一同「了解」

朝ご飯を食べるため我が家に戻るのだった。

どこかの鎮守府

「フフフやっぱりこの程度か」

「なんで同じ艦娘なのに」

「今は時代が変わったのよ」

「へーまだ残りが居たのね」

もう一人別の艦娘がやって来た。

「ええ、けどもう終わるわ」

「じゃ早く終らせましょう」

??? 「それじゃこれで終わりよ」

一人の艦娘が倒れてる艦娘にとどめを指そうとした時

??? 「悪いけど邪魔させて貰う」

一人の男性が倒れてる艦娘を助けて

「邪魔をしないでください」

「俺が一人で来たと思ってるのか」

「どう言うことですか」

「これで終わりです」

一人の女性が突然出て来て一人の艦娘に一撃与えて艦娘をぶっ飛ばした。

「くう」

「大丈夫ですか？」

「ええ大丈夫です。けどこのままじゃ」

「どうやら此所が退き時みたいですね」

「そうみたいです」

「それでは私達はこれで」

二人の艦娘は突然居なくなり

??? 「逃げたか、生き残りの艦娘は？」

「あそこにいる艦娘だけです」

「そうか」

「貴方たちは？」

「お前たちを助けに来た物だ」

「貴方の名前を聞いても良いいのですか？」

「はい。吹雪型九番艦磯波と言います。もし良かったら貴方たちのお名前を教えてください」

くれますか」

「構わないです。私は綾波型一番艦綾波です。」

「俺の名前は・・・」

兵藤家

祐哉たち「「ただいま」」

リアス「お帰りなさいみんな」

アーシア「皆さんどうでしたか？」

イツセー「うーんぼちぼちな」

祐哉「あれ父さんは？」

リアス「ついさつき電話あつて電話してるわ」

イツセー母「みんな席について朝ごはんしましょう」

一同「はい」

「朝ごはん中」

イツセー「父さん電話誰からだだったの？」

イツセー父「あああいつからだだった」

イツセー「あいつはなんだって」

イツセー父「また鎮守府狩りが出て来て一人の艦娘を回収したって」

祐哉「またか、最近多くないか」

雪菜「祐哉さん鎮守府狩りてなんですか？」

祐哉「最近いろんな所で何者かが鎮守府を襲つてる事件おきてるだ」

雪菜「犯人は誰かが分かるんですか？」

祐哉「いやまだ分からん（まあ誰かがは検討ついてるけどな）」

リアス「そう言えばイツセーたち今日の放課後空いてるかしら」

イツセー「俺たちは大丈夫です」

祐哉「放課後に何かあるんですか？」  
リアス「もう一人のビシヨップに会いに行くのよ」

## 第6話

【イツセー視点】

↳放課後↳

俺たちは部長に言われて旧校舎の何処かの部屋の前にやって来た。

祐哉「先輩此処が朝言つたて所ですか」

リアス「ええそうよ」

アーシア「私と同じビショップが此処にいるんですね」

雪菜「でもどうしてずっと部屋の中に居るんですか？」

リアス「人見知りだからよ」

イツセー「要するに引きこもりですか」

リアス「ええ」

朱乃「ですが一番契約が多いのです」

イツセー「マジですか！」

木場「パソコンとか色々使ってね」

祐哉「すげえな」

リアス「それじゃ入るわよ」

部長が入ると

祐哉・イツセー「え？」

俺や祐哉が入ると一つの棺桶があつた。

リアス「ギヤスパー起きなさい」

部長が棺桶を開けると

???「なんですか？リアス部長」

リアス「あなたを迎えにきたわギヤスパー」

イツセー「ん、」

目が合うと・・・

ギヤスパー「わくわく人々が沢山いますあと知らない人もいますくわく怖いです

くわく」

祐哉「・・・なにこれ」

出てきたのは女子の制服を来た金髪の子だった。

イツセー「・・・部長あの子男の子ですよね」

祐哉・雪菜 「「え、」

リアス 「あらよく分かったわね」

祐哉 「マジですか」

リアス 「ええマジよ」

祐哉がもう一回見ると・・

ギヤスパー 「う~~~~あんまり見ないで下さ~い」

祐哉 「こんな事つてあんまりだ~~~~」

祐哉が凄く落ち込んだ。

く数分後く

リアス 「紹介するわね彼はギヤスパー・ヴラデイ。ハーフヴァンパイアよ」

雪菜 「先輩ヴァンパイアってことは彼は真相なんですか？」

リアス 「いえ違うわ。その代わりギヤスパーには別の力があるわ」

雪菜 「別の力ですか？」

リアス 「ええ」

祐哉がギヤスパーに近づくど・・

ギヤスパー 「~~~~」



ギヤスパーの目が光かるとギヤスパーは違う場合に居た。

祐哉「……え」

雪菜「今のは」

リアス「あれがギヤスパーの力……魔眼の力よ」

「イツセー父の鎮守府」

【磯波視点】

イツセー父「あなたが磯波さんですね」

磯波「は、はいそうです。」

暁「秘書艦の暁よ」

磯波「あ、あの私を個々まで連れてきた子は」

暁「彼女なら」

綾波「暁あの人は？」

暁「兄さんなら今は学校よ」

綾波「分かった……」

綾波さんは司令室を出て行ってしまいました。

イツセー父「すまなかつた彼女は好きな人と久しぶりに会えると思ってたみたいでな。会えなかつた事に落ち込んでるだ」

磯波「いえ、大丈夫です」

イツセー父「ありがとう。暁、磯波さんを部屋に案内してくれ」

暁「分かつたわ司令官」

私は暁ちゃんのあとに付いて部屋に着いた。

暁「此処があなたの部屋よ」

磯波「あのこの部屋二人なんですが」

暁「それなら・・・」

ドタドタドタドタ・・・バーン

磯波「・・・え」

吹雪「磯波ちゃん」

ギュー

磯波「ふ、吹雪姉さん」

吹雪「会いたかつたよ〜磯波ちゃん」

磯波「くすぐつたいよ吹雪姉さん」

吹雪「ご、ごめん磯波ちゃん」

磯波「い、いえ私も姉さんに会えて嬉しいです」

吹雪「へへへこれから一緒に頑張ろうね磯波ちゃん」

磯波「はい！吹雪姉さん」

## 第7話

「イツセー視点」

イツセー「ギヤスパーの能力ですか？」

リアス「ええ。あれがギヤスパーの能力、停止世界の邪眼（フォービドゥン・バロール・ビュー）よ」

祐哉「効果はまさか」

朱乃「はい視たものすべての停止できます」

祐哉「マジか」

雪菜「でも今は感じだつと」

リアス「ええその通りよギヤスパーは力を使えこなせてないわだから今みたいに力が暴走してしまんのよ」

祐哉「だからこの部屋に要るですね」

朱乃「それもあるですが・・・」

ギヤスパー「うわくくお外怖いですくく」

リアス「まあ見た通りの恥ずかしがり屋で引きこもりよ」  
イツセー・祐哉「……………」

リアス「私たちもどうにかしたいんだけど」

祐哉「なるほど」

イツセー「……………」

俺はギヤスパーを見て。

イツセー「部長俺に任せてくれますか」

リアス「いいの？イツセー」

イツセー「はい！俺に任せてください」

リアス「ありがとうイツセーお願いするわ」

イツセー「はい！」

祐哉「まあアニキだけだと心配だから俺も協力するよ」

ゼノヴィア「私たちも強力するぞイツセー」

アーシア「はい！頑張ります。」

小猫「……………」

雪菜「私も強力します」

イツセー「ああサンキューなみんな」

こうして俺と祐哉はギヤスパアの恥ずかしがり屋の克服と力を少しでも使えこなせる為に特訓が始まった。しかし……

ギヤスパア「もう立てませ〜ん」

祐哉「……これ大丈夫かな〜」

アーシア「ハハハ……」

ギヤスパアはゼノヴィアや小猫ちゃんのせいでギヤスパアはグツタリしていた。

ゼノヴィア・小猫「♪〜♪〜♪〜♪」

雪菜「なんか二人とも生き生きしてませんか？」

アーシア「ハハハ……」

匙「お、やってるな」

イツセー「匙どうした？」

匙「いや会長に聞いたからな気になって見に来たんだ」

イツセー「なるほどな」

匙がギヤスパアを見ると……

匙「銀髪少女じゃないか」

イツセー「男の子だけだな」

匙「え？」

俺がそう言うとき匙はもう一度ギヤスパーを見て・

匙「嘘だろこんなことって」

イツセー「わかるぞ匙」

アーシア「ハハハ・」

祐哉「ところで俺たちに用ですか？・・・アザゼルさん」

イツセー以外「!!!」

アザゼル「まったく赤龍帝とその弟にばれたか」

イツセー「俺と祐哉にばれたくなったらもつと気配消さないとダメですよ」

匙「なんで墮天使の総督が此所に？」

祐哉以外構えると・

祐哉「大丈夫だよみんなアザゼルさんは争う気はないから」

アザゼル「赤龍帝の弟の言う通りだ俺は争う気はないから楽にしてくれ」

イツセー「アザゼルさん一人で大丈夫ですか？」

アザゼル「ま、まあ大丈夫だろう」

アザゼルさんは顔がすこし青くなりながら言った。アザゼルさんはすこし助言して

帰って行った。そして・

ゼノヴィアたちにおかげでギヤスパーは・・・

ギヤスパー「なんか落ち着きます」

ゼノヴィアはギヤスパーの頭から紙袋を被らせた。

イツセー「なんかすげえなお前」

ギヤスパーの件がなんとか解決？して次の日俺は朱乃さんの家に呼ばれた。

イツセー「此所が朱乃さんの家か」

朱乃「お待ちしていました。イツセー君」

イツセー「は、はいお邪魔します」

俺は朱乃さん家に入って。

イツセー「朱乃さん俺に用ってなんですか？」

朱乃「それでしたら・・・」

???「私があなただのです。赤龍帝兵藤一誠」

イツセー「・・・あなたは？」

???「私はミカエルと言います」

イツセー「そのミカエルさんが俺になんの用ですか？」



ミカエル「実はあなたにこれを渡したくて」

俺の前に一本の剣が出て来た。

イツセー「これは？」

ミカエル「聖剣アスカロンです。これをあなたにお渡しします」

イツセー「なんで俺にこれを？」

ミカエル「あなたならこのアスカロンを間違った使い方しないと思うので」

イツセー「本当に良いですか？」

ミカエル「ええあなたに託します」

俺はアスカロンを受けとり

イツセー「受けとのは良いけどどうすれば良い良いだ？」

ミカエル「赤龍帝の籠手と一つにしてくれば良いですよ」

イツセー「なるほど。行けるかドライブク？」

ドライブク「ああ相棒がいつも通りしてやれば問題ない」

イツセー「分かった」

俺はドライブクと意識を集中させて・・・

ドライブク「成功だ相棒」

イツセー「これが・・・」

ミカエル「どうやらうまくいったようですね。それでは私はこれで」  
イツセー「ミカエルさんちよつと聞きたいが・・・」

ミカエル「すいません私は今忙しくつて・・・でもなんか聞きたい事があるなら会談の席で聞きましょう」？

イツセー「本当ですか！」

ミカエル「ええこの私で良かったら聞かせて下さい」

イツセー「ありがとうございます」

ミカエル「それでは会談の席でまたお会いしましょう」  
その言うとミカエルさんは帰ってった。

朱乃「どうぞ」

イツセー「ありがとうございます朱乃さん」

俺は朱乃さん家でお茶を頂いてた。

イツセー「朱乃さん聞きたい事あるんですが良いですか？」

朱乃「ええ構いませんよイツセー君」

イツセー「あの朱乃さんって本当は墮天使なんですか？」

朱乃「!!イツセー君なんでそれを」

イツセー「すいませんこの間アザゼルさん聞いて、嫌だったら俺はこれ以上聞きません。変な事聞いてすいません」

朱乃「いえいきなりで驚いただけですから大丈夫ですわ。別の隠してた訳ではありませんし良いですイツセー君」

朱乃さんは墮天使の男性と人間の女性の間に産まれたハーフだった。今から十年前墮天使の父親は急に仕事が入り家にはまだ小さい朱乃さんと朱乃さん母親だけになった。そこに別の墮天使が急に襲いかけてきた。その時二人の子供が墮天使を追い払いその後父親帰ってきてその親子は無事にすんだ。

朱乃「その子の顔はあんまり覚えていませんがその子が私に言ってくれた言葉覚えています。」

朱乃「その子は私に・・・」イツセー「キミを泣かす悪い人はボクが懲らしめすから安心して。」

朱乃「え！」

イツセー「まさかあの時助けた女の子が朱乃さんだったなんて・・・」

朱乃「イツセー君！」

突然朱乃さんは俺に抱きついて来た。

イツセー「あ、あ、朱乃さん！どうしたんですか？」

朱乃「私ずつとお礼を言いたかった。でも顔や名前知らなくてだからありがとうございますイツセー君」

イツセー「(朱乃さん・・)いえ俺の方こそ助けられて良かったです」

俺と朱乃さんはすこしの間に抱き合った。

朱乃「でもなんでイツセー君あんなところに居たのですか？」

イツセー「まあ修行かな。でも朱乃さんなんで悪魔になったんですか。」

朱乃「あの時自分の弱かったからお母様守れなかっただから家族を守る為にリアスに頼んで悪魔になったのです。」

イツセー「そうだったんですね」

朱乃「ええけどどれも中途半端まま私はいったい何をしたいんでしょう。」

イツセー「そんな事はありません！朱乃さん中途半端じゃありません！朱乃さんは俺たちの先輩でオカ研の副部長です。朱乃さんが堕天使とか悪魔とか関係ありません。それでも朱乃さんがまだ不安なら俺が朱乃さんの笑顔を守ります。」

朱乃「〃〃〃〃イツセー君・（私イツセー君に墮とされましたわ）」  
イツセー「え？」

また朱乃さんは俺に抱きついてきた。

イツセー「〃〃〃〃あ、朱乃さん」

朱乃「ありがとうございます、イツセー君」

イツセー「〃〃〃い、いえ」

まあ朱乃さんが元気になって良かった。けど部長に見つかりオシヨキを受けたの別の話し。

↳トップ会谈当日

【祐哉視点】

俺たちは会谈の為に部屋居た。

リアス「それじゃギヤスパー、小猫私たちは行ってくるわね。」

達也「本当に俺と信二も参加して良かったんですか？」

リアス「ええ構わないわ。それにあなたたちの事知りたいと言ってたわ」

信二「ありがとうございます。グレモリー先輩」

イツセー「ゲームや色々置いとくなギヤスパー」

ギヤスパー「ありがとうございます イツセー先輩」

小猫「お菓子も沢山ありますから」

祐哉「(アニキあれは多分)」

イツセー「(ああ自分の分だろんな)」

リアス「じゃ行くわよみんな」

俺たちは魔方阵に乗って会談の場合まで来て、サーゼス様、アザゼルさん、ミカエル様でこれからの事を話し合ってた。だが突然まわりが停止した。

リアス「これは、一体！」

アザゼル「まさかあのハーフヴァンパイア力を利用して」

祐哉「それはありませんよアザゼルさん」

アザゼル「え？どう言う事だ？」

達也「恐らく何者が攻めて来ると思いあの二人には護衛をつかさたんです。」

アザゼル「なるほどじゃこの停止は・・・」

サーゼスス「敵の誰かが停止させたんだろう」

アザゼル「だな。これからどうする？」

サーゼスス「まずは、ギヤスパ―君たちの回収からだな」

達也「だったら俺の力でギヤスパ―さんの所まで飛びます」

サーゼスス「分かった。けど無理は禁物だいいね？」

達也「分かりました。」

こうして俺、達也、アニキ、グレモリー先輩で達也の力でギヤスパ―さんたちが部屋まで飛んできた。

レーヴアティン「あれマスターおかえり〜」

沖田「なんか有ったんですか？」

エリザベート「それよりこいつらは何？」

モルドレッド「恐らくマスターが言っただ敵だろんな」

そこにはボロボロになった敵が居た。

イツセーたち「……………」

祐哉「ま、まあ無事なら良いか？」

イツセー「だな」

達也「所でこれどうする？」

ギヤスパー「・・・僕がなんとかします」

イツセーたち「!!!!!!」

リアス「大丈夫なのね」

ギヤスパー「はい！皆さんががんばってるんです。それに僕もオカ研の男子です。」

イツセー「それじゃ任せたぞギヤスパー！」

ギヤスパー「はい！」

ギヤスパー先輩の目が光停止してた学園が戻った。

ギヤスパー「な、なんとかかりました」

リアス「よくがんばったわねギヤスパー」

ドカーン  
!!!!

イツセーたち「!!!!!!」

リアス「い、今のは」



祐哉「達也！」

達也「ああみんな捕まれ跳ぶぞ」

俺たちは達也に捕まり跳んで

イツセー「こ、これは」

信二「みんな！」

祐哉「信二！みんな無事か！」

信二「なんとかな」

リアス「一体誰が」

???「フフフ」

祐哉「誰だ！」

???「これはこれはこの私を知らないとは」

イツセー「アザゼルさん彼女は？」

アザゼル「あいつはカトレア・レヴィアタン」

カトレア「そして今の冥界を認めない一人よ」

アザゼル「なるほどお前らが愛宕たちに調べさせた禍の団《カオス・ブリゲート》だ  
な」

カトレア「ええその通りよ」

祐哉「アザゼルさん禍の囲ってなんですか？」

アザゼル「簡単に言うると今の世界を認めない奴らだ」

イツセー「それって」

アザゼル「ああコカビエルと同じだ」

カトレア「あんな堕天使と一緒にしないでほしいわね」

達也「だがあんた一人で俺たちに勝つつもりか？」

カトレア「誰が一人と言った」

アザゼル「!!!みんな伏せろ！」

ドカーン

アザゼル「ちい！不意討ちとはやってくれたな」

アザゼルさんは今の攻撃で右腕がなくなった。

愛宕「アザゼル!!」

アザゼル「大丈夫だ。たかが右腕がなくなっただけだ」

愛宕「たかがあってなんですか!!また自分を犠牲してどんだけ私が心配したと思ってるんですか！」

アザゼル「わ、分かったから泣くなって俺がお前の涙に弱いんだよ」

愛宕「じやもう一人でどっかに行かないで下さい」

アザゼル「わ、分かった」

アルトリア「そろそろ良いですか？」

アザゼル・愛宕「あ！」

信二「でもさっきの攻撃はいつたい？」

祐哉「あそこだ」

俺が言うのと8人の艦娘が現れた。

カトレア「紹介するわあれは私を使う兵器たちよそして・・・」

沢山の魔方陣が出て来てそこから沢山の悪魔が出て来た。

祐哉「艦娘が兵器だと」

カトレア「ええ艦娘は兵器です」

祐哉「艦娘は兵器じゃねえー！」

達也「祐哉落ち着け」

信二「やっぱり敵だったんだな白露さん！」

白露「ごめんでも私たちはもうこれしかないの！」

村雨「此所であなたたちを倒します」

??? 「そんな事間違つてるかい」

??? 「そうだよこんな事間違つてるよみんな」

祐哉「なんで時雨さんと夕立さんが此所に？」

夕立「ごめん、白い露姉さんたちの様子が変だったからあとをつけたかい」

祐哉「マジかよ」

春雨「時雨姉さん、夕立姉さんごめんなさい私たちはもう止まる訳にはいきません」

五月雨「ですから姉さんたちでも倒します」

時雨「だったら僕と夕立が白露たちを止める」

祐哉「時雨さんダメだ！姉妹同士戦うのは」

時雨「姉妹だからこそ僕たちが止めないとダメなんだ！」

祐哉「時雨さん……」

イツセー「祐哉……」

祐哉「分かった……時雨さん、夕立さん此所をお願いします。」

白露たちを時雨さんと夕立さんに任せて俺たちは沢山いる悪魔の方に向かった。

海風「二人だけで私たちを止めるつもりですか」

時雨「そのつもりだよ！夕立行くよ」

夕立「うん！夕立たちが止めるほい」

祐哉「カトレアあんたは俺が倒す」

カトレア「あなたごときで私を倒せると思ってるのかしら」

祐哉「絶対・・・倒す！」

カトレア「無理・・・ね」

悪魔たちが襲ってきた。

イツセー「ドラゴンシュート！」

アニキの一撃で襲ってきた悪魔がぶっ飛ばした

イツセー「俺もお前たちを許さない。《バランス・ブレイカー》」

アニキは赤い龍のアーマーを着け悪魔の方に向かった。アツセー「祐哉お前も来い」

祐哉「分かった。レヴィ」

レーヴァティン「了解」

俺は精神を集中すると・・・

祐哉「（大丈夫、大丈夫あの時のように・・・）」

だが・・・パリーン！

拒否反応が起こした

祐哉「なんで」

レーヴアティン「大丈夫？マスター」

祐哉「ああ（なんで出来ないんだよ）」

雪菜「（祐哉さん・・・）」

【達也視点】

達也「ちいキリがない」

???《大丈夫だよ達也》

達也「え、まさかななか！」

ななか《うん実は達也に渡したい物があるの》

達也「これは？」

ななか《ロストドライバーこれで達也は変身出来るよ》

達也「良いのか？ななか」

ななか《うん達也は約束守る為にがんばってるからだから私も少しでも達也を助けな

りたくて》

達也「ありがとうななか」

ななか《うん！がんばってね達也》

ななかがそう言うのと消えた

達也「本当にありがとうななか」

悪魔A「お前は此所で倒す」

達也「それはどうかな」

悪魔B「なに」

達也「どうやら切り札は俺のもとにくるようだな」

ロストドライバーを装着すると

《ジョーカー》

達也「変身！」

ロストドライバーにジョーカーメモリーをさして・

悪魔A「お、お前は一体？」

???「俺はジョーカー。仮面ライダージョーカー」

仮面ライダージョーカーに変身した

ジョーカー「さあお前たちの罪を数えろ」

【信二視点】

沢山の悪魔が俺に襲って来た。

信二「一体何体いるんだよ！」

悪魔C「ハハハドンドン行くぞ」

信二「そうだな祐哉や達也が頑張ってるだ俺が頑張らないとな」

俺は右腕に力をいれると右腕の形が変わった

悪魔G「なんだあの腕は？」

信二「これが俺の力金色の右腕だ」

### 【祐哉視点】

祐哉「(どうしてなんだ)」

時雨「くう」

祐哉「時雨さん！俺は何をしてるんだ」

ジョーカー「もつと自分に自信をもって」

信二「そうだ！自分の力に信じろ」

祐哉「達也、信二」

レーヴァテイン「私たちはマスターの味方だから」

沖田「だから頑張ろマスター」



雪菜「私は絶対に祐哉さんを裏切りません。祐哉さんには私がします。だから祐哉さんは一人じゃありません！」

祐哉「みんな・・・ありがとう。行くぞレヴァー！」

レーヴァテイン「了解マスター」

俺はもう一度精神を集中して・・・

祐哉「(そうだ俺は一人じゃない俺にはみんながいる)」

レーヴァテインが消え俺の姿は黒い衣装を纏った

悪魔E「なんだあれは」

祐哉「これが俺の本当の力・・・鬼纏《まとい》だ」

カトレア「その程度の力で・・・」

???「それはどうかな？」

誰の一撃で悪魔の数が減った

カトレア「誰だ！」

イツセー「遅かったなヴァーリ」

ヴァーリ「悪いイツセー伝言あって少し遅れた」

祐哉「でもナイスタイミングだ兄さん」

カトレア「バカな！なぜ赤龍帝と白龍皇が一緒にいる！」

ドライク「簡単な事だ」

アルビオン「戦争より楽しい事ができた」

ドライク・アルビオン「それだけだ！」

カトレア「だが白露なにやってるのあいつらをやれ」

白露「分かりました」

祐哉「お前はいつまで白露さんたちを利用するば気がすむだ！」

カトレア「もちろん壊れるまでだ」

祐哉「ふざけるな！」

村雨「それが私たちだから」

祐哉「違う！」

村雨「違う！私兵器だから」

祐哉「このわからず屋が！」

村雨「!!」

祐哉「キミが兵器ふざけるな！どこが兵器だ！俺から見れば可憐で可愛い女の子だ

！」

村雨「あ／／／」

祐哉「だからそんな悲しい事言うなよ」

村雨「わ、私は・・・」

祐哉「本当どのキミの気持ちを教えて」

村雨「私たちを・・・助け・・・けて・・・」

祐哉・達也・信二「助ける！」

イツセー「悪魔たちは俺たちが引き受けるだから祐哉、達也、信二はカトレアを倒し  
白露さんたち助けるだ」

祐哉・達也・信二「当然!!」

アニキたちは悪魔たちの方に向かった

カトレア「この役立たずどもめ」

祐哉「カトレア・テメエは」

達也「俺たちが」

信二「倒す！」

祐哉・達也・信二「さあお前の罪を数えろ！」

カトレア「これでも食らいなさい」

カトレアは魔方陣を出し魔方陣から複数のビームが跳んで来た

信二「その程度の攻撃。フン！」

信二の一撃でカトレアの攻撃を玉砕した

カトレア「な、ならこれなら」

カトレアが次の攻撃すると・・・

ジョーカー「させるか」

達也が攻撃するよりカトレアに一撃を入れた。

カトレア「ぐう」

祐哉「まだまだ行くぜ」

達也が攻撃したあと俺がカトレアに一撃を入れた

カトレア「お、おのれ」

祐哉「達也、信二トドメだ！」

達也・信二「ああ」

信二「衝撃のファーストブリットー」

信二の一撃でカトレアがぶっ飛ばした

カトレア「がは！」

ジョーカー「追い討ちだ」

《ジョーカー・マキシナムドライブ》

ジョーカー「ライダーキック」

さらにカトレアを飛ばし

カトレア「ま、まだ・・・」

祐哉「いやこれでフィニッシュだ。トレース・オン」

俺は弓と弓矢を出し

祐哉「カラドボルク!!」

カトレアを撃ち抜きカトレアを倒した。そしてトップ会談は成功して。悪魔、墮天使、天使は同名を結んだ。その後アニキがミカエルに頼みアーシアとゼノヴィアの祈りを出来るように頼んだ。ミカエルさんはその頼みを受けてくれた。その後・・・

く三日後部室く

イツセー「なぜアザゼルさんが此所に？」

アザゼル「お前たちのレベルアップする為になサーゼススの指示でな禍の団の対策だな。因みにこの右腕はスペッククギミックだ」

愛宕「私も居ます」

祐哉「わ！ビックリした」

突然愛宕さんが出て来た

愛宕「アザゼルまだサーゼスさんの伝言がありますよ」

アザゼル「そうだったサーゼスがこの間赤龍帝の家に訪問した時に色々勉強になつてはサーゼス・ルシファアの命ずるオカ研女性部員と一部の艦娘は兵藤家に行き赤龍帝とその弟と一緒に住む事」

一同「「えええええー」」

くその日の放課後く

朱乃「あなたの元に到着しました」

イツセー「朱乃さん」

朱乃先輩がアニキに抱きついた。

暁「祐哉兄さんだいま」

祐哉「ああ」

村雨「私や時雨も良いのか？」

時雨 「大丈夫だよ村雨」

響 「イツセー兄さんお願いがあるのけど良いかな？」

イツセー 「別に良いよ」

響 「本当に。私ね久しぶりに一緒にお風呂に入りたいな」

暁 「私も祐哉兄さんと一緒にお風呂に入りたい！ほら村雨と時雨も祐哉兄さんと一緒にお風呂に入ろう」

時雨 「／／／な！」

村雨 「／／／私は祐哉さん良いなら」

ゴゴゴ・・・

イツセー・祐哉 「嫌な予感」

リアス 「ちよつと私たちと」

雪菜 「O・H A・N A・S Iしましょうか」

・・・ハハハハハハ

アニキと俺はオシヨキされた。

【???  
視点】

??? 「あの人たちなら・・・幻想郷を救えるかも知らない」



# 第1話

## ハイスクールD×D・東方編 幻想郷のヘルキャット

【祐哉視点】

・・・あれここは？

??? 「・ねが・・・すけ・」

誰だ

??? 「い・・・なら・・・で」

え？

??? 「・・・りに・・・いで」

分かった俺が一人にしない

??? 「・・・とうに」

ああ

??? 「じゃ・・・そ・・・」

約束だ

??? 「うん」

そして・・・

祐哉 「あれは夢か」

??? 「・・・スウ・・・スウ・・・」

祐哉 「ん？なんか隣に」

俺の隣に居たのは

祐哉 「む、村雨さん!!」

村雨さんが寢息を立てながら俺の隣で寝てた

祐哉 「村雨さん起きて!」

村雨 「うゝゝん」

村雨さんが突然寢返りをして・・・

祐哉 「／／／な!」

村雨さんのパジャマがはだけて

祐哉 「む、胸が、そ、そんな事よりは、早く起こさないと村雨さん起きて」

村雨 「うゝゝまだ寝かせてよゝゝ」

ガバツ

「祐哉「／＼／＼な！村雨さん！」

村雨「・・・スウ・・・」

村雨さんが俺に抱き付きながらまた寝てしまった

祐哉「む、胸があ、当たって」

コンコン

暁「祐哉兄さんそろそろ朝御飯の時間だよ」

祐哉「(暁ちゃん！まずい)」

雪菜「どうしました？暁ちゃん」

暁「雪菜さん祐哉兄さんノックしても返事がないんです」

村雨「・・・祐哉さん・・・もつと・・・触って」

雪菜・暁「!!!」

雪菜「暁ちゃん！」

暁「はい！」

ガチャ

祐哉「二人ともこ、これは」

雪菜「祐哉さん言い訳はそれで良いんですか？」

暁「祐哉兄さん準備は出来ていますか？私は出来てます。」

・・・・ハハハ死兆星がみえる

雪菜・暁「祐哉さん（兄さん）の変態!!」

【イツセー視点】

祐哉が天誅食らう数分前

ゴソゴソ

イツセー「ん」

俺は起きて布団の中を見ると

朱乃「到着」

イツセー「朱乃さん！」

朱乃「フフフイツセー君おはようございます」

イツセー「朱乃さんどうしたんですか？」

朱乃「イツセー君の体温が感じたくて」

イツセー「朱乃さん」

俺の顔に朱乃さんの顔が近付いて・・・

リアス「朱乃何をしてるのかしら」

イツセー「部長！」

いつの間にか部長が起きて・・・

朱乃「後輩とのコミュニケーションですわ」

リアス「後輩ね」

アーシア「あれ々々もう々々朝ですか」

イツセー「大丈夫だぞアーシア」

アーシア「だったらイツセーさんと一緒に寝ます々々スウ々々」

ドサツ

イツセー「なんだ」

リアス「朱乃はすぐに私の大事な物を取ろうとし」

朱乃「少しぐらい良いんじゃないリアスはケチだわ」

リアス「この家も改築したばかりなんだから」

二人は口喧嘩しながら枕投げしていた

イツセー「ん、いま何って」

俺は自分の部屋を見ると・・・

イツセー「な、なんじゃこれわ々々」

## 【祐哉視点】

イツセー父「サーゼススさんが家の改築にも詳しくね一晩でやってくれたんだ」

イツセー「なるほど確かに部長たちだけじゃなく艦娘たちや達也たちも住む事になったからな」

イツセー母「それでも部屋は沢山余ってるんだけどね」

達也「それより祐哉は大丈夫？」

祐哉「な、なんとか」

村雨「ごめんね祐哉さん」

白露「まったく村雨はこれから気を付けなさいよ」

俺が天誅をくらった後村雨さんは白露さんに説教を受けた

祐哉「でも雪菜たちが家が改築したのによく迷わなかったな？」

雪菜「私は祐哉さんの監視役ですから」

暁・村雨「私たち艦娘だから」

祐哉「うんよくわからん」

それから数時間後

祐哉「今日から夏休みですけどどうしますか？」

俺たちはオカルト研究部の部室で話し合っていた

リアス「私たちオカルト研究部は冥界に帰るつもりよ」

祐哉「それじゃ俺たちはどうすっかな」

???「申し訳けございません。貴方たちのお力をお借りしたいのですが」

突然一人の女性が出て来た。

祐哉「貴方は？」

???「私は幻想郷からきました八雲紫ともうします。」

イツセー「八雲さんが俺たちに何の用だ？」

紫「貴方たち幻想郷を助けて欲しいのです」

こうして俺たちの夏が始まった。

## 第2話

「イツセー視点」

突然俺たちの前に一人の女性が出て来て

イツセー「幻想郷を救う？」

八雲「はい。貴方たちに私たちの幻想郷を救うて欲しいのです。」  
リアス「でも私たちは幻想郷の事知らないわ」

八雲「それなら私が説明します」

祐哉「俺は構わないよ」

雪菜「祐哉さん！」

祐哉「八雲さんが助けを求めてるなら俺は助けたい」

イツセー「(祐哉・・) だな困っている人がいるなら助けないとな」

祐哉「アニキ良いのか？」

イツセー「ああお前を一人で行かせるのは心配だからな」



祐哉「ありがとうアニキ」

リアス「イツセーたちが行くなら私たちも行くわ」

イツセー「部長！良いですか？」

祐哉「冥界の方は大丈夫なんですか？」

???「その心配はいらないぜ」

突然アザゼル先生が現れた

達也「アザゼル先生！」

信二「心配ないでどう言うことですか」

アザゼル「今さっきサーゼクスに連絡してな。その幻想郷について調査してこい

さ」

リアス「分かったわアザゼル」

祐哉「他のみんなはどうする？」

雪菜「私は祐哉さんの監視役ですから祐哉さんについて来ます」

達也「俺も行くぞ祐哉」

信二「突然俺が俺も行くぞ」

村雨「私たちは祐哉さんたちには恩がありますですから私たち白露型が祐哉さんたちを守ります」

暁「私たち暁型も一緒に行きます」

アザゼル「もちろん俺も行く」

愛宕「アザゼルは私が監視するので安心してください」

アザゼル「愛宕も来るのかよ」

愛宕「ええ。アザゼルが浮気しないように見張りますから」

アザゼル「・・・マジか」

愛宕「なんかありますか？アザゼル」

アザゼル「いえありません」

八雲「みなさんありがとうございます！」

祐哉「ところでどうやって幻想郷に行くのですか？」

八雲「それなら私の能力で行きます」

イツセー「能力？」

八雲さんの近くにスキマが出て来た

八雲「これが私の能力のスキマです。」

リアス「なるほどこれで幻想郷まで行けるのね」

八雲「ええ。詳しいことはスキマの中で言います」

イツセー「分かりました」

イツセー母「気を付けていてくるのよ」

イツセー父「こつち任せて行つてこい」

一同「「いつてきます！」」

俺たちは八雲さんが出したスキマに入つてつた

【祐哉視点】

俺たちはスキマに入りスキマの中で八雲さんに幻想郷についてそして今幻想郷で起きてる異変について教えてくれた。

祐哉「なるほど幻想郷にもいろんな種族がいつて」

信二「時々異変と言うのがおきる」

イツセー「その異変は幻想郷の巫女が中心になつて解決をする。」

達也「そして今回の異変は幻想郷の住人が起こし異変じゃなく幻想郷から来た何者が起こした異変」

八雲「はい。その異変のせいで幻想郷は・・・」

???「フフフ・・・やつと見つけたそ八雲紫」

祐哉「誰だ！」

俺たちが声がきこえた方に向けると・・・

???「私たちは光の先導者」

白に衣装を纏った人たちが現れた。

## 奪われた力

『祐哉視点』

俺たちは八雲さんのスキマで幻想郷に向かう途中に光の先導者と言う人たちが俺たちの前に出て来た。

紫「あなたたちは」

??? 「八雲紫まさか別の世界から助けを呼ぶとはしかし我々の欺くのはまだ甘い」

祐哉「(別の世界)」

??? 「だが・・・」

光の先導者の一人が俺の方を見てきた。

??? 「・・・(コクリ)」

俺の側に光の先導者の一人が近付き

??? 「・・・あなたの力貰う」

祐哉「な！」

突然俺にキスをしてきた

## 『イツセー視点』

紫「くつ仕方ありません。皆さんすいませんあとは自分たちの力でお願いします。」  
イツセー「どう言う事ですか八雲さん」

八雲さんは突然スキマを開き俺たちをスキマから追い出した

## 『祐哉視点』

祐哉「・・・此所は・・・ダメだ・・・力が・・・」

???「ちよつとあなた大丈夫」

祐哉「・・・だれ・・・」

そして俺は意識がとだいた。

祐哉「ん、此所は」

???「あ！目が覚めたんだ」

祐哉「あなた？」

???「ちよつと待ってね」

???「あ目が覚めたのね」

祐哉「すいません此所は何処ですか？」

「そうねまず自己紹介からね。私は八意永琳よ」

「スーさんはメディスンよろしくね」

祐哉「兵藤祐哉です。」

永琳「此所は永遠亭よ」

祐哉「永遠亭？もしかして此所は幻想郷ですか？」

永琳「ええそうよ。もしかしてあなたは紫が連れて来た外来人」

祐哉「外来人はよく分かりませんが八雲さんの力で来ました。（あれ俺が此所に居るって事は）」

永琳「どうしたの？」

祐哉「すいません此所に居るのは俺だけですか？」

永琳「運ばれたのはあなた一人だけよ。」

メディスン「スーさんが来た時はあなただけだったよ」

祐哉「そうですか」

永琳「紫が連れて来た事は今幻想郷に起きている異変について聞かれているのよね」

祐哉「はい。だけど説明の途中に光の先導者が乱入して来て」

永琳「そう言う事ね此所に紫が居なかったたらそう言う理由があったのね」

祐哉「此所は大丈夫なんですか？」

永琳「ええ大丈夫よ。永遠亭のまわりには結界が張ってるから安心して大丈夫よ」  
祐哉「他の人も永遠亭に居るのですか？」

永琳「けが人や力がない人なら此所に居るは」  
祐哉「それ以外の人は今は？」

永琳「幻想郷まわりの見回りに行ってるわ。」

ドカーーン

突然永遠亭の近くで爆発音した。

メデイスン「永琳！」

永琳「迷いの森の近くね」

ー迷いの森の近くー

「まさか迷いの森を自力で抜けて来るとは」

「あなたのあの方の為に働きなさい」

「へっ誰がテメエたちの為に働くかよ」

「そうですね。なら力ずくで行きます」

永琳「そうは行かないわよ。」

??? 「永琳！」



永琳「無事。妹紅！」

妹紅「ああ今の所はな」

祐哉「永琳さん」

妹紅「お前は？」

永琳「紫が連れて来た外来人よ」

妹紅「そつかワタシは妹紅だ。まあ戦闘中じゃなかったらゆつくり紹介できるんだがな」

祐哉「いえかまいません」

???「あれ誰かと思つたらマスターじゃないですか」

祐哉「え！まさかあなたは沖田さん！」

沖田「ええ沖田さんですなよ。いや今は元マスターですね」

祐哉「そんな・・・沖田さん」

妹紅「おい！お前！しっかりしろ」

沖田「それじゃさようなら元マスター」

妹紅「まずい」

???「させるか！」

沖田「誰だ！」

??? 「俺かならおしてやるよ。変身！」

『ジョーカー』

??? 「俺は仮面ライダージョーカー！ さあお前の罪を数えろ！」